魔法少女リリカルなのは ～憎悪の戦士と神龍の騎士～

japan17

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～憎悪の戦士と神龍の騎士～

【Ｎコード】
Ｎ４７０７Ｙ

【作者名】
ｊａｐａｎ１７

【あらすじ】
一人の少年は魔法を持つ者達により家族を失い、代わりに果てしない憎悪の心を手に入れた。
一人の少年はいくつかの力を残し、他の全てを失った。
家族となった二人の少年は出会う。
願いを叶える宝石と、それを求める少女達と。
それは、果てしない闘いの始まり。

憎悪の心を持つ少年の救済と、思い出を失った少年の再生を促す闘いの始まりだった。

無印編プロローグ　～始まり～（前書き）

どうも。
ｊａｐａｎ１７です。

はじめましての人も、「なんだ、お前か」って人もどうもです。

作者の厨二とリリなの好きのせいで、投稿しました。　まだ、デビュー作も完結してないのに・・・。

とまぁ、こんな駄目作者の作品ではありますが、どうか温かい目で見ていただけたらと思います。

では、超短いプロローグをどうぞ。

無印編プロローグ　～始まり～

～プロローグ～

記憶力には自信がある。

だから、今でも時々夢に見る。

あの日、業火の中。　血の海に沈んだ父と母の身体を。

それを呆然として眺めていた自分を。

それが、「魔法」と呼ばれる力を使う連中による仕業だということも。

その日から僕の中にこの感情が生まれたことも。

限り無い、憎悪の心が生まれたことも、今でもよく覚えている。

俺には、過去の思い出という物が無い。

気付いた時には、既に何も無かった。

思い出すことも出来ない。

かつては不安に駆られた。

だが、今はどうでもよくなっている。

血の繋がりこそ無いが、家族が出来たから。

だから、俺はこの力を使うんだ。

何も無い俺に唯一残された、一対の神龍と共に闘うこの力を。

魔法少女リリカルなのは
憎悪の戦士と神龍の騎士

始まります。

無印編プロローグ　～始まり～（後書き）

いかがでしたか？
短いでしょう？

基本、更新は不定期ですが、がんばって書いていきたいと思うので、
どうかよろしくお願いします。

それでは。

第一話「序曲」（前書き）

どうも。ｊａｐａｎ１７です。
早速、第一話を上げました。
例によって短いですが・・・。

では、どうぞ。

第一話「序曲」

「・・・・・・眠っ」

いつも通りの朝。僕、
「蓮丈（れんじょう）　直哉（なおや）」は、消えない眠気と共に目を醒ます。

まったく。この眠気だけはいつまで経っても慣れないよ。

なんてことを、柄にもなく考えてしまう、小学三年生の僕、蓮丈直哉です。

「ライナは・・・さすがに起きたか」

そう言い、僕はベッドから下り、制服に着替える。

着替えを終えて、鏡でおかしな所が無いか確認。それも終えて、最後に机の上に置かれた、縦長六角形の蒼い宝石・・・母さんの形見を首から下げ、部屋を出る。
向かうは一階。朝食の準備をしているであろう、同居人――――正確には、僕の家族の下へと向かう。リビングに入ると、味噌汁の良い匂いがしてきた。

「ライナ、おはよう」

台所にいる家族に声をかける。

「あぁ、直哉か。おはよう」

そう僕に挨拶を返す少年の名は「ライナ」。

わけあって、この家で一緒に暮らしている。

歳は僕の一つ上だ。

挨拶を終えてテーブルを見ると、もう既に食事のほとんどが用意してあった。

「ごめんな。いつもご飯の用意、一人でやらせて」

「本当にそう思うなら、もっと早く起きろ」

「それは無理。僕、低血圧だもん」

そんな他愛の会話と共にライナを手伝いながら、席に着く。

献立は、焼魚におひたし、たくあんに大根の味噌汁か。いつもながら美味そうだ。

「あ、そうだ直哉」

「ん～？『アルビオン』と『ヴリトラ』なら、まだ寝てると思うよ？」

「・・・そうか」

席に着いた後、そんな会話が広げられる。アルビオンとヴリトラとは・・・・・・まぁ、我が家のペットみたいなものだが、２匹については、またいつか。

「じゃあ、そろそろ・・・」

「ああ。だな」

二人で手を合わせる。

「「いただきます」」

私立聖祥大学附属小学校。そこが僕が通っている学校だ。
いつも通りの道を通り、いつも通りのバスに乗って、学校に向かう。

「おっす、直哉」

「おはよ〜」

爽やかな笑みを浮かべながら挨拶をする友人、
「進藤（しんどう）　蛍（けい）」と、ちょっとゆるい雰囲気をまとったもう一人の友人、
「日向（ひなた）　社（やしろ）」の二人とバスを降りたところで合流。一年生の頃からの付き合いの親友達と共に、校舎へと向かう。

何も変わらない。

いつも通りの日常。

これまでも、これからも。

そう。変わらないはずだった。

この日の夜、あの声を聞き、彼と、そして何より。

彼女と出会い、忌み嫌っていた力を持つことになる、今夜までは。

第一話「序曲」（後書き）

いかがでしたか？

今回は掴みみたいな感じなので、W主人公と直哉の友人二人を出してみました。

ちなみに、蛍と社の立ち位置は、完璧にアリサとすずかです。

キャラ紹介なんかは、デバイスが出て、ある程度物語が進んだらにしようと思っています。

では、今回はこの辺で。

次回はなのはとユーノ出せるかなぁ・・・。

第二話「不屈の心、憎悪の心」（前書き）

第二話投稿です。

思ってたよりも、筆が進むのなんの・・・おかげで、やたらと長く・・・はい。

まぁ、それはさておき。

今回は、みんな大好き、魔王様と淫獣君が出てきます。

それでは、どうぞ。

第二話「不屈の心、憎悪の心」

いつも通りの日常。授業が終わり、皆が続々と教室から立ち去っていく。

かく言う僕もその一人だ。友人の蛍や社と一緒に、荷物をまとめて教室、そして校舎を出る。

「いや～、やっぱり眠くなるよな、授業中」

「うん。わかるよ、その気持ち。どうしてあんなに眠くなるんだろうね、直哉？」

「いや、僕に振るなよ」

けどまぁ、授業中は凄く眠いというのはよくわかる。僕だって、何回落ちそうになったかわかったもんじゃない。

「それで？今日はどうする？　また蛍の家で人生ゲームでもするか？」

「え～。いいよ、人生ゲームは。ぶっちゃけ飽きたし」

「バッカ、お前。人生ゲームは人類の叡知が生み出した究極のボードゲームだぞ！　あんなに奥の深いゲームなんて、世に２つと無ぇんだぞ！　おわかり！？」

「「究極ｗ」」

「キィーッ！！」

蛍が髪を掻きむしりながら絶叫する。いや、人生ゲームが面白いのは認めるけど、蛍ほどのめりこむのも、どうかと思うわけで。

そんな感じで蛍をいじりながら歩いていると、数人の女子グループが視界に入った。

「お。聖祥の三大美少女だ」

蛍の言葉に、僕達は足を止めてその３人を見る。

栗色の髪をツインテールにした女の子を中心に、左に金髪のロングヘアーの子、右に紫色の、ウェーブがかかったロングヘアーの子が並び、仲良さげに歩いていた。

「高町なのは、アリサ・バニングスに月村すずか・・・か」

その３人は、「聖祥の三大美少女」と呼ばれるほどに容姿が整っており、非公式ながらファンクラブが存在するとかしないとか。

「はぁ～。相変わらず近寄りがたいな、あの辺は」

「なに、蛍？近寄りたいの？」

「そりゃな。ちょっとは仲良くしたいとか思うわけで」

「でも、下手に言い寄ったりしてみなよ？　非公式の連中にヤられるよ？」

「そうなんだよなぁ・・・」

「直哉は？」

「あ？」

「あの3人と仲良くしたいな～。とか、思ったりしないわけ？」

「・・・・・・」

同じクラスってだけで、他には接点も何も無いのに、仲良くする必要も無いしな。

「いや、僕は別に無いな。そういうのは」

「だってさ。諦めなよ、蛍」

「わ、わかってるよ」

蛍が目に見えて凹んでるな・・・・・・よし。

「・・・それにさ」

「「？」」

「別に、あの3人と仲良くしなくても、僕には蛍と社っていう最高の友達がいる。これ以上は欲張り過ぎだと思うんだ」

「「・・・・・・」」

・・・あれ。言葉の選択間違った？

「・・・直哉、お前ってヤツは・・・」

「え？」

「あはは・・・なんで、そんな恥ずかしいセリフをさらっと言えるんだろうね・・・」

・・・うん。確かに恥ずかしい。顔が熱くなってるのがよくわかる。

「ははっ。じゃあ、この後、俺の家行こうぜ」

「いいけど、俺も直哉も、人生ゲームはやらないよ？」

「わかってるよ。だから、それ以外のなにかな」

「・・・あぁ。じゃ、速く行こうぜ、蛍、社！」

「おう！」

「あぁっ！　ちょっと待って！」

走り出す僕と蛍を慌てて追いかける社。

そうさ。

別に、わざわざ新しく友達を作る必要も、誰かと仲良くしておく必要も、どこにも無い。

大切な、大好きな友達がいる。

僕には、それだけで十分なんだから・・・。

「ただいまー」

すっかり暗くなった時間、僕は蛍の家から帰ってきた。ちょっとハッちゃけすぎたせいか、結構腹が減っている。

「帰ってきたのか。お帰り、直哉」

「ただいま、ライナ」

これから夕飯の準備でもするのだろう。エプロンを着けたライナが出迎えてくれた。

『む。帰ってきたか』

『お帰り、直哉』

「あぁ、アルビオン。ヴリトラも、ただいま」

リビングから出て来たのは、手の平サイズの大きさで、前後四本の脚と二枚の翼。長い尻尾にトカゲっぽい目と数本の角のある頭部を持つ、白と黒の生き物・・・。

所謂、「ドラゴン」って奴である。

白い方の名前が「アルビオン」、黒い方が「ヴリトラ」という名前だ。

どちらも、ライナがこの家に来た時には、既にライナと一緒にいた。

曰く、「ライナは自分達が仕える主」だそうだ。

まぁ、疑う必要も無かったから、今では我が家のペット、家族の一員だ。

ちなみに、この家には、母さんの元同僚で、僕達の育ての親がいるが、基本仕事で家にいるのはごく稀だ。

余談だが、ある事情により、ライナは通信教育で普通の学校の授業を受けている。

「直哉。先に風呂に入ってきたらどうだ？　夕飯が出来るまで、まだしばらくかかるから・・・」

やっぱり、そう言うと思ってた。

「いや、今日は僕がやるよ。ライナが先に風呂入っちゃって」

「・・・珍しいな。何か良いことでもあったのか？」

「まぁね」

友達の素晴らしさを再確認してきたところだよ。

「じゃあ、任せていいか？」

言いながら、エプロンを僕に渡してくるライナ。

「ああ。お任せ」

「すまない。よし、アルビオン、ヴリトラ。風呂入るぞ」

『承知しました』

『あいよ～』

そうして、みんなで風呂に向かっていく。

さて。献立は何にしようかな～・・・。

『・・・・・・れか』

「・・・んあ？」

もう夜も更けたその日の晩。入浴も学校の宿題も終え、自室でくつろいでいると、不意に声のようなものが聞こえた。

「・・・気のせいか？」
『誰か・・・聞こえますか・・・？』
また聞こえた。てか・・・！
「気のせいじゃねぇぞこれ！」
反射的にベッドから跳び降りる。
「・・・何の声だ・・・？」

『誰か・・・この声が聞こえたら、力を貸してください・・・危機が、すぐそこに・・・』
「危機・・・？」
もう一度耳をすませてみるが、もう声は聞こえなかった。
「・・・行ってみるか」
もしかしたら危険なことが起こるかもしれない。
けど、誰かが困ってんなら、力を貸す！
蓮丈家家訓、第一条だ！！
「そうと決まれば、即行動！　善は急げ！」
そう言って、部屋のタンスから薄手のジャンパーをひっ掴んで羽織ると、僕は蹴破る勢いでドアを開き、外へ飛び出す。

「え、ちょっ、直哉！？」

「ごめん、ライナ！　ちょっと出てくる！」

「出てくるって、今何時だと・・・おーい！！」

ライナの制止を聞き流し、僕はダッシュで声の主の下へと向かう。

場所などわからない筈なのに、自然と足は止まること無く、目的地・・・動物病院へと向かっていた。

「・・・なんじゃこりゃあ・・・」

思わず某俳優の名言を口にしてしまうほど、僕は目の前の光景に圧倒されていた。

なんてったって、馬鹿デカい化物が暴れ回っているのだから。

「・・・・・・違う、か」

そう、違う。

正確には、目を逸らしたかっただけなんだろう。だって、今目の前で起きている現象の正体を一言で表すとしたら・・・。

「魔法・・・」

魔法。

マンガや小説でよくある力。

一般的には、炎や雷を操ったり、自然現象をも自由に起こせたりも出来る代物。

憧れたことが無いと言えば、嘘になる。

でも、僕が魔法に憧れた理由は・・・。

僕が魔法を求めた理由は・・・！

『うわぁぁッ！！』

「！？」

思考に囚われている内、目の前にいた怪物から逃げ回っていた、オレンジ色のネズミっぽいのがこっちに飛ばされてきた。

「お、おい！　大丈夫か！？」

『ぅ・・・・・君、は？』

「お前だよな？　助けを求めてたのって」

『聞こえたんですか・・・僕の声が・・・？』

「あぁ、しっかりと」

『よかった・・・』

≪Ｇｙｙｙｙｙｙ！！！≫

「『っ！？』」

話しこんでたら、あの化物が突っ込んできやがった！！

『避けて！！』

「言われなくても！！」

タイミングを計って、横っ飛びで避ける。だが・・・。

＜ガスッ！＞

「いぎっ？！」

避けきれずに、僅かながら足にかすめてしまった。
が、立てないほどのダメージじゃない。

『だ、大丈夫ですか！？』

「あぁ、なんとか・・・」

言いながら、ゆっくりと顔を上げていく。

「・・・・・・へ？」

「ふぇ？」

顔を上げた先にいたのは、目と口を丸にして、呆けた顔でこちらを見つめる・・・

「・・・高町なのは？」

Ｓｉｄｅなのは

な、なんだか凄いことになってるの・・・。

・・・はっ！？

あ、わ、私、高町なのはです。

お家でゆっくりしていたら、不思議な声が聞こえてきて、それでここに来たら、今日の夕方に助けたフェレットさんがおっきな怪物に襲われていたの。

「助けなきゃっ！」

って思ったんだけど、他に誰かが来て、フェレットさんと一緒に逃げ回る内に、こっちに跳んで来ました。

『だ、大丈夫ですか！？』

フェレットさんが喋った！？

「あぁ、なんとか・・・」

フェレットさんと一緒にいた人は男の子でした。
見た感じ、私と同い年くらいかな？　そう思っていたら、その人がゆっくりと顔を上げて・・・。

「・・・・・・へ？」

「ふぇ？」

あれ？　この人の顔、どこかで見たことあるような・・・。

「・・・高町なのは？」

私の名前を知ってる？ていうか、そうだ。この人の名前ってたしか・・・。

「蓮丈・・・直哉くん・・・だっけ？」

Ｓｉｄｅ直哉

あっれー？　なんで高町がここにいるんだー？
ていうか、意外なことに、名前知られてたよ。
なぜかちょっと感動。

「えと・・・蓮丈くんは、どうしてここに？」

なんて考えてたら、同じ疑問を高町に聞かれた。

「あぁ、このネズミの声が聞こえてきてさ。んで、その声の主を探してたら、ここについた」

「・・・・・・ネズミ？」

ん？なんだろう、訝しむような視線が・・・。

「あぁ、こいつ」

言いつつ、ネズミの首根っこを摘まみ上げる。

「・・・あ～・・・えっと・・・」

・・・あれ？　なんで苦笑い？

「えっとね？　蓮丈くん」

「？」

なんだ？

「その子・・・ネズミじゃなくて、フェレットっていうんだけど・・・」

「・・・・・・・ぇ」

なん・・・・・・だと・・・・・・？

「・・・知らなかったんだね」

「・・・・・・うん」

・・・・・・ヤバイ。

超恥ずい。

高町の優しい視線が尚更辛い。

『・・・あのー・・・』

「「？」」

『お取り込み中のところ悪いんですけど・・・奴、来てますよ？』

「「へ？」」

見ると、件の化物がこっちをガン見していた。

「・・・早く言えよ」

『・・・すみません』

≪Ｇｙａａａａａａａａａａａａ！！！≫

「逃げるぞぉ！！！」

「『ｊａ！！（ヤー）』」

ネズミ改め、フェレットを抱えて猛ダッシュ。

だがここで、予想だにしない問題が。

「はっ、はっ、れ、蓮丈、くん、まって～！」

遅っ！　そして体力なっ！　運動音痴なのか、アイツ！

「チッ！　おい、フェレット！　なんか方法無いのか！？」

『・・・無いことも無いです』

「マジで！？」

転びそうな高町の手を掴み、再び走り出す。

「ひゃっ」とかって声が聞こえたけど、無視。

「で、方法は？」

『・・・君と彼女には、素質がある』

「・・・素質？」

手頃な大きさの樹に身を隠し、フェレットの言葉に耳を傾ける。

『そう。だから、お願いです。僕に力を貸してくれませんか？』

「・・・・・・」

高町も、神妙な面持ちでフェレットを見つめる。

『僕は、ある探し物のために、この世界とは違う、別の世界からやってきました。』

探し物・・・ねぇ。

『けれど、僕一人の力だけじゃ、それは叶わないかもしれない・・・』

「・・・だから、素質を持つ人に、力を貸してもらおうって？」

『・・・・・・』

沈黙は肯定なり・・・当たりか。

『お礼はします、必ずします！　何であっても、必ず！』

「フェレットさん・・・」

「・・・・・・はぁ」

高町はきっと、協力するだろうな。だったら・・・。

「わかった。で、何をすればいい？」

「え？」

『い、いいんですか！？』

予想外だったのか？　僕の答えに。

「もう乗りかかった船だ。やれるだけのことはやってやるよ」

そうして、高町の方を向く。

「高町もいいよな？」

「うん・・・うん！」

決まりだな。

「それで？」

「私たちは何をすればいいの！？」

『僕の持っている力を、君達に使ってほしいんだ・・・けど』

「？　何かあるのか？」

『僕が持っている力は、一人分しか無いんだ。だから、どちらか一人にしか・・・』

・・・そういうことは、もっと早く言おうぜ。

「えぇっ！？　じ、じゃあ、どうすればいいの！？」

はぁ・・・ま、妥当だな。

「高町。お前が貰え」

「え・・・？」

『じゃあ、君は・・・！』

「実を言うと、魔法にはある程度理解があるんだ。けど、だからって戦えるかどうかは怪しいもんだ。だから、確実性の高い、高町がやった方が良い」

「だけど・・・」

『彼女一人じゃ、危険すぎます！』

「じゃあ、どうしろってんだよ！　他の力は無いんだろ！？」

このままじゃ、いつまでも平行線だ！　しょうがねぇ、こうなった

ら無理矢理・・・！

『マスター』

「「『・・・え？』」」

なんだ、今の声・・・どこから・・・？

『ここです。我がマスター、直哉』

ここって・・・僕の首元の？　って！

「まさか！？」

ある結論に行き着いた僕は、服の中から母さんの形見の宝石を引っ張り出す。

見ると、宝石が僅かに明滅するように発光している。

『これは・・・デバイス！？　どうして・・・』

「わからない・・・母さんの形見の宝石が、なんで・・・」

『マスター。詳しい説明は後で行います。今は、あの異形を止めることに専念しましょう』

「あ、あぁ」

『そちらのお二人も構いませんね？』

「『は、はい！』」

おぉ、すげぇな、こいつ・・・。

『それじゃあ、君にはこれを』

そう言うと、フェレットは首に提げていた赤い、丸い宝石を高町に渡す。

「暖かい・・・」

『それを手にして、眼を閉じて。集中して、僕の言葉を復唱して』

『う、うん』

Ｓｉｄｅなのは

フェレットさんに渡された宝石を胸に抱える。すると、不思議な何かが流れてきた。

『いい？　いくよ！？』

「うん！！」

『〈我、使命を受けし者なり〉』

「〈我、使命を受けし者なり〉」

『〈契約の下、その力を解き放て〉』

「えと、〈契約の下、その力を解き放て〉」

凄い・・・呪文の度に、暖かい力が、さっきより強く、流れこんでくる・・・。

『〈風は空に、星は天に〉』

「〈風は空に、星は天に〉」

流れこむ・・・ううん、違う。きっと、目覚めているんだ・・・。

『〈そして、不屈の心は〉』

「〈そして、不屈の心は〉」

『「〈この胸に！！〉」』

私とフェレットさんの声が重なった瞬間、宝石が一際大きく輝いた。

『「〈この手に魔法を！〉レイジングハート、セーット、アーップ！！！」』

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ』

Ｓｉｄｅ直哉

おぉ・・・なんか、すげぇな・・・。

『マスター、我々も』

「え？　あ、あぁ。えっと、僕もお前に続けばいいのか？」

『いえ、マスターの頭に浮かんだ言葉を唱えていただければ、それで十分です』

「頭に浮かぶって・・・・・・ッ！！」

な、なんだ・・・頭の中に、何かが・・・！

『さぁ、マスター！』

「くっ・・・わかったよ！！」

〈我、宿命を背負いし者なり〉

〈血盟の下、その力を解き放て〉

〈闇は胸に、光は天空(そら)に〉

〈そして、憎悪の心はこの胸に！！〉

「この手に力を・・・！」

最後の呪文を唱え終わる。それと同時に、胸の奥に、何か熱い力が流れこんできた。

あぁ、わかる。よく覚えてる。

この感覚は、あの時と同じだ。

父さんと母さんが死んだ時に感じた、あの感覚だ。

「イーヴィルハート！　セーット、アーップ！！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.　ｓｅｔ　ｕｐ』

今ここに、不屈のエースと憎悪の戦士が誕生した。

第二話「不屈の心、憎悪の心」（後書き）

はい、いかがだったでしょうか？

今回は、直哉の日常の一部とセットアップまでを書いてみました。
ちょっと無理矢理な気が、しないでもないですが・・・。

ていうか、なのはの呪文って、あれでよかったかなぁ・・・。なにせ、無印の知識、セリフの全てまでは把握してないもので・・・。

ちなみに、気付いた人もいると思いますが、直哉の口調が、日常パートと真面目パートで微妙（？）に違います。
が、これは仕様です。はい。ミスとかじゃないですよ？　ええ。

長々と後書き書いちまいました・・・。

何か気になった点や、ご意見やご感想があれば、
是非お願いします。

それでは。

第三話「初戦闘と新たな影」（前書き）

第一話で若干のミスを見つけたので、修正しました。

第三話、投稿っす！

はい、意味無くテンション上げてみました。
最初の反省から脈絡が何も無い。
馬鹿野郎ですね、はい。
それはそれとして（オイ

今回は直哉となのはの初の共同作業（笑）です。

どうぞお楽しみください。

第三話「初戦闘と新たな影」

Ｓｉｄｅ直哉

『音声認証による、リミッターの一部解除を確認。マスター権限を旧マスター、「リーシャ・シリス」より、新マスター、「蓮丈　直哉」へ完全に譲渡。それに伴い、戦意高揚抑制のプログラムを発動、これより戦闘形態へと移行します』

頭に直接、イーヴィルハートの声が響く。それと並行して、胸の奥に溜まっていた力が全身に染み渡っていくのを感じた。

知識に乏しく、経験は無くても、感覚でわかる。

これが、イーヴィルハートの・・・

「魔法の・・・力・・・」

父さんと母さんを殺した力。

今まで、忌み嫌いながらも、心のどこかで欲していた力。

それが今・・・。

「僕の・・・手に・・・！」

『戦闘時における基本形態、スタッフフォームを展開。同時に、バリアジャケットも展開します』

途端、僕の全身を光が包む。それが晴れると、僕の身体は黒いシャツにズボン、両腕にはガントレットが着いており、両の足には脛当てがあった。
腰からは、スカーフのような物が伸びて、胸には胸当てが装着されている。

まるで、魔法使いというより、「戦士」という単語の方がしっくり来る姿になっていた。

ふと右手を見ると、そこには、柄が黒く、先端部分には×の形に組まれた銀色の棒。その中央には、さっきまで宝石だった、イーヴィルハートのコアがはまっている杖が握られていた。
「すごい・・・なんか、力が止めどなく溢れてくる・・・」

力を身体に馴染ませるように、少しストレッチの要領で身体を動かす。
あちこちに鎧のような装甲が施されているから、動きにくいと思ったけど、そういうわけでも無いみたいだ、恐ろしいくらい馴染む。

「ていうか、今さっき言ってた、旧マスターの名前・・・」

『そうです、マスター。かつて私は貴方の母君、リーシャ・シリスの力・・・デバイスとして稼働していました』

母さんのデバイス・・・てことは

「母さんも魔法使いだったってことか」

『「魔法使い」という言い方には、少々語弊があります。我々のよ

うなデバイス・・・魔法を行使するための武器を用いる者は、我々の世界では、「魔導士」と呼ばれています』

「魔法使いじゃなくて、魔導士・・・か」

『はい』

じゃあ、父さんや母さんを殺した連中も、魔導士ってことか・・・。

これで僕も、奴らと同類、か。

「まぁ、いいか」

そう。別に構わない。力が手に入ったのだから。

『マスター』

「ん？」

『彼女の方も、準備が整ったようです』

イーヴィルハートの言葉に耳を傾け、高町の方を見ると、そこにはイーヴィルハートとは、真逆の色合いの――白い柄に、先端部には金色の台座、その中央に紅い宝石がついた――杖を手に持ち、これまた僕とは真逆の色合いの服（バリアジャケットだっけ？）に身を包んだ高町が立ってこっちを見つめていた。

・・・どうでもいいけど、あの服、学校の制服にちょっと似てるな・・・。

『本当にどうでもいいですね』

「心読まれた！？」

恐ぇ！　なんだコイツ？！

『あなたのデバイスですが？』

「だから心を読むなって！」

あぁ、もう！　自分のマスターのプライバシー無視か！？

「あの～・・・」

そうしていると、高町が不安そうに話しかけてきた。

「ん？　あぁ、ごめん、つい」

「う、うぅん。別にいいんだけど・・・あ、紹介するね。このフェレットさん、ユーノくんって言うんだって」

『ユーノ・スクライアです。スクライアは、僕の出身の部族の名ですけど』

「それで、この子が、レイジングハートっていうの」

『よろしくお願いします』

フェレットがユーノ、デバイスがレイジングハートか。こっちも自己紹介はしないとな。

「ご丁寧にどうも。僕は蓮丈　直哉。こいつの名前は、イーヴィルハート」

『以後、お見知りおきを』

『・・・それにしても・・・』

「？」

フェレットもとい、ユーノが僕と高町を交互に見ながら言う。

『二人とも、すごい魔力の量だ。こんなに大きな魔力を持った人、見たこと無いよ』

声色からして本気で驚いているのだろう、ユーノがそう告げる。だが、僕の意識は既に、あの化物に向いていた。

「驚くのは別にいいけど・・・」

「うん、そうだね・・・」

僕の言葉に高町が続く。見ると、化物は僕達を完全に捕捉していた。

「「来るぞ（よ）！！」」

≪Ｇａａａａａａａａａａａ！！！≫

僕と高町の声が重なると同時に化物が襲いかかってくる。その瞬間、

イーヴィルハートとレイジングハートが同時に声を発した。

『Ｆａｔａｌ　ｇｕａｒｄ』

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

二人（？）の声が響いたと思ったら、僕の前には紅色が混じった黒色の、高町の前には桃色の壁が展開され、化物の攻撃を弾いていた。

「これが・・・」

「魔法、か・・・」

『魔法の発動に必要なのは、術者の精神エネルギー、それを触媒に、魔法を発動します』

『簡単な攻撃や防御なら、願うだけで発動できます』

『しかし、更に大きな魔法の発動には、呪文が必要になるのです』

ユーノの簡単な説明にレイジングハートとイーヴィルハートが続く。

「なるほどね・・・んで？　聞きそびれたけど、あの化物はなんなんだ？」

『あれは忌まわしき力によって作られた存在。あれを元に戻すには、その杖を使って封印しなきゃいけないんだ』

「封印って・・・どうすればいいの？」

『マスター。貴女の中に、それに必要な呪文があるはずです』

「私の中に・・・？」

思案中の高町達を横目に見ながら、こっちも会議を始める。

「なぁ、イヴィ。封印っつっても、まずは動きを止めなきゃ話にならないよな？」

『ええ、その通ｒ・・・・・・イヴィ？』

「ん？　あぁ、イーヴィルハートじゃ、長くて面倒だからさ。そう呼ばせてもらうけど、いいか？」

『・・・イヴィ・・・です、か・・・イヴィ・・・イヴィ・・・』

「？」

僕が名付けた愛称を反芻するイヴィ。

「どうした？　もしかして気に入らなかったか？」

『・・・いえ。そんなことはありません。素敵な名をありがとうございます、マスター』

・・・どうやら気に入ってくれたようだ。

「よし！　じゃあ、改めてイヴィ。アレの動きを止めるには、どう

すればいい？」

『はい。普通なら、拘束系の魔法を用いるのですが、今のマスターでは制御が難しいと思います』

だろうね。なにせ、今さっき魔導士になったばかりなんだし。

『ですので、今から初期の攻撃魔法で、あの異形の動きを封じます』

「わかった！」

『では、マスター。私を構え、集中を！』

その言葉に、僕はイヴィを水平に構え、意識をイヴィに傾ける。

『唱えてください、マスター！　敵を砕く弾丸の名を！』

力が身体を駆け巡る。

そして同時に、魔法の名が頭の中に浮かぶ。

「ブレイクシューター！」

『Ｂｒｅａｋ　ｓｈｏｏｔｅｒ』

途端、僕の周りに先程の壁と同じ色をした、光の弾丸が四発現れる。

その弾丸を、明確な敵意を持つ化物に向け、固定する。

「シュートォ！！！」

『ｓｈｏｏｔ』

そして解放された魔力の弾丸は、四発とも吸い込まれるかのように化物に直撃した。

≪Ｇｙｙｙｙｙｙｙｙ！！？≫

予想外の攻撃だったのか、化物にかなりのダメージが通っていた。

「よし！　高町、頼むぞ！」

「う、うん！」

僕が一歩下がると同時に、レイジングハートを構えた高町が踊り出る。

「リリカルマジカル！」

『封印するは、忌まわしき器、ジュエルシード！！』

「ジュエルシード、シリアル？？？！　封印！！」

『ｓｅａｌｉｎｇ』

ユーノと高町、レイジングハートが封印の呪文を唱えて魔法を発動すると、化物は姿を消し、そこには蒼いひし形の宝石が転がってい

た。

「これは・・・？」

『それが僕の探し物・・・・・・忌まわしき器、ジュエルシード』

「忌まわしき器、ねぇ・・・・」

こんな小さい宝石が？　と言いたいところだが、今までの現象を見る限り、かなりの危険物なんだろうな、コレ。

「それで、ユーノくん。これはどうすればいいの？　放っておくと危ないんだよね？」

『あ、うん。レイジングハートでそれに触れて。そうすれば大丈夫だから』

「わかった」

そう言うと、高町はレイジングハートでジュエルシードに触れる。すると、ジュエルシードはレイジングハートに吸い込まれていった。

『・・・これで、封印完了』

「・・・ふぇぇ～」

ユーノの言葉を聞いて気が抜けたのか、高町はその場にへたりこんだ。

それと並行して、レイジングハートとイヴィは元の宝石に戻る。

「・・・なんかどっと疲れたな」

「うん・・・大変だったね・・・」

『・・・すみません・・・こんなことに巻き込んで・・・』

「ううん、ユーノくんが気にする事じゃないよ」

「そうだよ。僕達が勝手に関わったんだ。謝ることなんて無い」

『二人共・・・ありがとう・・・』

和やかな雰囲気が流れる。だが、そういう時間ほど、結構簡単にぶち壊されるわけで・・・。

ウー・・・ウー・・・

「・・・サイレン？　パトカーの？」

『・・・こっちに向かってる？』

「・・・まぁ、あんだけ派手に暴れればなぁ」

瞬間、二人と一匹でアイコンタクト。僕らが下した結論は一つだ。

「「『逃げよう！！！』」」

言うが速いか、すぐさま僕は高町の手とユーノの尻尾をひっ掴み、その場から自己ベストかと思うくらいの速度で退散した。

Ｓｉｄｅなのは

「はぁ・・・はぁ・・・ここまで来れば、大丈夫、だろ・・・はぁ・・・」

直哉くんに手を引かれ、私はさっきまでいた森の中から、家の近くの住宅地まで走って逃げてきました。

直哉くん、足速いんだなぁ・・・。

「さて。かなり時間かかっちゃったし、早く家に帰らないと・・・」

「うん、そうだね」

言いながら、直哉くんと手を離す。

「そういえば、ユーノはこれからどうするんだ？」

「あ、それなら大丈夫。私の家で預かることになってるから」

『え？　そうなんですか？』

「うん。ごめんね？　勝手に決めちゃって」

お父さんやお母さんにもちゃんと私がお世話するって、お話してあるし、大丈夫・・・だと思う。

「そっか。なら安心だね」

そう笑って、直哉くんは私の家とは逆の方向に歩いていく。

「じゃ、ユーノの事、よろしくな、高町」

あ、やっぱり名字呼びのままなんだ。

「待って、直哉くん」

「！？」

私が呼び止めると、直哉くんはびっくりした様子で振り返った。

「な、直哉、くん？」

「あ、うん。せっかく仲良くなれたんだから、名前で呼びたいし、呼んでほしいんだけど・・・ダメかな？」

「仲良くって・・・ほんの何分か、一緒に不思議な体験しただけ・・・」

「ふぇ？　でも私は、直哉くんと仲良くなれたかな？　って思ってるけど・・・」

そう言うと、直哉くんは可哀想なものを見る目で私を見てきました。

すっごく失礼なの。

「はぁ・・・わかった」

「え？」

「名前で呼んでほしいんだろ？　いいよ、それで」

「う、うん」

「・・・じゃ。また明日、学校でな。・・・「なのは」」

「・・・うん！　じゃあね、直哉くん！」

また明日！　と言って、私はユーノくんを抱えて、走って家に帰っていきます。

ふふっ♪　明日はアリサちゃんとすずかちゃんに、直哉くんのこと紹介しなくちゃ。

そんなことを考える内、家に着いた私は、ゆっくりと玄関の扉を開く。

「誰もいませんように・・・」

そう祈りながら、扉を開ききった私。

「・・・・・・お帰り」

「・・・・・・ただいま」

そんな私を出迎えたのは、鬼の形相を浮かべた私のお兄ちゃん、高町　恭也でした。

Ｓｉｄｅ直哉

それにしてもビックリしたな。いきなり高町・・・じゃない。なのはが「名前呼びがしたい」なんて言いだすとは。しかも、「また明日」とか言っちゃったもんだから、明日絶対挨拶してくる。しかも名前呼びというオプション付きで。

「はぁ・・・」

まぁ、明日のことは、後で考えればいい。とりあえず今は・・・

「説教の途中で溜息とは、いい度胸だな少年？」

正座している僕を、かなりキレ気味の表情で見下ろす僕とライナの保護者、
「ニール・シリウス」さんの説教をどう掻い潜るかの術を模索しよう。

Ｓｉｄｅ　？

海鳴市から少し離れた市内。そのビルの屋上に、一人の少女と一匹の狼が佇んでいた。
街から吹く風によって揺れる、自分の長い金色の髪を鬱陶しそうに払いながら少女は言葉を紡ぐ。
「・・・ここに、母さんの探し物が・・・？」
『あぁ、間違い無いよ。ついさっき、発動を確認したからね』
少女の言葉に、その傍らに佇む狼が続く。
「そっか」

言いながら、少女は優しく狼の頭を撫でる。

「それじゃあ、早く見つけよう。蒼い宝石・・・一般名、ロストロギア、ジュエルシード」

その言葉と共に、少女と狼は暗い夜の闇の中へと消えていった。

第三話「初戦闘と新たな影」（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は初戦闘とその後を書いてみました。

こんな感じで良いのかなぁ・・・。

ちなみに、この作品におけるデバイスの言語は

セットアップ時や技名、簡単な受け答え

→英語

会話

→日本語

ていう感じで進めていきたいと思います。

誤字や脱字の他、ご意見やご感想などがあれば、ぜひお願いします。

それでは。

第四話「友達追加」（前書き）

第四話投稿しました。

・・・特筆すべきことが無いです。

それでは、どうぞ。

第四話「友達追加」

Ｓｉｄｅ直哉

「・・・・・・眠っ」

魔導士になった翌日の朝。いつも以上の眠気に襲われながら、蛍や社と一緒に学校へと向かう。

「直哉が朝眠そうなのはいつものことだけど・・・」

「今日は輪をかけて眠そうだよな」

「はは・・・昨日の夜、ちょっとね」

あの後、一時間に渡って説教を食らった後、時間的な問題で解放された。

だが、解放直後に今度はライナからお説教だった。
いきなり家からとび出した僕のことを、かなり心配してくれていたらしい。素直に謝ってお礼を言ったら、しばらく僕が朝食の準備をすれば許す、と言われたので、渋々その条件を飲んだ。

え？　断ろうとはしなかったのかって？

無駄だよ。基本的にライナは、自分が決めたことは曲げないんだ。
何があろうともね。

「そんなわけで、僕は今、猛烈に眠いのである」

「「は？」」

そう言って締め括ったら、隣の二人から「いきなり何言ってんの、こいつ？」みたいな視線が飛んできた。うん。きっと早朝と寝起きによるテンションのおかしさのせいだろう。僕は何も悪くない。

「まぁ、直哉がおかしいのもいつものことだしな」

「そだね」

「ちょっと待てコラ」

僕がおかしいって？　おいおい、蛍よ。それはひどい勘違いってもんだよ。百歩譲って僕がおかしかったとしても、人生ゲームやってる時のお前よりかはマシだから。

「直哉。今、失礼なこと考えなかったか？」

「まっさかぁ」

「・・・・・・（。д。#）」

あ、その顔いいw

「てめぇ、放課後覚えてろよ・・・」

「はいはい」

放課後か・・・そういえば今夜、ニールさんが、なんか話があるって言ってたな。
やだなぁ・・・。

O★HA★NA★SIじゃなきゃいいけど・・・。」

「直哉。今の時点でそのワードはアウトだと思うよ」

「社がついに読心術を?！」

「いや、途中から声に出てたから」

あ、そうなんだ。

その後、色々と雑談とかしながら学校に向かっていく。今夜の事とか、魔法の練習どうしようとか、ジュエルシードの事とか、色々考えながら。

だから、失念していたんだ。

昨日の一言のせいで起こる、この後の騒動のことを・・・。

「あ。おはよう、直哉くん♪」

「・・・・・・」

教室の戸を開けて中に入る。途端に僕に向けてかけられる、ほんわかボイス。

それと同時に、僕の後ろから二つの驚愕に満ちた視線、正面にいる二人の少女―――アリサ・バニングスと月村すずかから、キツめの視線と優しげな視線が向けられる。

だが、僕を閉口させるのは、そんな視線なんかじゃない。

それは殺気。

クラス中の男子から現在進行形で放たれる圧倒的なまでの殺気だった。

（き、気まずい・・・）

しかし、そんな僕の心情に気付くこと無く、この事態を引き起こした張本人・・・高町なのはは、こちらに向かって歩いてくる。

「直哉くん、どうしたの？」

こちらをやや上目遣いで見上げながら、高m・・・じゃない。なのはが尋ねてくる。

それに僕は、なるべく努めて平静を装いながら、挨拶を返す。

「いや、なんでもない。おはよう、なのは」

言った瞬間、１８０。方向転換を余儀無くされた僕は蛍に胸倉を掴まれ、激しく揺さぶられた。

「なんで？！　え、なんで？！　お前と高町、昨日まで何も無かったじゃん！　挨拶なんて一回もしたこと無かったじゃん！　え、何！？　昨日の今日でお前ら二人に何があったの！？」

言いながらも、蛍は僕を揺さぶることをやめはしない。少し苦しくなってきたところで、社に助けを求めるのだが・・・。

「ついに異性に興味を持ったんだね？！　やったね、直哉！！」

などと、意味不明なことを口走っていた。

社。その言葉には、どんな意味があるんだ？　昼休みあたり、ゆっ

くり聞かせてもらおうか？

驚きのあまり、無意識に僕を殺しにかかる蛍と、鼻息を荒くして「そっちじゃないんだよね！？」とか言い続ける社。
それを小首を傾げて眺めるなのはと、呆れ顔のバニングス、苦笑いを浮かべている月村。
そして、未だ僕に殺気を浮かべ向け続ける一部の男子と、机に突っ伏している男子陣。

（カオスだ・・・）

素直にそう思った。

ちなみに、この騒動は担任の先生が来るまで続けられた。

でもって、昼休み。

いつものように、蛍や社と教室の隅で弁当を広げるはずだったのだが・・・。

「どうしてこうなった？」

場所は屋上。

僕の目の前に座るメンバーは、高町なのは、アリサ・バニングスに月村すずかの三人。

蛍と社はいない。理由は単純。

昼休みに入った途端、僕だけがなのはに拉致・・・もとい、昼食を共にするよう誘われたからだ。

なのはに手を引かれ、月村に背中を押されながら教室から連れ出さ

れる僕を見ていたあの二人の脳内には、きっとドナドナが流れていたと思う。

「・・・なぁ、なのは」

「ん？　なに、直哉くん」

「なんで僕はちゃんと知り合ってから、二十四時間も経ってない同級生とその友達二人と、長年の友人達をさし置いて、一緒に弁当を広げてるんだ？」

「んっとね・・・良い機会だから、アリサちゃんやすずかちゃんに紹介しとこうと思って。直哉くんのお友達の・・・・・・誰だっけ？」

「進藤くんと日向くんだよ、なのはちゃん」

「あ、そうだった」

僕と違って名前覚えられてないよ、あの二人・・・・・・何気に酷いぞ、高町なのは。

「それでね、直哉くんのお友達だし、せっかくだから誘おうかな？
とも思ったんだけど・・・」

「大勢でゾロゾロっていうのもどうかと思って、あたしが止めたのよ」

なのはの言葉にバニングスが続く。

この子、男嫌い・・・？　いや、単純にガサツなだけか・・・？

「あんた今、失礼なこと考えなかった？」

「・・・ソ、ソンナコトナイヨー」

「なによ、その喋り方・・・まぁ、いいわ」

「それじゃ、改めて自己紹介しよっ。私、高町なのは」

「アリサ・バニングスよ。なのはを名前呼びしてるんだから、あたしの事もアリサでいいわ」

「月村すずかです。私のことも、すずかでいいから。これからよろしくお願いします」

三者三様に自己紹介してきた三人に、僕も返す。

「僕の名前は蓮丈　直哉。せっかく名前呼びでいいって言ってくれたから、僕の事は直哉でいい。これから、改めてよろしく」

言って、軽く頭を下げる。

「わかったわ。それじゃあ、直哉。単刀直入に聞くけど・・・なのはと、いつの間に仲良くなったわけ？」

名前を知るや否や、早速クラスの男子全員（僕除く）が思っているであろう疑問をアリサが聞いてきた。

「あぁ、それな。昨日の夜、気晴らしに散歩に出かけてたんだ。そ

したら、なんか逃げてる風なフェレットがいてさ。そいつ繋がりで、仲良く・・・みたいな感じ？」

真相は伏せておく。なのはが驚いているが、目線で黙らせる。言ったところでそう簡単には信じてはくれないだろうし、僕自信、知り合ったばかりなのに話すほど、この二人を信用したわけじゃない。

「ふ～ん、そうなの」

「じゃあ、ユーノくんのおかげなんだね」

あ、なんだ。もうユーノのこと知ってるのか。

「まぁ、そんな感じで色々あってさ。今ここに至るってわけ」

言いながら、弁当に入っている卵焼きを口に運ぶ。

・・・うん。やっぱりライナが作った方がうまいや。

昼食を終えて教室に戻った時、蛍からは妬み、社からは生温かい、その他の男子からは殺気のこもった視線を受けたことを、報告して

おく。

「いっしょに帰ろ、直哉くん♪」

「・・・・・・」

放課後。帰り支度を整え、蛍と社に声をかけようとした矢先に例の彼女から素敵なお誘い。
向こうからしてみれば善意でやってるんだろうけど・・・うん。真横にいる二人の親友からの視線が、男子連中の殺気よりもツラい。
こんな時の解決策は一つだけだろう。

「あー・・・うん、いいよ。じゃあ、こっちの二人・・・蛍と社も一緒でいいか？」

「もちろん♪」

なのはがそう言った途端、男子連中からの殺気が蛍と社にも向けられる。だが、そんな視線に気付かず、蛍は満面の笑みで僕に詰め寄ってきた。

「ありがとう、直哉！　俺達を除け者にするつもりは無いんだな！

？」

「そうだけど、蛍。あんまり寄るな。キモい」

「持つべきものは、やっぱり親友だ！　俺達はずっと親友でいような、なおｙへぶっ！？」

キモさが限界を超えたので、顎に小気味の良いフックを打ちこんでおいた。

床を転げ回る蛍を見下しつつ、社にも視線を向ける。

「直哉・・・やっぱり、女より、男の方が・・・」

即座に目を逸らす。なんだか、あの続きは聞いちゃいけない気がした。

「ほら、あんた達。一緒に帰るんだったら、遊んでんじゃないわよ」

「アリサちゃん、そんな言い方・・・」

呆れ顔のアリサと苦笑いのすずかが先に教室を出ていき、それに続いてなのはが出る。

遅れるのもあれなので、未だに床を転げ回っている蛍に蹴りを一発叩き込んでから引き起こし、社の手を引っ掴んで教室を出た。

「・・・と、いうわけで。俺は進藤　蛍。よろしく」

「俺の名前は日向　社だよ。よろしくね、三人とも」

「高町なのはです」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです、よろしくお願いします」

バス停への帰り道、蛍と社が三人と自己紹介しあっている。社はともかく、蛍の方は、ずっと話してみたいって言ってたからな。結構、感激しているだろう。

まぁ、この分なら数日中には仲良くなれると思う。蛍とアリサ、社とすずかって、お互いに雰囲気とか似てるし。

そんな空気の中、唐突に昨日も感じた妙な感覚を感じた。

（これって・・・）

ふと、なのはの方を見る。

彼女も感じたようで、意志疎通もかねて頷きあう。

「・・・悪い。僕ちょっと、用事があったんだ」

「「「「え？」」」」

なのは以外の面々が僕に視線を向ける。

「そういうわけだから、僕はこの辺で！」

混乱するみんなをよそに、カバンを抱え直し、その場から走り去る。

「イヴィ、場所は？」

『この近くの神社かと思われます』

「了解だ。走るぞ！」

「到着！」

ジュエルシードの反応を感じた神社に入る。
そこには・・・。

「・・・・・・まじか」

凶悪な外見と強靭な四肢、鋭利な爪と牙を持つ犬っぽい何かだった。

「でもまぁ、ビビッてる暇は無ぇから・・・やるか！」

『オーライ、マスター！』

「イーヴィルハート！　セットアップ！！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.　ｓｅｔ　ｕｐ』

バリアジャケットを身に纏い、杖・・・イーヴィルハートを握る。

二回目の戦闘、速攻で終わらせてやる！！

第四話「友達追加」（後書き）

いかがだったでしょう？

一気に戦闘終了まで行きたいところでしたが、キリが良いのでここまでにします。

今回は、日常編を書いてみました。こうでもしないと直哉とアリサやすずかの出会いがやれなかったので・・・。

そして、二回目の戦闘。

次はきっと短いだろうなぁ・・・。

あ、キャラ紹介の方は、市街地戦の後あたりにしたいと思ってます。

では、また次回。

第五話「始動」（前書き）

第五話投稿です。

相も変わらず駄文ですが、楽しんでいただければ幸いであります。

では、どうぞ。

第五話「始動」

セットアップを済ませた僕に浮かび上がる、一つの疑問。

「・・・なぁ、イヴィ」

『なんでしょう？』

「今回は随分、すんなりとセットアップが済んだけど、呪文って前回のあれだけでよかったのか？」

そう。今回はあまりに自然にセットアップした為に気付くのが遅れたが、呪文を省略して、戦闘に何か支障は無いのか？

『問題ありません。昨夜の詠唱と魔法の使用により、私はマスターの身体に馴染んでいます。それにより、あらゆる過程におけるラグの簡略化を行うために、すでに全システムの最適化は完了していますので』

「そっか」

小難しい話はよくわからないけど、多分、昨夜の一件でイヴィは正真正銘、僕だけのデバイスになったんだろう。

「じゃあ、イヴィ。結界を頼む」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』

言うと、イヴィのコアが光り、神社の辺り一帯を外界から切り離すかのように結界が広がった。

「これで遠慮はいらねぇ・・・行くぞ、イヴィ！　ブレイクシューター！」

『Ｂｒｅａｋ　ｓｈｏｏｔｅｒ』

昨夜と同様、僕の周囲に四発の魔力弾が作られる。

「シューーートッ！！」

そして、魔力弾を一気に化物に向けて放つ。

だが・・・

≪グルァッ！≫

「なに？！」

化物は素早い動きでブレイクシューター避け、そのままこちらに爪を構えて突っ込んできた。

「くっ・・・！？」

『Ｆａｔａｌ　ｇｕａｒｄ』

間一髪、イヴィが防壁を張り、化物を弾き返す。

『油断大敵です、マスター』

「あぁ、悪い。助かったよイヴィ」

言いつつ、杖を構え直す。

「けど、どうする？　ああも速いと、ブレイクシューターだけじゃちょっとキツイぞ？」

『・・・・・・』

僕の言葉に、イヴィはしばし、考えこむように黙る。

「直哉くん！！」

『直哉！！』

するとそこに、なのはとユーノがやってきた。

「ナイスタイミングだ、二人共！」

『お待ちしていました』

だが、なのはとユーノを認識した化物は、すぐさま二人に襲いかかる。

『マスター！　二人を！』

「わかってる！　ブレイクシューター・・・シュート！！」

すぐさまブレイクシューターを放つ。当然のように避けられたが、それでいい。あくまで時間稼ぎのための攻撃だ。

『くっ・・・なのは！　レイジングハートの起動を！　急いで！！』

「ふぇっ？！　起動って・・・」

『昨日やった、〈我、使命を～〉ってやつだよ！』

「あ、あんなに長いの、覚えてないよぉ・・・」

『じゃあ、昨日みたいに僕に続いて！』

「う、うん！」

予感はしてたけど、やっぱアレを繰り返すのかよ！

ツッコミを入れつつも、意識は化物から離さない。だが、ブレイクシューターの軌道が読まれ始めたのか、魔力弾を掻い潜り、化物はなのはに肉薄する。

「しまっ・・・なのは！！」

「！？」

なのはに化物が突っ込んでいく。だが、次の瞬間・・・。

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ』

レイジングハートが光り輝き、なのはの手に白い杖が握られる。

「レイジングハート・・・」

だが、ここで気が付く。

「なのは！　お前、バリアジャケット！！」

「え？　あっ！」

なのはが気付くが、時すでに遅し。化物の爪がなのはに迫る。

『Ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ』

途端、バリアジャケットが展開され、同時にプロテクションも張られる。化物はそれにぶつかり、弾き飛ばされた。

「隙が出来た・・・今なら！」

『お待ちください、マスター』

そうして、ブレイクシューターを展開させようとした僕をイヴィが止める。

「イヴィ？　なんで・・・」

『たった今、私にかけられていたプロテクトの一部を解除しました。これにより、新たな形態での戦闘が可能です』

「新しい形態？」

『はい。まぁ説明するより、実際に見た方が効率的です。では、マスター。
〈スラッシュフォーム〉とコールを！』

「わ、わかった！」
言って、イヴィを空に掲げ、叫ぶ。

「イーヴィルハート！
スラッシュフォーム！！」

『Ｓｌａｓｈ　ｆｏｒｍ，ｓｅｔ　ｕｐ』

僕の叫びにイヴィが応える。すると、杖の先端部にある、×型に組まれた銀色の装飾が杖の左右に平行に展開。そこから、紅色混じりの黒い魔力の刃が出現した。

「これが・・・」

『はい。近接戦闘形態、スラッシュフォームです』
先程までの杖とは違い、形状としては、槍の様な形になったイヴィを構える。
「・・・斬り込むぞ、イヴィ！」
『オーライ、マスター！』
化物の隙を突き、一気に肉薄する。そして、イヴィを振りかぶると同時に、魔力の刃が力強く輝いた。
「斬り裂けぇええ！！」
『Ｄｉｖｉｎｅ　ｓａｂｅｒ』
「ディバイン・・・・・・セイバー！！！」
そして、降り下ろすした刃は寸分違わず化物の身体に叩き込まれ、化物の動きがさらに鈍くなる。
「よし、なのは！！」
「うん！　いくよ、レイジングハート！！」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ　ｍａｓｔｅｒ．ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｒｄ，

ｓｅｔ　ｕｐ』

レイジングハートがなのはの言葉に応え、封印の準備が完了する。

「リリカルマジカル！　ジュエルシード、シリアル??、封印！！」

『ｓｅａｌｉｎｇ』

なのはが呪文を唱える。すると、レイジングハートから桃色の光の帯の様なものが伸び、昨夜と同様、化物を包みこむ。

それが終わると、後には輝きを失ったジュエルシードと、さっきまで化物だったのであろう子犬が地面に転がっていた。

「封印完了、だね」

そう言って、なのははジュエルシードをレイジングハートに取り込ませる。

「イヴィ、結界はもういいよ」

『そのようですね』

イヴィに言い、辺りに張っていた結界を消してもらう。

『なのは。直哉も、お疲れさま』

「ユーノか。あぁ、お疲れ」

「お疲れさまなの」

ユーノを肩に乗せたなのはと合流。神社の階段を降りつつ談笑する。

『そういえば、直哉。なんで封印をなのはに任せたのさ？　イーヴィルハートじゃ封印は出来ないの？』

そんな中、ユーノが質問してきた。

「あ、それは私も思ったの。どうして？」

「・・・て事らしいんだけど、どうなんだイヴィ？」

僕にわかるわけでもないので、イヴィに直接聞いてみる。

『そうですね・・・私にも封印魔法はありますが、私の本分はあくまで戦闘ですので、効果は薄いと思います。なので、なのはさんとレイジングハートに任せた方が確実性は高いかと』

「・・・だってさ」

「？？　えっと・・・？」

イヴィの説明がわからなかったのか、なのはが首を傾げる。

・・・可愛いなチクショウ。

『つまり、イーヴィルハートは、封印が得意じゃないから、そういう事はなのはとレイジングハートに任せてるって事だよ、なのは』

「あ、なるほど！」

ポン、と手を叩きながら納得するなのは。

「・・・・・・」

・・・こういう奴には、この言葉を送っておこう。

（アホの子・・・）

その後は、適当に雑談しながら、なのはと別れて家に帰った。

「ただいまー」

「おかえり、直哉」

「お。おかえり」

玄関の扉を開けて家に上がり、リビングに入ると、いつものように僕を出迎えるライナと、仕事が長期の休暇に入ったらしい、僕とライナの保護者、ニールさんがいた。

「さて、直哉。帰ったばっかりで悪いんだが、お前にいくつか聞きたい事と、話しておかにゃならん事がある」

真剣な表情で僕に語りかけるニールさん。僕は、なんとなくこの展開を予想出来ていたので、慌てる事なく対応する。

「えぇ。僕もニールさんに、ちょっとばかり聞いておきたい事と話しておかなきゃいけない事があったんです」

「そいつは好都合だ。んじゃ、メシの後にでも始めるとするか」

そう言って、ニールさんは席を立つ。

「あ、そうそう。お前にも必要な事だからな、ライナ」

「・・・あぁ、わかってる」

そうしてこの日を境に、僕、そしてライナは、決して逃げる事が敵わない、魔法の世界に足を踏み入れる事になる・・・。

第五話「始動」（後書き）

ｊａｐａｎ１７（以下ｊ）「作者と～」

直哉（以下直）「登場キャラの」

ｊ、直「「後書き使ってダベりまｓｈｏｗ～」」

直「って、ちょっと待てコラ」

ｊ「何かな？」

直「何かな？　じゃないよ。何コレ？」

ｊ「あぁ、これ？　後書き使ってダベるコーナー」

直「いや、それはわかるよ。なんでいきなりこんなマネしてるの？
　って話」

ｊ「だって、いつもの後書きだけじゃ物足りないし・・・」

直「あんたの一存かい」

ｊ「作者ですから」

直「はぁ・・・まぁ、いいや。で？　ダベるって言っても、具体的にはどんな事を話すんだ？」

j「まぁ、簡単に言えば、その回の振り返りみたいな？　ことを話そうかと」

直「なるほど」

j「じゃ、まずは簡単に振り返ってみると・・・・・・二回目の戦闘だったね。君にとっても、なのはにとっても」

直「うん。ブレイクシューターの欠点が明らかになったな」

j「そして、イーヴィルハートのモード開放」

直「ああ。まさか、イヴィにプロテクトがかかってたとは知らなかったよ。誰がやったんだ？」

j「それは後のお楽しみ。さて、そして次回からは・・・」

直「僕とライナが魔法について詳しく説明を受けるんだな」

j「うん。詳しい内容は次回にまた」

直「ライナについても、何か明らかになるのか？」

j「それについても次回だ。まぁ、楽しみにしときなさい」

直「わかった。じゃあ、期待しないで待ってる」

j「ｏｒｚ」

j「さて、今回投稿した、第五話「始動」。いかがでしたか？」

直「誤字脱字などの指摘される点や、ご意見やご感想があれば、ぜひお願いします」

j、直「「これからも、どうぞよろしくお願いいたします」」

第六話「講義と特訓、龍騎士の目覚め」（前書き）

第六話です。

今回からデバイスのセリフを、簡単な受け答えも英語表記にします。

今回は、説明なんかがメインになると思います。

では、どうぞ。

第六話「講義と特訓、龍騎士の目覚め」

Ｓｉｄｅ直哉

夕食と入浴を終え、この蓮丈家のリビングには、三人と二匹・・・僕とライナ、ニールさんの三人と、アルビオンとヴリトラの二匹がいる。

微妙に重苦しい空気の中、ニールさんが口を開く。

「さて。こうして全員で集まるのは、俺らが一緒に暮らし始めた日以来なんだが・・・あん時と今じゃ、状況が違いすぎる。なぁ、直哉？」

「・・・そうですね」

「つーわけで、ここらで俺の仕事内容や、今後、直哉にどうしてもらうかを話す。それと・・・」

「・・・俺にも色々と話してもらうぞ、ニール」

「わかってるさ」

ライナの言葉にニールさんが苦笑混じりに応じる。僕とライナ、アルビオンとヴリトラも、ニールさんが続けるのを待つ。

「さて、まずは・・・直哉」

「はい」

「お前のデバイスと話をさせてくれや」
その言葉に若干の驚きを覚えつつ、僕は首元からイヴィを取り出し、テーブルに置く。
「・・・久しぶり・・・で、いいのか？　イーヴィルハート」
『・・・ええ。お久しぶりです、シリウス』
「・・・これは？」
話の内容に着いていけてないライナが聞く。
「これは、デバイス。簡単に言えば、魔法を使うための端末みたいな物だ」
「デバイス・・・」
「つーわけで。ほれ」
言って、ニールさんは懐から何かを取り出し、ライナに放る。
「わっ・・・と」
「それは？」
「お前のデバイスだ、ライナ」
「「え！？」」

ライナの手に握られているのは、何かの翼を象った銀色のレリーフ。
中心部分には、同じく銀色の球体がはまっている。

『お久しぶりです、我が主』

「なっ？！　し、喋った！？」

「おいおい、覚えてないのか？」

「な、何を・・・」

「それ。俺がお前を保護した時に、お前が持ってた奴だぞ？」

「え・・・」

ニールさんの言葉に、ライナが絶句する。

「んじゃ、前フリはここまでだ。・・・始めるぞ」

それまでとは違い、本格的に真面目な空気が流れる。

「まず、俺がやってる仕事について把握してもらう。俺は、「時空管理局」っつーとこに勤めてる」

「時空・・・」

「管理局・・・」

時空管理局。その名前には聞き覚えがある。前に一度、ニールさんが話してくれた。

ニールさんの話によれば、この世には僕達が生きている「地球」という一つの世界の他に、幾つもの次元に存在する世界があり、その内の幾つかを自らの手で「管理」し、それを守護する機関があるらしい。

それが時空管理局という組織。

ニールさんは、そこで執務官という役職に就いているらしい。

「お前を保護したのも、仕事の一環だったんだよ、ライナ」

「そうだったのか・・・地球の他にも、幾つもの世界が・・・」

かつてライナは、ある理由から、各地を放浪していた所をニールさんに保護された事を聞いた。ライナを保護した場所・・・その世界の名は、

「ミッドチルダ」と呼ばれる世界だそうだ。

ライナとしても、管理局の存在や、幾つか世界がある事は知っていたそうだが、詳しい部分までは知らなかったみたいだ。

そして、ここで僕に浮かび上がる、一つの疑問。

「・・・ニールさんも、魔導士だったんですね」

「ん・・・まぁ、な。イーヴィルハートから聞いてなかったのか？」

「母さんがそうだったっていうのは聞いたけど・・・やっぱりそうだったんですね・・・」

「あぁ・・・軽蔑したか？」「いや、そういう訳じゃ・・・ニールさんは、奴等とは違う・・・！」

そうだ。ニールさんは違う。父さんや母さんを殺した魔導士とは違うんだ・・・！

「・・・ニール」

と、ここで、今まで口を閉ざしていたライナが喋りだす。

「ん？　なんだ？」

「あんたや直哉が魔導士だという存在なのは理解した。だが、俺にこいつ・・・デバイスを渡す事は、どう関係してくるんだ？」

「それもそうだ・・・別に、ライナにデバイスを渡す必要なんて・・・」

「なんだ、そんな事か」

そんな事って・・・。

「理由は至極単純だ。
ライナ。お前には直哉の手伝いをしてほしい」

「「・・・・・・は？」」

手伝い？　ライナが、僕の？

「・・・ま、待て。いきなり直哉を手伝えとか言われても、こいつが何をしているのか・・・」

「あ。それもそうか」

「・・・・・・」

前々から思ってたけど、この人ってガサツすぎる気がする。

「んじゃ。説明頼むわ、直哉」

「え、僕！？」

「ったりめーだろ。第一俺ぁ、なんでお前が魔導士になったのかさえ知らねーんだから」

こ、この人は・・・！

「はぁ・・・わかりましたよ・・・」

それから時間を少し費やして、僕は魔導士になった経緯を話した。
ジュエルシードの事。それがきっかけで魔法の力に目覚めた事。ついでになのはとユーノの事も。
全て、洗いざらい。

「ジュエルシード・・・こりゃまた、厄介な物に関わっちまったなぁ、お前」

「・・・ジュエルシードを知ってるんですか？」

予想してなかったな、この展開は。

「まぁな。ジュエルシードってーのは、旧世代の遺物、ロストロギアの一種だ」

「「ロストロギア？」」

「ああ。様々な次元世界があるって話はしたよな？　その中には、文明が進歩しすぎて、その自分達の科学力の産物のせいで壊滅した世界が数多くある。そんな滅びた世界の残滓を総じて、ロストロギアって呼ばれてる。ジュエルシードも、その内の一つだ」

「・・・・・・」

「・・・哀れだな」

ライナの言い分はもっともだ。恐らく滅びた世界の人々は、自分達の欲望の果てにそれだけのモノを作り、その危険性も考えないまま使い続けて、挙げ句の果てに滅びた。
これを哀れと言わずして何と言うのか。

「・・・と言うことは、ジュエルシードもそれだけの危険性を・・・？」

「だろうな。ヘタすりゃ、こんな地球なんつーちっぽけな世界、一瞬で滅ぼすなんざ造作もない事だろうよ、ロストロギアにかかりゃな」

「・・・直哉。お前とその二人・・・高町なのはとユーノ・スクライア・・・だったか？　たったそれだけの人数で対処しようとしてたのか？」

「まぁ、な・・・」

「・・・はぁ」

呆れるように、蔑むようにため息を吐くライナ。しばらく考えこむ

ように俯いた後、自分のデバイスを握り締めながら言う。

「わかった。手伝おう」

「ライナ・・・」

「・・・決まりだな」

そう言って、ニールさんは席を立つ。

「じゃ、明日っから特訓だ。ライナはデバイスの使い方。直哉は立ち回りを覚えてもらう。時間は貴重なんだ、明日に備えてさっさと寝ろよ、ガキ共」

明日から特訓。

その言葉の意味を頭の中で吟味しつつ、ライナに視線を向ける。

「・・・いいのか？」

「何がだ？」

「手伝いのこと」

「ああ。魔法の力が俺に無かったら諦めたが、どうやら俺にもちゃんと備わっているようだからな。使える時に使わないと、宝の持ち腐れにしかならない」

「・・・ごめん」

「・・・どうした？　らしくないぞ？」

「ライナ、本当は関係無いはずなのに・・・」

「・・・・・・ふっ」

僕の言葉に、ライナは僅かに・・・だが、優しげに微笑んで言う。

「気にするな・・・・・・”家族”だろう？」

「・・・・・・ああ」

『無論、我らも協力を惜しまぬぞ、直哉？』

『そうそう。遠慮とかすんじゃねぇぞ？』

アルビオンとヴリトラもそう言ってくれた。こんなに味方がいるなら、心強いことこの上無い。

「ありがとう、みんな」

翌日のＰＭ４：３０。
学校から戻った僕と、すでに準備万端なライナを連れて、ニールさんは近くの山の中の開けた場所に向かった。どうやら、ここを特訓の場にするらしい。

「そんじゃ、始めますか・・・”ケーニッヒ”、結界を」

『Ｙｅｓ，ｂｏｓｓ』

ニールさんが手に持ったカードに指示を出す。すると、僕らがいる場所一帯に結界が張られた。

「これで大丈夫だ。直哉、まずはお前からだ。デバイスを起こしな」

「はい」

一歩前に出て、イヴィに語りかける。

「行くぞ、イヴィ」

『オーライ、マスター』

「イーヴィルハート、セットアップ！！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ』

僕の身体を光が包む。光が晴れると、僕はバリアジャケットを着込み、杖を構えていた。

「へぇ。それが今の姿か、イーヴィルハート」

「『？』」

「いや、なんでもねぇ・・・次は俺達だな。行くぞ、ケーニッヒ」

『Ｙｅｓ，ｂｏｓｓ』

「ケーニッヒ、セットアップ」

『ｓｅｔ　ｕｐ』

途端、ニールさんの身体を光が包む。それが晴れると、そこには朱色のローブの様な服の上から軽鎧を装着し、手には同じく柄と刃が朱色の両刃の斧を握ったニールさんがいた。

「それが、ニールさんの・・・？」

「ああ。俺の長年の相棒だ。名前は”ケーニッヒ”ってんだ」

『よろしく頼む』

「んじゃ、ラストだ。ライナ、起動させな」

僕、ニールさんがセットアップを済ませ、ライナに順番が回ってくる。

「起動させろと言われても・・・一体どうすればいいんだ？」

「細かいことはいい。とにかく念じてみろ。そうすりゃ、後はデバイスが勝手にやってくれる」

「・・・それで大丈夫なのか？」

『大丈夫です、問題ありません』

ライナの疑問に、デバイスが答える。

そういえば・・・。

「なぁ、ライナ。そのデバイスの名前、なんていうんだ？」

「・・・そういえば、まだ知らないな」

「・・・ニールさん？」

これを持って来た張本人をジト目で見る。だが、当の本人はどこ吹く風といった様子で言う。

「俺ぁとっくに知ってるものと思ってたぞ？」

「んなわけないだろうが・・・」

待機形体のデバイスを見ながら、言葉を紡ぐライナ。

「・・・教えてはくれないのか？」

『私の名は既に失われた。主、貴方に与えて頂ける名であれば、喜んでその名で生きましょう』

「・・・そっか」

『・・・主よ』

そんなライナに、アルビオンとヴリトラが近寄る。

「？　なんだ？」

『そいつの形、何かに似てないかい、大将？』

「形？　・・・そういえば・・・」

「確かに、何かに似て・・・あ」

「・・・そいつらの翼、だな」

そう。ライナが持っているデバイスの形は、アルビオンとヴリトラの翼の形に瓜二つだった。

「龍の翼・・・アルビオンとヴリトラ・・・神龍・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・決めた」

しばらくの沈黙の後、意を決したように、ライナが顔を上げる。

「お前は龍を、神龍すら統べる者・・・龍の中の龍・・・・・・」

ライナの言葉の一言一言に、銀色の翼は反応し、淡く、そして強く輝きを増していく。

「お前の名前は・・・・・”ドラグーン”」

瞬間、デバイス・・・ドラグーンが一際大きく輝き、ライナの足下に魔方陣が現れる。

「なんだ、あの魔方陣・・・僕達とは違う・・・？」

ライナの足下に広がる魔方陣は、僕やなのは、ニールさんみたいな、四角形を二つ重ねたような魔方陣とは違い、大きな三角形が一つあり、その角のそれぞれに円形の模様がある魔方陣だった。

「・・・なるほどな・・・こいつぁ思わぬ発見だ・・・」

Ｓｉｄｅライナ

『名称設定を確認。以降、機体の名を”ドラグーン”で固定。主、”ライナ”に対する、全システムの最適化を開始。完了まで１８０秒を要します』

耳、聴覚を通して、俺の頭の中に直接ドラグーンの声が響く。同時に、俺の心に浮かぶ一つの違和感。

（俺は・・・この感覚を知っている・・・？）

こんな感覚を感じた覚えは無い。

そう、無いはずなのに、なぜか懐かしさを感じる。

（アルビオンやヴリトラですら知らない事に、関係があるのか・・・？）

俺が保護された時には既に一緒にた”ふたり”。だが、そんな”ふたり”ですら俺についてわからないと言う。

（俺は一体・・・何者なんだ・・・？）

『システムの最適化、完了。いつでもいけます、主』

「！？　あ・・・そ、そうか」

思考に没頭する内、いつの間にかドラグーンの方の準備が完了したらしい。

後はわかる。直哉やニールのやり方を見ていたからな。

「・・・・・・やるぞ」

『了解』

「ドラグーン！　セットアップ！！！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ』

俺の身体を光と魔力が包む。そして、その光は形を成し、俺の身体

に纏わりつくと、鎧の形をとる。

眼を開くと、最初に視界に飛び込んだのは純白。

俺の身体は実にシンプルな、身体の各所を申し訳程度に覆い隠すだけの、簡素な純白の鎧に包まれているが、左手だけは重厚な籠手が着けられ、手の甲には、銀色の球体がはまっている。

「・・・なんだか」

「地味だな・・・」

正面に立つ二人からの評価。だが、俺の頭は何かあるのでは、と考えていた。

「・・・ドラグーン」

『承知しています。この姿は土台に過ぎません』

「土台・・・？」

直哉がドラグーンの言葉に疑問を持つ。

『そう。この姿は所詮、土台だ。真に戦いの為の姿は・・・言葉よりも見た方が早いだろう。すまないが、白い龍・・・アルビオン』

『む？　我か？』

『そうだ。こちらへ』

『むぅ・・・』

「アルビオン、頼む」

『我が主の命であれば・・・』

そう言って、アルビオンが近づいてくる。

『・・・よし。では、私の核に』

ドラグーンがそう言うと、アルビオンは俺の左手の甲・・・銀色に光る、ドラグーンのコアに乗る。

『では、主・・・”融合”と』

「融合？」

『そうです』

「・・・・・・」

『主・・・』

アルビオンが心配そうに声をかけてくる。

「・・・大丈夫だ、やるぞ」

『・・・承知』

「アルビオン・・・・・・融合!!」

『Ｆｕｓｉｏｎ』

『?!　こ、これは・・・・!』

次の瞬間、アルビオンは粒子状に拡散し、俺の周りに展開する。それが俺の身体を包みこむと、さっきまでとは違う形状の鎧を形作っていく。

それが治まると、俺の全てが変わっていた。

「・・・驚いた・・・こいつぁ・・・」

「まるで、龍だ・・・」

そう。俺の身体を包む鎧は、白色であることに変わりは無いが、その形はまさに龍。それもアルビオンを模した様な形だった。

両肩には角を象った装飾があり、身体の所々には龍の鱗・・・甲殻の様に装飾が施されている。

両手両足は、龍の爪そのままの様に鋭く、それだけで武器になりそうだ。腰からは白い翼がそのまま広がり、頭には龍の頭部を象った兜が着いている。

だが、最も変化が顕著なのが、ドラグーンだった。

基礎の鎧の時は、左手を包む籠手とその手の甲にはまる球体だったが、今の形は槍。
銀色の球体は刃の中心にはまっていた。

「・・・アルビオン？」

『・・・大丈夫、です。意外にも意識はハッキリしています・・・主は？』

「俺も問題無い。なんだか、融合する前よりも力が満ちている感じがする・・・」

『成功のようですね』

「この状態が、俺達の戦闘形体・・・で、いいのか？」

『ええ』

力が溢れてくる・・・これが、俺の魔法の力・・・。

「準備完了、みたいだが・・・いいか、お前ら？」

「・・・ああ、大丈夫だ。アルビオン、ドラグーンも、行けるな？」

『『勿論です、主』』

「直哉？」

「僕も行けます。いいな、イヴィ？」

『はい』

「んじゃ、まずは簡単に動いて、身体にデバイスの感覚を馴染ませてもらう。いきなり戦闘訓練なんかさせねぇから安心しろ」

「はい」

「ああ」

そうしてその後は、俺と直哉、二人で辺りを動き回った。
動く度に、俺も直哉も僅かではあるが、確実に力が全身に馴染み、動きが良くなっていくのを実感した。

Ｓｉｄｅ直哉

一時間程動き回り、力が大体身体中に行き渡った所で、ニールさんからストップがかかる。

「よし。大体済んだと思うから、次のステップに移る。つっても、暗くなってきたから、時間は少ないけどな」

「わかりました」

「次は何をすればいい？」

「何、簡単さ」

そこで、一回言葉を切るニールさん。

「お前ら一回、飛んでみろ」

「「・・・・・・は？」」

「いや、だから飛んでみろって」

「いやいやいや、何言ってんですか、いきなり飛べとか」

「なんだ？　仕事のストレスでついに頭沸いたか？」

「そうじゃねぇよ！　あぁもう、悪かったよ！　確かに、いきなりそんな事言った俺が悪かったよ、チクショウ！！」

珍しく自分の非を認めたニールさん。

普段からこうだと良いのに・・・。

どうやら、飛んでみろというのは、魔法を使って空を飛ぶ事で、それが得意か不得意かで、僕らの得意とする場所での戦闘タイプ・・・つまり、空戦タイプか陸戦タイプかをはっきりさせるために言ったらしい。

ちなみに、僕は少し練習しただけで、自由とは言えないまでも飛べるようになったため空戦、ライナは飛べないことも無いが、自由自在に飛べるようになるには時間がかかるとの事で、陸戦だと判断された。

「基本的な動き方なんかは覚えたな。んじゃ、総まとめとして、お前らにちょっとした”鬼ごっこ”をやってもらう」

「「鬼ごっこ？」」

「ああ。今から俺が、遠距離攻撃用の魔法をお前らに撃つから、５

分間避け続けろ。それだけでいい」

「・・・そんぐらいなら・・・」

「ああ・・・まぁ・・・」

「・・・言ったな？　んじゃ、ケーニッヒ。”ファング”を」

『Ｙｅｓ，ｂｏｓｓ』

「エナジーファング」

『Ｅｎｅｒｇｙ　ｆａｎｇ』

ニールさんとケーニッヒが魔法名を呼ぶと、ニールさんの周りに緋色の牙の様な魔力の刃が・・・・・・・・・え？

「・・・ねえ、ライナ」

「・・・なんだ？」

「あれ、いくつに見える？　僕の目が正常なら、３０は軽く越えてると思うんだけど・・・」

「安心しろ・・・俺もお前も、きっと正常だ・・・」

「・・・そっか」

「ああ・・・」

「さて、お前ら・・・」

そう言うニールさんの顔には、酷くサディスティックな笑みが浮かんでいた。

「・・・上手く逃げろよ？」

（（無理！！！））

僕とライナの心が一つになった瞬間だった。

「行けよ、ファングゥ！！！」

「「うわぁあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」」

それから5分間、死に物狂いで僕達は逃げ回った。

初日から死ぬかと思いました。まる

第六話「講義と特訓、龍騎士の目覚め」（後書き）

ｊ「始まりましたよ、後書き座談会のコーナー。今回は、もう一人の主人公、ライナ君に来ていただきました」

ライナ（以下ラ）「前回とコーナー名変わってないか？」

ｊ「いいじゃん。気にしない」

ラ「まぁ、別にいいが・・・」

ｊ「じゃ、やろっか、今回のおさらい」

ｊ「てなわけで、今回はニールから二人の主人公へ管理局や魔法についての簡単な説明と君のセットアップだったね」

ラ「ああ。デバイス名がドラグーン・・・安直だな」

ｊ「うるせぃ。で？　魔法に触れてみてどうだった？」

ラ「とにかく不思議だったな。あんな力があるのなら、使い方次第では繁栄も滅亡ももたらすだろうな」

ｊ「そうならないように、管理局がいるんだけどね」

ラ「ああ、だな」

ｊ「んで、ラストは鬼ごっこだったんだけど・・・」

ラ「・・・・・あれは本気で死を覚悟した・・・」

ｊ「大変だったね」

ラ「他人事だからって・・・まぁ、いい。それにしても、最後のニールのセリフは・・・」

ｊ「うん。知ってる人は知ってるあの傭兵のセリフ。ぶっちゃけ、声はあんな感じを意識してるからね」

ラ「そうか。まぁ、上手く書けているかは微妙だがな」

ｊ「ｏｒｚ」

ラ「使い回しはやめろ」

ｊ「さて。第六話、如何だったでしょうか？」

ラ「誤字脱字、指摘される点や、ご意見ご感想があれば、ぜひお願いします」

j、ラ「ではまた、次回にお会いしましょう」

第七話「れっつ・ごー・とぅー・高町家」（前書き）

第七話投稿です。

なんか、更新は不定期とか言いながら、週一で更新しているよ・・・。

まぁ、それはそれとして、今回は?王の家系が登場します。

それでは、どうｚ・・・おっと誰か来たようｄ・・・

第七話「れっつ・ごー・とぅー・高町家」

Ｓｉｄｅ直哉

ニールさんの特訓が始まった翌日。僕は学校にて、自分の机に突っ伏していた。

「・・・・・・死ねる」

昨日は地獄に等しい５分間を終えた後、いつもみたいに食事と風呂を済ませてすぐに、泥の様に眠った。だが、それでも疲労が消えない・・・・。

（あの人は１００％、Ｓだ・・・）

だが、昨日の事を踏まえて、今日の特訓は少し軽めにすると言ってたから、いくらか体力の温存は見込めるだろう。

ニールさん曰く、

「訓練や練習に熱くなりすぎて、いざ実戦になってから無理が祟って動けない、普段ならありえないミスをする、なんて展開になんのは三流のやる事だ。んな奴ぁ、自分を鍛え上げるどころか、力を持つ資格すらねぇよ」

との事らしい。

（まぁ実際、よく考えられてるよ、あの人の特訓メニューは・・・）

ニールさんは執務官になる前は、新人を鍛えたりする、”教導官”という役職に就いていたらしい。

「道理で教えるのが上手いわけだ・・・」

「何の話？」

「？！」

突然かけられる声に思わず椅子の上で飛び跳ねる。何者かと周りを見回すと・・・。

「・・・なんだ、なのはか」

「にゃっ！？　何でそこで冷めた目になるの！？」

いつの間にか僕の近くに来ていたなのはが何か騒いでいるが、それどころじゃないから軽くあしらう事にする。

「で？　何か用？」

「まるで何事も無かったのように・・・まぁ、いいの。直哉くん、今日の放課後って、何か用事とかあるかな？」

「・・・いや、特に急なのは・・・なんで？」

「えっとね。ほんとは昨日の内に言いたかったんだけど、直哉くん、昨日はすぐに帰っちゃったでしょ？　だから言えなくて・・・」

「・・・・・・」

「それでね？　良ければなんだけど・・・・・・私の家に来てくれないかな？」

「「「「！！？」」」」

「・・・・・・はい？」

クラス中の男子から驚愕と殺気の入り交じった視線。昨日地獄を味わったから、こんな事じゃ動じない。

まぁ、そんな事はどうでもいいとして。

「・・・理由を聞いても？」

「うん。私の家って、喫茶店やってるんだ。それでね？　直哉くん、今までに何度か助けてくれたから、そのお礼に家のケーキとかご馳走しようと思って・・・」

「へ～・・・」

喫茶店か・・・確かに、僕もそれなりに甘い物とか好きだし、お礼だって言うなら、それを無下にも出来ないな。

「えっと・・・やっぱり、ダメ・・・かなぁ・・・？」

不安そうにこちらを見つめるなのはに嘆息しながら告げる。

「はぁ・・・わかった。行くよ」

「・・・！　いいの！？　ほんとに！？」

「あ、あぁ」

僕の答えを聞くなり、嬉しそうに詰め寄ってくるなのは。お礼するってだけで、そんなに喜ばんでも・・・。

「それじゃ、今日は一緒に帰ろうね！　約束だよ！？」

「わかった。わかったから、あんまり騒ぐな」

「あ、うん。それじゃ、ありがとう！　また後でね！」

そう言うと、なのははアリサやすずかがいる所に走って「に〝ゃっ！？」あ、こけた。

まったく・・・喜んだり落ちこんだり、転んだりと忙しい奴・・・。

「・・・な～お～や～・・・」

「あ？」

アリサ達に呆れられているなのはを眺めていると、背後から呪詛じみたトーンの声と共にヘッドロックを極められていた。

「痛だだだだだ！？　け、蛍？！　てめ、何しやがる！？」

「うっせぇ！　お前だけいい思いしやがって！　俺の今までの悶々とした時間を返しやがれ！」

「知ったことか！　いいから離しやがれ！」

「やかましいわぁあああ！！！」

「痛い痛い痛い！！　ちょ、マジで痛いから！　や、社！　この馬鹿止めてくれ！！」

駄目元で、のらりくらりと蛍の後ろについていた社に助けを求めてみる。

「直哉・・・俺には直哉がわからないよ・・・直哉はノーマルなの？　アブノーマルなの？」

「わけわかんねぇ事言ってねぇで助けろやぁあああああああああ！！！！」

当の社は遠い目で僕を見ながら、そんな事を口走っていた。

僕にはお前がわからねぇよ・・・。

その後結局、蛍を投げ落とすという形でなんとか脱出に成功した。

そして放課後。ニールさんに、今日は帰るのが少し遅くなる旨をメールで伝え（ちなみに携帯は通話とメールが出来るだけのシンプルなタイプ）、なのはやアリサ達と一緒に下校する。
社や蛍も誘ってみたが、

「今日はちょっと用事あるから」

と、社。

「同情はいらん」

と、蛍。意味がわからん。

そんな感じに断られたので、今は仲良し三人組の中に僕一人だ。

「ねぇ、なのは。直哉に助けてもらったって言ってたけど、こいつ、何したわけ？」

バスの中、アリサにそんな事を聞かれるなのは。

「ふぇ？　えっと・・・」

気まずそうに視線を泳がせるなのは。どんだけアドリブきかないんだ・・・。

「・・・ユーノ絡みでちょっとな」

「ふぇ・・・？」

「・・・あたしはなのはに聞いてるんだけど？」

なんか敵意を剥き出しにして睨みながら言ってくるアリサ。

嫌われてるのか・・・？

「悪い。ただ、なのははどうも説明するのが下手そうだから、つい、な」

「・・・・・・ふ～ん」

釈然としない様子だが、一応は納得してくれたようだ。

「まぁ、別にいいわ。いつか聞きだしてやるから」

「さいですか」

そう言って、アリサが睨んできたので負けじと僕も睨み返す。やがて、どちらともなく目を逸らす。

「もう、アリサちゃんったら・・・・・・ごめんね、直哉くん。アリサちゃん、なんだかんだ言っても、純粋になのはちゃんの事心配してるだけなんだ」

険悪な雰囲気の中、すずかが小声でそう言ってくる。

「・・・ああ、わかってる」

「そっか」

そう言って微笑むすずか。

（優しい子なんだな・・・）

男子達の中で人気がある理由が少しだけわかった気がした。

その後、今日は習い事があるとの事で、アリサとすずかと別れ、なのはと二人でなのはの家がやっているという喫茶店へ向かう。

「喫茶店をやってるって言ってたけど、おすすめのメニューとかってあるのか？」

「う～ん・・・うちのお店の商品は、人気なのが多いけど・・・私としては、フルーツケーキがおすすめかな」

「そっか。じゃ、期待させてもらうよ」

「うん！　あ、ほら。あそこだよ」

そんな風に話している内に、ある喫茶店の前に到着する。

「・・・何て読むんだ？　えっと・・・」

「”翠屋（みどりや）”って読むんだよ。初めての人はみんな同じ反応するの」

「ふ～ん・・・」

外装は結構キレイだな。店の中だけじゃなくて外にもテーブルがあるあたり、きっと客足は好調なんだろう。

「ただいま～」

そう言ってなのはが店の中に入るので、それに続いて僕も店に入る。するとそこには、栗色の髪をした若い女の人がいた。

「おかえりなさ・・・あら、そちらは？」

「ただいま、お母さん。この人、私の新しい友達で・・・」

「あ、蓮丈　直哉っていいます」

「ああ。あなたがなのはの言ってた子ね？　私は、高町　桃子。な

のはの母です」

「・・・お母さん・・・だったんですか？　てっきりお姉さんかと・・・」

「まぁ。嬉しいこと言ってくれるわね」

「にゃはは・・・」

そんな風に話していると、奥から黒髪の男の人が出てきた。

「お帰り、なのは。お、その子が？」

「ただいま、お父さん。うん、彼が蓮丈　直哉くんだよ」

「初めまして。僕はなのはの父の、高町　士郎だ。君の事は、なのはから色々と聞いているよ」

「はぁ・・・」

お母さん・・・桃子さんに続いて、この人も若い・・・。ニールさんも実年齢より若く見えるから、こういうのには慣れているつもりだったけど、そんな事は無かったよ・・・。

「それじゃ、適当な所に座って待ってて。今、お水とか持っていくから」

そう言って、店の奥へ行こうとするなのは。

「あ。別にいいわよ、なのは。彼とお話でもしてて」

が、桃子さんがそれを止める。

「ふぇ？　でも・・・」

「今ならお客さんも少ないから大丈夫だよ、なのは」

と、別の声に振り向くと、そこには水の入ったグラスを二つ乗せたお盆を手に、こちらに歩いて来る眼鏡をかけた女性がいた。

「初めましてだね。わたしは美由紀。なのはのお姉ちゃんだよ。よろしくね、直哉君」

「あ、はい、こちらこそ。よろしくお願いします、美由紀さん」

「ん～♪　礼儀正しくて良い子じゃない、ねぇ、なのは？」

「いえ、そんな事・・・」

「謙虚な所がまた良し！」

「にゃはははは・・・」

一人熱くなってる美由紀さんとそれを苦笑しながら見るなのは。美由紀さんは僕達の座るテーブルにグラスを置くと、「ごゆっくり」と言って、奥の方に引っ込んでいった。

「・・・賑やかな、良い家族だな」

「うん、ありがとう。そういえば、直哉くんのお父さんやお母さん

は？」

「・・・っ！」

予想できていた質問だが、やはり言葉に詰まる。

「直哉くん？」

「・・・あ、あぁ。二人共、家にはいないんだ」

「そうなの？　お仕事？」

「ああ、そんなとこ。でも、一人ってわけじゃないぞ？　母さんの知り合いがいるし、同年代の奴も一緒に暮らしてるしな」

今の話には、事実と嘘が半々だ。母さんの元同僚で親代わりのニールさんと同年代のライナと一緒に暮らしているのと、ニールさんが仕事で滅多に家にいない事が本当の事。

・・・そして、二人が
”いない”事も。

「ふ～ん、そうなんだ・・・ねぇ。その子の名前は？」

「ライナっていうんだ。機会があったら紹介するよ」

「うん。楽しみにしてるね」

「ああ」

話している内に喉が渇いたので、すぐに水を飲む。
本当の事を話す必要なんて無い。なのはには何の関係も無いのだから。
「それで。注文は決まった？」
「へ？　いや、注文も何も、フルーツケーキを頼むつもりだったんだけど・・・」
「ふぇ、そうなの？　じゃあ、待つことも無かったね。お姉ちゃ～ん！」
「はいはーい！」
なのはが呼ぶと、さっき奥の方に引っ込んでいった美由紀さんがやってきた。
「ほいほい、ご注文はお決まりですか？」
「はい。フルーツケーキとオレンジジュースを」
「あ。ついでに、私もフルーツケーキと、飲み物はアイスティー」
「え～、なのはも食べるの？」
「だって、お手伝いも出来ないんだもん。お母さんに直哉くんとお話してなさいって言われたし」
「・・・ま、いっか。それじゃ、フルーツケーキが２つに、オレン

ジジュースとアイスティーが1つずつね。じゃあ、ちょっと待ってて」

そう言うと、美由紀さんはオーダーの書かれた伝票を持って、再び店の奥へと消えていった。

それから、なのはと他愛無い会話をする事数分、二つのケーキとジュース、アイスティーを乗せたお盆を持って、美由紀さんがやってきた。

「お待たせいたしました。フルーツケーキにオレンジジュース、それとアイスティーになります」

「ありがとうございます」

「いえいえ。それではごゆっくり」

最後に伝票とフォークを置いて去っていった美由紀さんを見送った後、早速ケーキを頂くことにする。

目の前に置かれたフルーツケーキには、イチゴやオレンジを始めとする数種類の果物がふんだんに使われており、一目見ただけで美味

しそうだと直感できる。
それをフォークで一口大の大きさに切り、口に運ぶ。すると、スポンジのふんわりした食感とクリームの甘さ、果物の酸味が一気に口の中に広がった。

「・・・・・・美味しい」

「でしょ？　お母さんが作るケーキ、とっても美味しいんだよ」

言いながら、なのはもケーキを食べている。

「うん、本当に美味しい。どうやって作ってるのか、教わりたい位だ」

ケーキを食べながらオレンジジュースを飲む。

うん、こっちも美味しい。

ケーキのやや強めな甘さを果物の酸味が上手く抑えて、口の中にあまり後味が残らない。それでいて、香りや風味は残るんだから不思議だ。
ジュースの方も、オレンジそのままの爽やかさがいっぱいに広がり、その甘さと仄かな酸っぱさもまた良い。

「なんか、何度でも来て食べたくなるな・・・」

「ふわぁ・・・そこまで言ってくれるんだ・・・」

僕がこれほど絶賛するのが意外だったのか、紅茶のカップを持ったままなのはが言う。

「あまり褒める人っていないのか？」

「ううん、そうじゃなくて・・・直哉くんが、そこまで言うのが意外だなって」

「僕が？」

「うん。直哉くん、学校ではいつも、蛍くんや社くんとしか一緒にいないでしょ？　それに、他の人とかと話してるといっつも無愛想だから、こういう風に色々評価してるのが、なんだか新鮮で」

「ふ～ん・・・」

なのはの言葉を聞きながら、僕はケーキを食べ続ける。ていうか、僕って結構なのはに見られてたのか・・・。

そんな事を考えながらケーキを食べ、ジュースを飲む。が、さっきから妙に落ち着かない。まぁ、理由はわかっているのだが・・・。

「・・・なぁ、なのは」

「何、直哉くん？」

「さっきから、僕の後ろの方からやたらキツイ視線を感じるんだけど、誰かいたりする？」

「ふぇ、後ろ？　・・・・・・あ」

（やっぱいるんかい）

そう思い、密かに嘆息しつつ後ろを振り返る。そこには案の定、やたら殺気のこもった視線を送ってくる十代後半位の男性がいた。

「お兄ちゃん・・・」

「お兄ちゃん？」

「うん・・・高町　恭也って言うの」

「その恭也さんが、なんで僕を睨んでくるんだ？」

「さぁ・・・？」

「・・・？」

疑問に思いつつ、軽く頭を下げて会釈してみる。すると、それをどう感じたのか、ゆっくりとこちらに近付いてきた。

「あ、こっち来た」

恭也さんは僕らが座るテーブルの前まで来ると、不機嫌そうな表情のまま話しかけてきた。

「・・・やぁ」

「・・・どうも」

「俺は高町　恭也・・・なのはの兄だ・・・」

「僕は蓮丈　直哉。なのはの・・・一応、友達です」
なのはが「一応！？」とか愕然としていたが、無視。
「一応・・・とは、どういう意味だ？」
「話すようになってからまだ2、3日しか経ってないのに、それだけで友達って軽々しく言うのもどうかと・・・」
そうやって僕の素直な意見をぶつけると、なんでか恭也さんは更に不機嫌になった。
「つまり、君と友達だと思っているのは、なのはだけだと？」
「いえ、そういうわけじゃ・・・さっきも言いましたけど、僕としてもなのはを友達だと思ってますよ？　一応、ですけど」
「・・・・・・」
僕の意見を聞く内に、恭也さんの殺気が少しだけ小さくなった気がした。
「・・・そうか」
そう言うと、恭也さんは踵を返し、元いた場所に戻っていく。
「・・・君がどういう人物なのかはわかった」
が、その途中で振り返って一言。

「・・・・・・だが、なのはは渡さん」

「・・・・・・はい？」

聞き返す僕と呆気に取られるなのはを余所に、恭也さんは今度こそ去っていった。

「・・・何を言いたかったんだ・・・？」

「さぁ・・・・？」

高町　恭也という人間がいまいちわからないと感じた瞬間だった。

「ごちそう様でした」

「いえいえ。喜んでくれたようで何よりだったわ」

恭也さんとの一時の後、ケーキを食べ終えた僕はケーキの代金を払って、翠屋を出るところだった。
最初は、お礼のつもりだからお代はいい。と言われたが、僕は今日、ここにお客として来たのにお金を払わないのはどうか、と言って半ば強引にケーキ代を払った。これでも結構小遣いには余裕があるのだ。

「それじゃあ、僕はこれで。今度来る時には、家族も一緒に」

「ああ。楽しみに待っているよ」

「いつでも来てくれていいからね。ほら、恭ちゃんも」

「・・・また、来るといい」

「も～。別になのはと付き合ってるわけじゃないんだから、そこまで敵視する事無いのに・・・」

「付きっ？！・・・　駄目だ・・・駄目だ駄目だ駄目だぁ！！　認めない！　そんな事、俺は認めないからな！！」

「ちょっ、落ち着いて恭ちゃん！　はぁ・・・ごめんね、直哉君。恭ちゃんってば、重度のシスコンだから・・・」

「あはは・・・」

「・・・直哉君」

「へ？　あぁ、士郎さん。どうかしたんですか？」

恭也さんを眺めながら渇いた笑いを浮かべる僕に、士郎さんが話しかけてくる。

・・・なんだろう、眼が据わってる気がする・・・。

「・・・・・・なのはの事は、簡単には認めないよ？」

「士郎さんもそっち側なんですか！！？」

やべぇ、勝ち目が無ぇ！

あ、別になのはとそういった関係になりたいとか思ってるわけじゃない。ていうか、僕達まだ子供だし。

（って、誰に向かって言ってんだ僕は・・・）

「はぁ・・・それじゃ、僕はこれで。士郎さん、蛍や社に、僕がサッカー頑張れって言ってたって伝えといてください」

「ん？　あ、あぁ。伝えておく」

さっき聞いた話だが、士郎さんはサッカーチームの監督をしているらしく、蛍や社はそこに所属しているらしい。

・・・だったら、翠屋のケーキ食べた事あるだろうに、何を怒ってたんだ、蛍の奴？

「しかし、君は蛍君や社君と友達なんだろう？　本人達に直接言えば良いんじゃないか？」

「いえ・・・それだと、何ていうか・・・恥ずかしいので・・・」

「そ、そうか・・・」

・・・ちょっと、そこ。「もっと恥ずかしいセリフ言った事あるだろうが」とか言わない。

「あ、ちょっと待って直哉くん」

今度こそ帰ろうとする僕をなのはが引き止める。

「・・・何さ？」

「あ、ごめん。えっと・・・これ」

なのはが差し出したのは折り畳まれた一枚の紙。

「これは？」

「えへへ。私の携帯の番号」

「「！？」」

愕然とする士郎さんと恭也さんを尻目に、それを受け取る。

「いいのか？」
「うん。教えておけば、色々便利だと思って」
「・・・わかった。じゃあ、気が向いたら連絡入れるよ」
「え～」
僕の言葉に苦笑するなのは。
「じゃ、今度こそ絶対に帰るよ。じゃあな！！」
そう言って、出来るだけ全力ダッシュで翠屋から去る。

なぜかって？　視界の端の方に二人の修羅が見えたからさ。

第七話「れっつ・ごー・とぅー・高町家」（後書き）

誠に申し訳ありませんが、作者側の都合により、今回は後書きコーナーの方は中止にします。

次回からは普通に行います。

ちなみに、次回は市街地戦です。

では、また次回にお会いしましょう。

誤字脱字などのご指摘される点や、ご意見やご感想もお待ちしています。

第八話「街は危険がいっぱいだとか聞いた覚えが　前編」（前書き）

まさかの一日に二回の投稿。暇に一日って凄いね。

というわけで、第八話投稿です。

長くなりそうなので、前後半にわけたいと思います。

では、どうぞ。

第八話「街は危険がいっぱいだとか聞いた覚えが　前編」

Ｓｉｄｅ直哉

僕となのはが魔導士になってから、大体一週間位が過ぎた。

その間、回収したジュエルシードは五つ。順調なのかどうかは不明だが、まぁそれは今は置いておいてもいいだろう。

今日は日曜日。なのはの父の士郎さんが監督をしているサッカーチーム、”翠屋ＦＣ”の試合の日らしい。

現在僕は、近所のグラウンドになぜか翠屋ＦＣのユニフォームを着て立っている。

「・・・どうしてこうなった？」

ふと自陣のベンチを見ると、楽しそうに談笑しているなのは達三人組と、高町家の皆さんと話しているライナとニールさんの姿がそこにはあった。

試合開始までの現実逃避も兼ねて、僕はこの瞬間に至るまでを思い出す事にした。

事の始まりは、昨日の夜。蛍から試合をやるので見に来いと電話がかかってきたのがそもそもだった。

『つーわけだから、来い。どうせ暇なんだろ？』

「悪いが、最近は休日も暇じゃなくなってきてるんだ。行けそうにないよ」

そう。少し前までなら、暇潰しのために行ったかもしれないが、最近はニールさんとの特訓がある。費やす時間は大体半日だが、疲労が半端じゃないので特訓が終わったらほとんどライナと一緒にベッドにダイブしているのだ。

『んだよ～。近頃付き合い悪いから、折角誘ってやったのに』

「だから悪かったって。僕にも都合とかあるんだよ」

いい加減しつこいので強引に電話を切ろうとしたが、次に蛍が放った一言が僕を踏み留まらせた。

『ちぇっ。折角なのは達が応援に来る上に、終わったら翠屋での打

ち上げにも誘ってやったのに・・・』

「・・・なのはが？」

待てよ・・・ジュエルシードを集めているのは、基本、僕となのは、それにユーノだ。次に発動したらライナも加わるけど、その前に顔合わせ位はしておいた方が良い気がする。後々連携とか取りやすいしな。

『ああ。ていうか、試合の時は毎度だな・・・・・・何、お前。なのはが来るなら行く、とでも言う気？』

「いや、そういう訳じゃないけど・・・」

うん、やっぱりそうしよう。ライナとニールさんとなのはを会わせよう。ついでに、翠屋で打ち上げをするというなら前に言った、「家族を連れていく」という約束も果たせるし。

「・・・まぁ、うちの人に聞いてみて、ＯＫだったら行くよ」

『・・・そっか。んじゃな』

そう言って、蛍は電話を切った。

最後の声に一抹の寂しさが滲んでるように感じたのは気のせいだろうか？

「・・・まぁいいか。んじゃ、ニールさんに事情話すか」

その後、事情を把握したニールさんに許可を貰い、明日顔合わせを兼ねて蛍達、翠屋ＦＣの応援に行く事にした。

そして迎えた日曜日。集合場所の翠屋に着くと、そこには既になのはとアリサにすずか、高町家の皆さん、それに翠屋ＦＣのメンバーが揃っていた。

「おはよう」

「あ、おはよう直哉くん。来てくれたんだ」

「ああ。蛍があまりにもしつこく誘ってくるからさ」

「よく言うぜ。なのはが来るってわかった瞬間、来る気になりやがって」

「ふぇ、そうなの？」

「ん～・・・そういう訳じゃないんだけどな。昨日も言ったけど」

そう言ってやんわりと否定する。そうしておかないと視界の端に映る修羅達からの殺気がやばいから。

「ん？　ところで直哉。後ろの二人は？」

ここで、社がライナとニールさんに気付く。

「ああ、良い機会だから紹介しておこうと思ってさ。僕の家族の、ライナとニール・シリウスさん」

言いながら、二人よりも一歩後ろに退く。

「ライナだ。諸々の事情があって、姓はちょっと教えられない。だから、ライナと呼んでくれ」

「俺ぁ、ニール。苗字で呼ばれんのは得意じゃないから、ニールで良い。一応、この二人の保護者って事で一緒に暮らしてる。これからよろしく頼む」

二人がそう言った後、皆が次々と自己紹介していく。

「高町なのはです。二人の事、直哉くんから聞いてます。これからよろしくお願いします」

「アリサ・バニングスよ。これからよろしく」

「月村すずかっていいます」

「進藤　蛍だ。直哉の家族って事なら、仲良くできる気がする」

「俺は日向　社。直哉とは一年生の頃からの付き合いです。蛍共々、これからよろしく」

それぞれの自己紹介が終わり、僕は視線を高町家に移す。

「ニールさん、話したでしょ？　この人達がなのはの家族」

「ああ。この間は、直哉がお世話になったようで。ニール・シリウスです。どうぞ、よろしく」

「これはご丁寧にどうも。僕は高町　士郎、なのはの父です」

士郎さんを皮切りに、次々と大人勢が挨拶を交わす。その間、ライナは皆の質問責めにあっていた。

「ねぇねぇ。ライナ君って、外国から来たんだよね？　どこ出身なの？」

「あ～、と・・・アメリカ・・・の方、か？　なにせ、ニールに引き取られるまで、色々な所を転々としていたから、どこからとかは答えにくいな・・・」

「直哉と一緒に住んで、何年位なんだ？」

「大体、四年だな。俺が六歳、直哉が五歳の時にあの家に住み始めた」

「ん？　じゃああんたって、あたし達より歳上？」

「・・・そうなるな。一つ上だ」

「直哉くんって、家ではどうなの？」

「基本的に俺と交代制で家事をやってるな。これと言って、特別に何かやってるような事は無いぞ」

「学校はどこに通ってるの？」

「・・・・・これも、色々と事情があってな。学校には通ってないんだ。詳しい事は訊かないでくれ」

「「「「「・・・・・・」」」」」

・・・あれ。空気が重い・・・。

「し、士郎さん！　そろそろ時間じゃないですか！？」

「ん？　そ、そうだな。それじゃあ皆、そろそろ行こうか」

士郎さんに助け船を出してもらう事で空気の払拭に成功。その後、試合が行われる近所のグラウンドに向かった。

そして現在。

チームの一人が風邪をこじらせ、来れなくなったとの事で、急遽代役として僕が選ばれ、現在に至る。

絶賛試合中の僕のポジションはミッドフィルダー。フォーメーションの中間辺りに位置しており、攻撃への繋ぎ役が主な仕事らしい。
まぁ、自分で切り込んでも良いらしいが。

ちなみに、社は最前線のフォワード、蛍は意外な事にゴールキーパーだった。

そんな風に分析している僕の所にボールが飛んできて、丁度足元に落ちる。

（・・・少しは自分で行くか）

そう思っている内に、相手がボールを奪おうとこちらに向かって来るのが見えた。

が、それを軽くフェイントを入れる事でかわす。

そのままドリブルを続けて、もう二人ほど抜き去る。
負けじと更に突っ込んで来るが、良い頃合いだと思い、僕はボールを蹴り上げる。その先にいたのは・・・・・・社。
「ぶち込め、社ぉ！！」
「言われなくても！！」
綺麗なアーチを描きながら落ちていったボールを、社が鮮やかなボレーシュートて相手ゴールに叩き込んだ。
まずは翠屋ＦＣが先制。だけど、試合は始まったばかりだ。

Ｓｉｄｅなのは

私は今、お父さんが監督をしているサッカーチームの試合の応援に来ています。来るはずだった人の代役として入った直哉くんでしたが、とにかく凄いの。さっきなんて、相手の人達を三人くらい一気に抜いて、絶妙なパスを出してました。
「・・・彼を出して正解だったな」

お父さんもびっくりしてます。

「あいつは運動全般が得意だからな。元々の素質も関係してるんだろうが」

ライナ君がクールにそう言います。ライナ君、やっぱり直哉くんの事、よく見てるんだ。

ピピーッ！

「？」

そんな事を考えていると、不意に審判さんの笛が鳴りました。

「な、なによ？」

「・・・誰かケガしたみたい」

見ると、皆が一ヶ所に集まっていきます。どうやら、翠屋ＦＣの誰かが・・・って、こっちチーム？！

「ど、どうしようお父さん！　代わりの人って・・・」

「ああ、弱ったな・・・」

グラウンドに視線を戻すと、どうやらケガをしたのは社君のようでした。

「いや～、はっはっ。すみません、監督。やっちゃいました」

笑ってはいるけど、社君のおでこには汗がびっしり。無理してるのが丸わかりなの。

「すぐに手当てしないとまずいな・・・」

「それはそうと、代わりは誰を出すんですか、士郎さん？」

社君に手当てをしようとするお父さんにニールさんが訊ねます。

「誰と言われましても・・・」

「チームにいないなら、いますよ代役が、ほれここに」

言いながら、ニールさんはライナ君の肩に手を置きます。

「・・・・・・俺？」

「うん、お前」

「・・・ライナ君はサッカーは？」

「経験なんてありません。見てるだけで」

「けど、お前はセンスや運動能力で言えば直哉以上だ。やれない事もねぇんじゃねぇの？」

「・・・・・・」

「まぁ、最終的に決めるのは士郎さんです。どうしますか？」

お父さんを見ると、お父さんはどこか諦めたような顔をしていました。

「・・・貴方はずるい人だ。最善の可能性を提示しておいて、結局は相手にその選択権を与えておいて、最終的に、自分の考えを選ばせる・・・」

「よく言われますよ」

「はぁ・・・ライナ君。すまないが、いけるかい？」

「・・・・・・はい！」

「よし。選手交代！」

こうして、社君の代役としてライナ君が出る事になりました。

Ｓｉｄｅ直哉

「ライナが社の代わり？！」

ケガをして退場した社の代わりに誰が来るのかと思いきや、まさかのライナだった。
いや、他にメンバーがいないのなら必然的にそうなるのはわかってたはず。けど、本当に出してくるとは・・・。

「・・・何ボサッとしてる。行くぞ」

「あ、お、おぅ」

僕に注意を促し、ライナは自分のポジション・・・社がやっていた場所につく。

・・・にしても、サッカーとか出来るのか、あいつ？

「行ったぞ、代理！」

そんな事を考えている内に、ライナの所にボールが回る。

「・・・・・・」

「ライナ！　ぼうっとしてんじゃ・・・っ？！」

迫るディフェンスを前にしても動く気配を見せないライナ。誰もがボールを取られると思っていたが・・・。

「・・・・・・あれ？」

次の瞬間には、ライナはディフェンスを置き去りにして、敵陣のど真ん中まで一人で切り込んでいた。

「・・・これでいいのか？」

思わず立ち止まって振り返りながら訊いてくるライナ。

「・・・・・・はっ！？　いや、止まるなライナ！　行けると思ったら行っちゃえ！！」

「あ、あぁ」

僕の声に再起動するライナ。基本に忠実なドリブルでボールを運んでいく。

「・・・あ、て、敵は一人じゃねぇか！　とっとと止めるぞ！」

「「「お、おう！！」」」

それに触発されてか、相手チームもライナの阻止に動き出す。

同時に、スタートが若干遅れた僕達オフェンス陣も、敵陣に向かう。

その先頭は僕だ。

「ライナ、回せ！」

「直哉・・・よし、行くぞ！」

僕の要求に、ライナは的確にパスを回してくれた。それを受けて、今度は僕が切り込んでいく。ゴールはもう、目と鼻の先だ。

「止めろ！　これ以上やらせんな！！」

向こうのキャプテンと思われる人物の声が聞こえる。だが、今更止める？　そんなの・・・

「「無駄ぁ！！！」」

僕とライナの声が重なった瞬間、僕はキーパーとディフェンスの前でボールを右斜め上に軽く蹴り上げる。

「決めろよ、ライナ！！」

「ああ！！！」

ズバァンッ！！！

僕が上げたボールは、上手くタイミングを合わせたライナのオーバーヘッドキックによって、寸分違わず相手ゴールに吸い込まれた。

「ナイッシュ、ライナ！！」

「ナイスパスだ、直哉」

そう言って二人でハイタッチ。

「・・・・・・」

・・・なんか、周りの空気がお通夜みたくなってんだけど・・・。

そんなこんなで、この試合は、４対１で翠屋ＦＣの勝利という結果に終わった。

４点の内、社が２点、ライナが１点で、他のメンバーが１点という内訳。

ちなみに、僕はその全てにアシストで絡んでいた。

「「「「「カンパーイ！！！」」」」」

試合が無事、翠屋ＦＣの勝利に終わり、今は翠屋で打ち上げ中。本当なら蛍や社も参加するはずだったが、蛍は急に家の用事が入り、社はケガの診察のため、病院に行っている。

「それにしても、凄かったわね今日の試合。あんた達、本当にサッカー経験少ないわけ？」

「僕はともかく、ライナは間違い無く０だよ。なぁ？」

「ああ。今日が初めてだ」

「本当に凄かったよね、あのオーバーヘッドキック。練習とかは・・・」

「した記憶は無いな。あの場面で最善の方法があれしか無かった」

「いや、もっとあると思うけど・・・」

そんな感じで、一つのテーブル席に、なのは、僕、アリサ、ライナ、

すずかが座って今日の試合を振り返っている。

「にしても、ちゃっかり僕達参加してるけどいいのか？　元々部外者なのに・・・」

「構わないさ。君達のおかげで試合に勝てたんだ。遠慮する事ないよ」

「はぁ・・・」

そんな空気の中、僕はなのはとライナの二人と、なのはに連れてこさせたユーノを店の外にあるテーブル席に誘った。二人に、僕の他にライナとニールさんが協力できる状態である事を教えるためだ。

「久し振りだな、ユーノ」

『いや、本当に。この先、出番が無いのかと・・・』

「大丈夫だ。お前が本格的に空気化するのはもうちょい先だから」

『不吉な事言わないでよ！』

相変わらずからかうネタに事欠かない奴だ。

「それはそうと、お話って何かな、直哉くん？」

『流された・・・？！　まぁ、いいけど。そうだね。大事な話みたいだけど・・・』

「ああ。時間をかけるとアレだから、簡潔に済ませたい。なのは、ユーノ。”念話”は使えるか？」

「ふぇ？　あ、うん。（こんな感じ）」

『（僕も出来るよ、ほら）』

二人と少し話した後、会話の手段を口頭から魔導士間での通信手段、”思念通話”、通称”念話”に切り替える。これなら、人に聞かれたらまずい話も難無く出来る。

「（さてなのは、ユーノ。ぶっちゃけて言うが、ライナとニールさんも魔導士だ）」

「（ふぇ？　そうなの？）」

「（ああ。と言っても、実戦はまだだが）」

「（だから、これからはライナもジュエルシードの回収に協力してくれるんだ。僕の手伝いって形で）」

『（こんな一つの街に、こんなに魔導士がいるなんて・・・しかも、その全てが僕達に・・・？）』

「（それだけ伝えておきたかったんだ。基本、事にあたるのは僕とライナ。ニールさんはいざという時のための保険って事になってる）」

「（そうなんだ・・・うん、わかった。教えてくれてありがとう）」

「（ああ）・・・じゃあ、僕達もそろそろ帰ろうか、ライナ？」

「・・・ああ、そうするか」

言って、念話を切って立ち上がり、ニールさんを呼ぶ。

「ニールさん。僕達そろそろ帰りますね」

「お、そうか。んじゃ、俺も行くわ。それじゃあ皆さん、今日はご馳走様でした」

「いえ、こちらこそ、お手間を取らせて申し訳ない」

「またね、直哉君にライナ君」

「「ご馳走様でした」」

士郎さんと桃子さんに見送られ、僕達は帰路についた。

その日の晩の事。

「・・・？　直哉、この感覚は・・・」

「ああ・・・来たぞ」

大気が震えるような感覚。まぎれもなく、ジュエルシード発動の感覚だった。

『・・・主』

「初陣だな、ドラグーン」

「特訓の成果、見せてやろうぜイヴィ」

『オーライ、マスター』

「さぁてガキ共。言った通り、俺は手は出さない。お前らとなのはのお嬢ちゃんだけで全部片付けろ。いいな？」

「はい」

「ああ」

「ライナ。自分のスタイルでの戦い方とヴリトラの利用法は頭に叩

き込んだな？」

「問題無い。そうだろう？」

『ったりめぇよ！　ちゃんと大将のサポートすっから、安心してくだせぇ！』

「直哉。イーヴィルハートの新しい形態は制御出来たのか？」

「大丈夫です。散々痛い目見ましたけど、その結果はちゃんと実ってますから」

『そうです。何も問題ありません』

「そうか・・・じゃあ、何も言う事はねぇ・・・行ってこい！！」

「「はい（ああ）！！」」

「・・・嘘だろ・・・」

「こんな街中で発動させたのか・・・」

ジュエルシードが発動した現場に着くと、そこはある種の地獄絵図だった。

街の中心部分には、ジュエルシードの暴走体であろう巨大な樹木が生えており、そこから伸びる根やツタがビルや地面などを破壊しつくしていた。

ふと上を見ると、僅かに桃色の光が見えた。

「あれは・・・なのはか？」

襲いかかってくる根を避けるように、不規則に動いている。

「あれじゃあ、すぐに捕まる・・・ライナ！」

「ああ、わかってる！　行くぞ！！」

「イーヴィルハート！」

「ドラグーン！」

「「セットアップ！！」」

『『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ』』

すぐさま光が僕らを覆い、バリアジャケットと武器が装備される。

「アルビオン！　融合！」

『Ｆｕｓｉｏｎ』

ライナもアルビオンとの融合を果たし、戦闘準備は整った。

「行くぞ、ライナ」

「ああ。ヴリトラ！」

『いつでも！』

「行くぞ！　ヴリトラ、戦闘形態！！」
『っしゃあ！！』

ライナの言葉に、ヴリトラは自分の正面に、ライナのそれと同じ形で、漆黒の魔法陣を展開させる。
ヴリトラがそこを通過した時、その姿は大きく変わっていた。

『・・・グルァァァァァァァァァ！！！』

普段の掌サイズとは大違い。僕達の背丈をゆうに超える、漆黒の龍がそこにいた。
なんでも、これが本当の姿らしい。

『さぁ、大将』

「ああ」

そう言い、ライナはヴリトラの背に乗る。

「さぁて・・・一気に終わらせるぞ！！」

『はい！！』

「ああ！！」

『『うむ！！』』

『おう！！』

そうして、僕はなのはの所、ライナ達は樹の本体の所へと、それぞれ向かった。

第八話「街は危険がいっぱいだとか聞いた覚えが　前編」（後書き）

ｊ「後書きよ！　私は帰ってきた！！」

ニール（以下ニ）「元気が良いな。なんか良い事でもあったのか？」

ｊ「いや、別に。このコーナーの無い前回を読み直してみて、味気無いなと改めて思って勝手にテンション上げてただけ」

ニ「そうかい」

ｊ「んじゃ、後書き座談会のコーナー。今回は朱色のナイスガイ、ニールさんをゲストに迎えました」

ニ「よろしく頼むぜ。そういや、何で俺なんだ？　ここらでなのはのお嬢ちゃんあたりが来るはずじゃねぇか？　普通」

ｊ「この時のなのはは責任感と罪悪感で潰れそうになってるんで、厳しいかと」

ニ「なるほど。んじゃ、そろそろ・・・」

j「てなわけで、今回のおさらい。今回はサッカーの様子をメインにしてみました」

ニ「直哉とライナがかなり活躍してたな」

j「運動能力だけならチートって設定だから」

ニ「さらっとぶちまけてんじゃねえよ」

j「気にしないでよ、それが俺」

ニ「偉そうに言うな。ていうかお前って、サッカーど素人だったよな？」

j「うん。だから、作中のポジションの役割、あれであってるかなんてわかりません」

ニ「そんなんで大丈夫か？」

j「大丈夫だ、問題ない」

ニ「はぁ・・・んで、最後は戦闘開始だったが」

j「キリが良いからね。次回は後編だから、なのは救済と封印までを一気にやっちゃおうと思ってる」

ニ「そうか」

j「と、言うわけで、第八話はいかがでしたか？」
ニ「誤字脱字なんかの指摘する点や、意見したい事や感想なんかも待ってるからよ」

j、ニ「では、次回にお会いしましょう」

第九話「街は危険がいっぱいだとか聞いた覚えが　後編」（前書き）

第九話投稿です。

今回は基本、なのはがメインになると思います。

では、駄文ではありますが、お楽しみください。

第九話「街は危険がいっぱいだとか聞いた覚えが　後編」

Ｓｉｄｅなのは

私は今、街中で発動してしまったジュエルシードを封印するために、暴走体の大きな樹と戦っています。あのジュエルシードは、きっと昼間のサッカーの試合の時、相手チームの男の子が持っていた物と同じ。

本当なら、気付いた時に譲ってもらって封印するべきだったのに、私はそれをしなかった。その結果、こんなに街に被害を出してしまった。

「私のせいだ・・・！」

自分の甘さに怒りがこみ上げてくる。同時に、涙で少し視界が滲む。泣いて良い資格なんて、私には無いのに・・・。

『！？　なのは、後ろ！』

「え？！」

ユーノ君の言葉に後ろを向くと、そこには大きな根っこが迫っていました。

あぁ、やっちゃった。

私の不注意でこんな事になったのに、今度はその不注意でやられちゃうんだ・・・。

ごめんね、ユーノ君。最後までお手伝いできなかったよ・・・。

やがて襲って来るであろう衝撃に備えて、私は目を瞑って、身体を強張らせる。

『Ｄｉｖｉｎｅ　ｓａｂｅｒ』

ズバァッ！！

どこからか聞こえた機械音声。それに続いて、何かが斬れる音が響く。

「な～に勝手に諦めモードに入ってんだよ」

正面から、聞き慣れた声が聞こえてくる。

「諦めるんだったら最後まで足掻いて、それでも無駄だった時に諦めろ」

なぜか安心できる声。

初めて会った時から、なぜか信頼できた人の声。

「なぁ・・・なのは？」

目を開くと、そこには槍のようになったデバイスを構えて、私に笑いかける直哉くんの姿がありました。

Ｓｉｄｅ直哉

なのはに迫っていた根を斬り潰し、なぜか沈んでいたなのはの前に立つ。

「直哉・・・くん・・・」

「大丈夫か？　ケガとかは・・・」

「直哉くん！！！」

なのはを気遣っていると、なんでかなのはに抱きつかれた。

「ほわぁあっと！！？」

突然の行動に、間抜けな声が出てしまう。

「お、おい。なの・・・」

「・・・なさい・・・」

「・・・・・・え？」

「ごめんなさい・・・私のせいなの・・・ごめんなさい・・・ごめんな・・・さ、い・・・」

僕に縋りつくように泣きじゃくるなのは。ごめんなさい？　一体・・・。

「・・・説明、してくれるか・・・？」

その後、途切れ途切れだがなのはからの説明で大体の状況は把握できた。

なのはの不注意でこうなった事。その罪悪感に苛まれる内に、今みたいな事態に陥った事。

（・・・責任感が強いのは認めるけど・・・な・・・）

『・・・直哉。あんまりなのはを責めないでほしい。気付けなかっ

た僕にも、責任はあるんだ』

そんななのはを見かねてか、ユーノが言う。

「いや、責めるつもりはこれっぽっちも無いんだが・・・・・・なぁ、なのは」

「っ・・・・・・なに？」

僕の言葉に僅かに震えた後、泣き腫らした眼で僕を見つめるなのは。

そんななのはに、僕は静かに告げる。

「なのははどうしたい？」

「え・・・？」

「なのはの言う通り、今回の事はなのはの不注意が招いた事かもしれない」

「・・・・・・っ！」

『直哉！！』

「悪いな、ユーノ。ちょっと黙っててくれ」

割って入ってくるユーノを制し、なのはに続ける。

「それで、なのははどうしたい？　罪悪感に呑まれて、このまま何もせずに泣き続けるのか？　それとも・・・今、お前に出来る事をするのか？」

「・・・私に、出来る事・・・」

「お前が決めろ。・・・安心しろ。ここでお前が逃げても、僕もライナもお前を責めたりはしない」

これは賭けだ。なのはがこの先どうするか。

拒絶するか、受け入れるか。二つに一つ。

だが、僕はこの賭けに勝利する事を確信している。なのはほど責任感の強い人間なら・・・。

「・・・私は・・・」

「・・・・・・」

「私は、今までは、ただユーノ君のお手伝いがしたくて・・・それだけの理由で、ジュエルシードの回収をやってたの・・・でも・・・」

「・・・でも？」

「・・・私のせいで、こんな事になっちゃったから・・・だから、これからは、私の意志でジュエルシードを封印していくの！　私の大事な人達が傷付く前に！！」

『なのは・・・』

勝った。

僕は賭けに勝った。

だが、これはイカサマに等しい。何せ、なのはほどに責任感が強い人間ならば、こういう答えが返ってくる事はわかりきっていたのだから。

涙を拭い、決意の宿った眼をしたなのはに、「そっか」とだけ告げて、僕は街の中心部分、樹の方に意識を向ける。

「・・・いいか、二人共。今、あの樹の辺りで、ライナが一人で頑張ってる」

「ライナ君が！？」

『一人で！？　なんて無茶な！』

「ああ。だから、僕も行く。なのははここからジュエルシードを探し出して、封印を頼む」

「ここからって・・・」

『結構な距離があるんだよ！？』

不安げななのはと、その案を否定するユーノ。

「・・・出来るさ、なのはなら」

ポン、と、僕はなのはの頭に手を置く。

「ふぇ・・・？」

「僕もライナも、封印が出来ない。でも、なのはならそれが出来る」

「直哉、くん・・・」

「・・・・・・頑張れ」

そう言って、軽く頭を撫でる。

「ふぁ・・・・・・」

すると、なのはは気持ち良さそうに眼を細めた。

「・・・んじゃ、そろそろ行くよ。ユーノ、レイジングハート。なのはを頼む」

『・・・わかった』

『お気を付けて』

「サンキュ。・・・イヴィ」

『はい、行きましょう！』

なのは達と別れ、僕とイヴィはライナ達が奮闘中の場所へと向かっ

た。

Ｓｉｄｅなのは

直哉くんが去った後、私は直哉くんに撫でられた頭を押さえながら、直哉くんの言葉の意味を考えていました。

私にしか出来ない事・・・。

封印が得意じゃない、直哉くんやライナ君に出来なくて、私に出来る事・・・。

『・・・なのは・・・大丈夫かい？』

ユーノ君が不安そうに話しかけて来る。

「・・・大丈夫だよ。自分でもびっくりする位、落ち着いてる・・・直哉くんのおかげだね・・・」

気持ちよかったなぁ・・・直哉くんに撫でてもらった時・・・。

お父さんやお兄ちゃんに撫でてもらうのとは、なんだか違う感じだった。

「ユーノ君、レイジングハート・・・私は私に出来る事をするよ・・・だからお願い。力を貸して！」

『なのは・・・もちろんだよ！』

『ＯＫ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ．Ｗｉｄｅ ａｒｅａ ｓｅａｒｃｈ』

ユーノ君の声が弾み、同時にレイジングハートがジュエルシードの捜索を始めてくれる。

待ってて、直哉くん。

私に出来る事を、全力全開でやりとげてみせるから！！

Ｓｉｄｅライナ

セットアップを済ませ、直哉と別れた俺とヴリトラは、ジュエルシードの暴走体らしい巨大化した樹の根やツタと一戦繰り広げていた。

「チッ！　なかなかしつこいな・・・」

『ああもう、面倒くせぇ！　街ごと吹き飛ばしてやろうか畜生！！』

『馬鹿を言うなヴリトラ。そんな事をすれば、我等や主の帰る場所が無くなる』

『わぁかってんよぉ！！』

痺れを切らしつつあるヴリトラとそれを宥めるアルビオン。

「落ち着け。後少しもすれば直哉達が・・・」

『主！　後方より来ます！』

「何？！」

ドラグーンの警告に後ろを振り向くと、そこには数本のツタが迫っていた。

「くっ！　ドラグーン！　エナジーファング！！」

『Ｙｅｓ，ｍｙ　ｒｏａｄ．Ｅｎｅｒｇｙ　ｆａｎｇ，ｓｔａｎｄ　ｂｙ』

ドラグーンに魔法の発動を命じる。すると色こそ違えど、俺の周囲に数本の牙の様な魔力の刃・・・ニール直伝の”エナジーファング”が展開される。

『Ｅｎｅｒｇｙ　ｆａｎｇ』

「ファイア！！」

俺のコールで、ファングが一斉にツタに殺到する。その牙は、全てのツタを斬り裂き、勢いを止める事無く、樹木にも直撃した。

「ダメージは・・・」

『効果的とは言えません』

「だろうな・・・」

煙が晴れると、そこには無傷でそびえ立つ、巨大な樹があった。

「面倒だ、本当に・・・」

「だからって焼き払おうとか思うなよ？」

「っ？！」

と、突如後ろから聞こえた声に振り向く。

「よっ」

「・・・直哉」

そこには、黒い杖を手に持ち、不敵な笑みを浮かべた直哉がいた。

Ｓｉｄｅ直哉

「なのはは？」

「ん。もう大丈夫だ。もう少しくらいしたら、封印できるだろ」

「そうか。なら、俺達は・・・」

「伸びすぎた邪魔な植物を・・・」

「「残さず刈り取る！！」」

『Ｂｒｅａｋ　ｓｈｏｏｔｅｒ』

『Ｅｎｅｒｇｙ　ｆａｎｇ』

僕の周囲には”六発”の魔力弾、ライナの周りには、同じく六本の牙があった。

「ブレイクシューター！　シュート！！」

「エナジーファング！　ファイア！！」

弾丸と牙、計１２発の魔法が根っこやツタを弾き、斬り裂き、樹木へと直撃する。

「・・・通った？」

「・・・少しは」

「・・・そうか」

見ると、樹の表面が若干焼け焦げていた。

「もっと大きな威力の攻撃が必要になるみたいだが・・・直哉？」

「ああ、いける。イヴィ！」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ！！』

「イーヴィルハート！
”ブラストフォーム”！！」

『Ａｌｌ ｌｉｇｈｔ，ｍａｓｔｅｒ． Ｂｌａｓｔ ｆｏｒｍ，ｓｅｔ ｕｐ』

僕の声に続いて、イヴィの機械音声が響く。すると杖の先端部が変形し、ボウガンの様な形になる。

遠距離砲撃形態、”ブラストフォーム”。

基本形態の杖、スタッフフォームと近接戦闘形態の槍、スラッシュフォームに続く、もう一つのイヴィの姿。

ボウガンを模した砲口を樹に向け、僕は魔力を収束させる。

「やれ、直哉！ 露払いは・・・」

『俺らに任せな！！』

そう言って、ライナを乗せたヴリトラが、根やツタの注意を引きつける。

その間に、僕の方もチャージが完了した。

「さぁて、暴走体・・・」

収束された魔力が強く光る。

「良い声で叫べよ？」

『Ｃｒｙｉｎｇ　ｂｕｓｔｅｒ』

「クライング・・・バスター！！！」

砲口が火を吹き、紅色混じりの黒い閃光が暴走体に向かって放たれる。そしてそのまま、ライナの追撃をやめてこちらに向かっていた根っこやツタを呑み込み、樹木本体に命中した。

『直撃のようです』

「うっしゃ！」

煙が晴れ、ダメージの通った暴走体が現れる。

「・・・あれは・・・」

「ああ、見つけた・・・」

「「ジュエルシード・・・！」」

小さめに開いていた穴からは、眩い光を放っているジュエルシードが見えた。

「・・・それで？」

「？」

「ジュエルシードを露出させたまでは良いが、そこからの事は考えてあるんだろうな？」

「・・・・・・」

「目を逸らすな」

・・・さーて、なのははまだかな～っと・・・。

「目　を　逸　ら　す　な」

「・・・・・・すみませんでした」

しっかり９０。の角度まで腰を折って陳謝。それでも冷ややかな視線は消えず、返ってきたのは蔑みの意味のこもったため息。

「（直哉くん、ライナ君！　聞こえる！？）」

そこに、なのはからの念話が聞こえてきた。

「（！？　なのはか！）」

「（うん！　封印の準備出来たから、すぐにそこから離れて！！）」

「（待ってました！　頼むぞ、なのは！）」

「（直哉くん・・・うん！　私に出来る事を、全力全開でするよ！！）」

その時、なのはがいる場所から、強く、大きな桃色の閃光が見えた。

「・・・何あれ？」

『高町嬢の魔力を感じますが・・・』

「いや・・・でかすぎだろう」

ぶっちゃけドン引きです。

Ｓｉｄｅなのは

『Ｆｉｎｄ　ｉｔ』

捜索開始からしばらくして、レイジングハートがジュエルシードのある場所を特定してくれた。

「よし・・・行くよ！」

『ＯＫ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ』

私の言葉に、レイジングハートはその形を変える。

形からして、きっと長距離砲撃用の形なんだろう。

『僕でも難しい長距離砲撃を！？　なのは！』

「大丈夫！　出来るよ！！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ．Ｓｅｔ　ｕｐ』

レイジングハートを構えて、その矛先を樹に向ける。

「（直哉くん、ライナ君！　聞こえる！？）」

そして、巻き込まれないように、二人に念話で呼びかける。

「（！？　なのはか！）」

「（うん！　封印の準備出来たから、すぐにそこから離れて！！）」

念話で伝えながらも、レイジングハートのチャージを続ける。

「（待ってました！　頼むぞ、なのは！）」

直哉くんの声が聞こえてくる。それだけで、少しだけあった緊張が和らいだ気がした。

「（直哉くん・・・うん！　私に出来る事を、全力全開でするよ！！）」

『行けます、マスター』

「うん！！」

そして、レイジングハートの先端に集まった光が、一際大きく輝く。すると、直哉くんとライナ君が樹の所から離れていくのが見えた。

行くよ、レイジングハート！！

『Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ』

「ディバイィィン・・・・・・バスター！！！」

轟音、閃光。

レイジングハートから放たれた砲撃は、まっすぐジュエルシードに向かい、そのまま直撃した。

「リリカルマジカル！　ジュエルシード、シリアル??！　封印！！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ』

砲撃がそのまま封印の役割を果たして、ジュエルシードを包みこんでいく。

そのまま、ジュエルシードはレイジングハートに吸い込まれた。

『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

「ふぅ・・・」

『凄い・・・』

ジュエルシードが封印されて、街を覆っていた樹も消えていきました。

「終わったね・・・」

『うん・・・お疲れさま、なのは』

「おーい、なのはー、ユーノー」

『直哉！』

「ライナ君も・・・無事みたいだね」

私達が地面に降りると、直哉くんと、少し遅れてライナ君がやってきました。
直哉くんは満面の笑みで私達に手を振りながらこちらに向かっていて、ライナ君はそんな直哉くんを見て、呆れています。

・・・そうだ。私、今回頑張ったんだから、ご褒美もらっても大丈夫だよね？

「ねぇ、直哉くん」

「？　なんだ？」

「えへへ・・・」

直哉くんは、頭に”？”を浮かべながら、私に言ってきます。そんな直哉くんに、私は一言。

「えっとね・・・・・・撫でてっ」

第九話「街は危険がいっぱいだとか聞いた覚えが　後編」（後書き）

j「・・・撫でて・・・だってさ・・・何で撫でてもらうのをご所望したんですか、なのはさん？」

なのは（以下、な）「え～。だって、直哉くんに撫でてもらうの、本当に気持ちよかったんだもん。なんだかクセになっちゃったの♪」

j「さいですか・・・。はい、というわけで、後書き座談会です。今回のゲストはメインヒロイン、高町なのはさんに来ていただきました」

な「よろしくお願いしますなの」

j「では、おさらいを。今回は市街地戦だったんだけど・・・どうだった、なのはさん？」

な「・・・すごく大変だった。直哉くんがいなかったら、今頃ここに来れてなかったかもしれないの・・・」

j「ついでに今回は、直哉イケメンタイム。ぶっちゃけて訊くけど、

直哉の事どう思ってるの？」

な「ふぇ、直哉くん？　そうだなぁ・・・なんだか、不思議な人だよね」

j「と、言うと？」

な「だって、普段はあんまり人と関わろうとしないのに、ああいう場面では自分から進んで関わろうとするでしょ？　誰がいても」

j「ふむふむ」

な「それに、ちょっとだけ憧れてるんだ・・・直哉くんに」

j「・・・なんで？」

な「にゃはは・・・あんまり深い意味はないんだけど、素直に凄いなぁ、とは思うの。色んな事に無関心に見えて、実は凄く優しい所とか、迷ったりとか全然しなくて、それでいて強い所とか。・・・はぁ・・・私も、あんな風に強くて優しくなれたらなぁって、思うようになっちゃったの」

j「・・・つまり、直哉を純粋に尊敬するようになったと？」

な「ん～・・・まぁ、そんな感じ・・・かな？」

j「なるほど・・・・・・つまり、まだフラグは建ってない、と・・・」

な「にゃ？　ふらぐ？」

j「いやいや、気にしないで。・・・なんか話のおさらいのハズが、直哉の事を語るだけで終わっちったよ」

j「というわけで、第九話、いかがだったでしょうか？」

な「誤字脱字などの指摘する点や、ご意見ご感想なども待ってるの」

j「次回はキャラ紹介をやりたいと思います。本編の続きはその後で」

j、な「それでは、また次回にお会いしましょう」

キャラ紹介（前書き）

ｊ「Ｌｅｔ' ｓ　キャラ紹介～！」

直・ラ・な「Ｙｅａｈ－－－－－！！！」

ｊ「てなわけで。今回はこれまでに登場してきたオリキャラ達の紹介をしたいと思います」

直「やっとか」

ラ「このタイミングでやる事は決まっていたが、なかなか時間がかかったな」

ｊ「まぁまぁ、細かい事は無しで頼むよ」

な「それより作者さん。時間が押してるから、はやくお願いするの」

ｊ「あ、うん。それじゃあ、早速・・・」

直・ラ・な「どうぞ！！」

キャラ紹介

【名前】　蓮丈　直哉

【性別】　男

【誕生日】８月２１日

【年齢】　８歳

【髪型】　クセのある黒髪

【瞳の色】　真紅

【魔力量】　ＡＡ＋（現時点、ニール調べ）

【魔導士ランク】　空戦ＡＡ（現時点、ニール調べ）

【魔力光】　紅混じりの黒

【出身世界】　第９７管理外世界”地球”

【設定】

この物語の主人公その１。
どこにでもいる、普通の小学生として暮らしていたが、ジュエルシードの暴走体との遭遇やユーノとの出会い、そして、亡き母の形見であったデバイス、”イーヴィルハート”との契約を機に、魔法の

世界に足を踏み入れる事になる。

歳不相応なまでに大人でクールなイメージがあるが、その実かなりの熱血漢でもある。４歳という幼さで両親を失った経験からか、一度親しくなった人物に対しては、何が何でも守ろうとし、そこそこ甘さも見せるようになる（前回におけるなのはが良い例）。

記憶力にはそれなりに優れており、それ故に目の前で両親を失った事を忘れられず、それがある種のトラウマとなっている。同時に、両親の仇が魔導士である事も記憶しているため、その復讐の為に魔法の力を忌み嫌いながらも強く求めていた。

魔法の戦闘におけるスタイルとしては、遠近中のあらゆる距離に対応出来るマルチファイター。使用魔法は攻撃、防御系統をバランス良く使用するが、回復、補助、封印系統はイーヴィルハート共々絶望的。拘束系は現在練習中。

自分と同じ時期に魔導士となったなのはや、昔から同じ時間を共にしてきたライナ、蛍と社に対してはかなり親しく接しており、現時点ではこの４人と最も仲が良い。

母のかつての同僚で自分の保護者であるニールに対しては、人としても魔導士としても深い尊敬の念を抱いており、彼の教えや理念を守ろうとしている。

家事のスキルは中々のレベルだが、基本ライナに任せているため彼には劣る。あと低血圧なため、朝は弱い。

ニールやイーヴィルハートといった、両親をよく知る二人がいなが

らも、自分に二人の事を教えようとしない事に疑問を抱いている。

【名前】　ライナ

【性別】　男

【誕生日】　不明（便宜上、直哉と同じ日になっている）

【年齢】　９歳

【髪型】　肩の辺りまで伸びた白銀

【瞳の色】　深い蒼

【魔力量】　ＡＡ＋（現時点、ニール調べ）

【魔導士ランク】　陸戦ＡＡ＋（現時点、ニール調べ）

【魔力光】　蒼混じりの白

【出身世界】　第１管理世界”ミッドチルダ”（正確には保護だが、発見された場所等からミッドチルダ出身である可能性は高い）

【設定】

この物語の主人公その2。
数年前、ミッドチルダの辺境で気が付いた時には自分の名前以外全ての記憶を失っており、5歳の頃、当時執務官として活動し始めていたニールに保護される。その翌年に直哉と出会い、以降彼と家族となると同時に無二の親友になる。

大人びた容姿に比例して性格もそれなりに大人びており、中々の美形。その容姿と、あまり外出をしない事から、一部の海鳴市の女性陣からは伝説の美少年として扱われている。

物事を冷静に判断出来る観察眼や洞察力、いざという時の決断力に優れている上、今は発揮されていないが、なぜか人を惹きつける素質があり、ニールからは”王の器”と称された事もある。

ライナの傍らには、自分達を”神龍”と名乗る白と黒の二頭の龍、”アルビオン”と”ヴリトラ”がおり、二頭はライナの最も古い記憶、ミッドをさまよいだした時から、彼と行動を共にしていた。

戦闘においては、デバイス”ドラグーン”の力によってアルビオンと融合、本来の姿に変身したヴリトラの背に乗ることで、ある程度の空中戦が可能になる。が、なのはや直哉の様な空戦魔導士にはまだ及ばない。

使用魔法は、基本ニールから教わった物が多い。これはドラグーンの性能的な問題による物であるが、それは別の話。

前述の通り記憶が無く、故に出身等の詳細が不明な為に戸籍も無い。そのため学校には通えず、ニールの仕事の都合上、戸籍を作る事も出来ずにいる。そのため、ニールのコネを使い、通信教育のような物で一般教養を身に付けている。

記憶が無い事に関しては、最初はそれなりに不安に感じていたが、今はなんて事無いように思っており、「記憶なんて無くてもそれなりに幸せ」と語っている。
が、魔法と関わった事を機に自分の失われた記憶と向き合うようになった事で、再び自分の存在に疑問を持ち始めている。

ニールに対しては、素性の知れない自分を迷う事無く保護してくれた事、自分に居場所と帰る場所を与えてくれた事や力を与えてくれた事等、直哉の想いに負けずとも劣らない程に慕っている。

【名前】　ニール・シリウス

【性別】　男

【誕生日】　３月２２日

【年齢】　３６歳

【髪型】　朱色の短髪

【瞳の色】　褐色

【役職】　時空管理局本局執務官（階級は三等空佐）

【魔力量】　Ｓ－

【魔導士ランク】　空戦Ｓ

【魔力光】　緋色

【出身世界】　第１管理世界”ミッドチルダ”

【設定】

この物語の主人公、直哉とライナの育ての親。

１１歳という若さから管理局に勤めており、その才能と怠らない努力から、入局してから僅か三年で空尉になった程のエリート。

直哉の母、リーシャとは武装隊にいた頃の同期で、彼女とはライバルであると同時に、数少ない良き友でもあった。

年齢は３６歳とそれなりだが、見た目は完全に二十代後半である。

使用するデバイスは”ケーニッヒ”。

ニールが入局した時から苦楽を共にしてきた戦友であり、その性能

はニール本人の実力も相まって、現行機にも引けを取らない程である。
戦闘スタイルは近～中距離。その距離においては管理局の中でも指折りの実力を誇っている。

今でこそ執務官をやっているが、かつては本局の戦技教導官の役職にも就いていたため、その時の経験を生かし、直哉とライナを鍛え上げている。

ニールの教導とその理念（第七話参照）は、彼の過去の経験に基づいており、そのため直哉達教え子には、決して練習、特訓において無理や無茶はさせず、ある程度は許容するが過度な自主練を行う者は容赦無しに叩きのめしている。

リーシャの忘れ形見である直哉と、自分が保護したライナの二人に対しては親代わりとして以上に大切に思っており、表には出さないが、守る事が出来なかったリーシャとその夫の分まで、二人を守ると誓っている。

今の管理局の在り方に疑問を抱いており、密かに裏で何かしらの行動を行っているようだが、詳細は不明。

実は既婚者で2児の父親。

【名前】　進藤　蛍

【性別】　男

【誕生日】　7月11日

【年齢】　8歳

【髪型】　ツンツンの明るい茶色

【瞳の色】　黒

【設定】

直哉の小学一年生の頃からの友人の一人。
容姿のレベルはそれなりに高く、パッと見爽やかなイメージで黙っていれば女子に人気がありそうだが、普段のテンションの高さ故に基本相手にされないでいる（本人もあまり気にしていないが）。

上記の通りテンションが高く、そのために色々と面倒な事態を引き起こす事もあるが、その姿勢が基本的に受け身な直哉や社を引っ張っていったりもしているので、ぞんざいな扱いを受けつつもなんやかんやで二人とは仲良くやっている。

運動能力はかなり高く、視力、聴力等も年齢不相応なまでに高い。
中でも嗅覚は「犬並み」とまで言われるほど。

あと、なぜか人生ゲームに対して並々ならぬこだわりを持っている。

【名前】　日向　社

【性別】　男

【誕生日】　9月9日

【年齢】　8歳

【髪型】　黒の短髪で前髪の一部が金色

【瞳の色】　碧色

【設定】

直哉の小学一年生の頃からの友人の一人。
蛍とは対照的にテンションは低く、普段は直哉や蛍のやり取りを一歩退いた所から眺めている。が、たまに自分から進んで二人のじゃれあいに加わる事もあったりする。

容姿や身に纏う雰囲気は、直哉や蛍曰く「ゆるい」との事で、本人もそれを認めている。

ゆるい雰囲気とは裏腹にかなり思い込みが激しく、女子と関わろうとしない直哉の事を同性愛者ではないかと思っている。
自分達と楽しそうに話していたり、かと思えばなのはを始めとする女子達と仲良さげに話す直哉を見て、彼がノーマルなのかアブノーマルなのか理解できずに混乱したりする。

そんな彼であるから普段は想像もつかないが、実はかなり喧嘩が強い。
身体能力の高さも相まって、その実力はチートレベル。だが、本人が「痛いのはヤダ」と言っているため、その実力が発揮された事は片手の指で足りる程の回数しか無い。

それなりに整った容姿をしているためになかなかモテていると思われがちだが、実際には直哉や蛍といつも一緒にいるせいで、直哉を同性愛者だと思っている社自身が周りから同性愛者だと疑われたりしているため、女子から言い寄られる事は皆無に等しい。

キャラ紹介（後書き）

一日に二話投稿再びw。

そんなわけで、いかがだったでしょうか？　何かご指摘される点などがあれば、ぜひお願いします。

次回は本編にしようと思いましたが、その前にデバイスの紹介をしようと思います。

では、また次回。

デバイス紹介（前書き）

ｊ「キャラ紹介に続き、今回はデバイス&神龍の紹介で～す」

イーヴィルハート・ドラグーン（以下、イ・ド）「どんどんぱふぱふ～（棒）」

ｊ「・・・素晴らしい合いの手をありがとう」

イ「どうでもいいです。時間がありませんから・・・」

ド「早く始めるぞ」

ｊ「はいよ。今回は、主人公二人のデバイスと神龍の紹介をします」

イ・ド「それでは、どうぞ」

デバイス紹介

【名前】　イーヴィルハート

【待機形態】　縦長六角形の蒼い宝石

【分類】　インテリジェントデバイス

【術式】　ミッドチルダ式

【マスター】　蓮丈　直哉

【設定】

主人公、直哉が持つデバイス。
人格ＡＩは女性型で、礼儀正しい性格。他者に対しては、基本「さん」付けで話す（ただし、ニールなどの旧い知人はその人の姓で呼ぶ）。

数十年前、直哉の母、リーシャのために開発されたワンオフ機。ミッド式の術式でありながら近接での対人戦に優れ、中距離からの射撃や遠距離からの砲撃も得意といった、まさしく闘いのためだけに造られた機体でもある。

リーシャにとっては、相棒であり戦友であり、そして最愛の家族の一人でもあったため、イーヴィルハート自身も、彼女の事を誰よりも信頼し、その身を案じていた。

リーシャの死後、何者かの手によってシステム全体に厳重なリミッターとプロテクトが施されたが、直哉の成長に合わせてイーヴィルハート本体がある程度の制御を解除していっている。

ニールはイーヴィルハートのリミッター等について何か知っている風だったが、詳細は不明。

【形態】

スタッフフォーム

戦闘時の基本形態。
黒色の柄で、その先端部分に銀色で×字に組まれた装飾があり、その中央部に、蒼いコアがある杖。

相手に近付かれた際の打撃武器としても利用可能（あまりそういう使われ方はしない）。

スラッシュフォーム

近接戦闘形態。
×字に組まれた装飾が杖の両側に平行に展開し、その間から魔力刃を発生させて槍型の斬撃武器となる。

槍のリーチでありながら、取り回しと斬れ味に優れており、直哉はこれを一撃必殺の形態として使用する。

ブラストフォーム

遠距離砲撃形態。
装飾の形がボウガンの様に変形し、遠～長距離からの砲撃を可能にした形態。

チャージにやや時間がかかる分、その威力はずば抜けて高いが、魔力調整がかなりピーキーなため、調整を失敗すれば暴発しかねない危険な形態でもある。
が、直哉はこれをニールの指導の下、完全なコントロールに成功しており、直哉が注意している限り暴発する事は無い。

【使用魔法】

ブレイクシューター

直哉が最初に発動した魔法。
魔力弾を数発形成し、それを高速で相手に撃ち出す中距離射撃魔法。
威力、速度共に優秀だが、唯一の欠点はその軌道にあり、直線的な動きなため見慣れた者にはあっさり避けられてしまう。

そのため、この魔法に誘導性能を加える為に、直哉は現在思案中である。

フェイタルガード

イーヴィルハートの基本防御魔法。
発動者の周囲に強固な防壁を張り、敵からの攻撃を防ぐ。
性能、燃費に優れており、直哉が最も信頼する防御魔法。
だが、これだけでは限界があるため、現在新たな防御魔法を考案中。

ディバインセイバー

スラッシュフォームの状態で放たれる、近接斬撃魔法。
魔力刃を圧縮する事で斬れ味を高め、　あらゆる物を斬り裂く斬撃となる。
ちなみに、これの派生技も存在するが詳細は不明。

クライングバスター

ブラストフォームで使用される砲撃魔法。
破壊力と貫通力に優れた砲撃を放ち、並の防壁なら一撃で破壊する事が出来る。

【名前】　ドラグーン

【待機形態】　龍の翼を模したレリーフ

【分類】　不明（インテリジェントデバイスと思われるが、発見時に使用出来る魔法が無かった上に従来のデバイスに当てはまらない構造だったために不明となっている）

【術式】　古代ベルカ式（が、ニールによってある程度の調整を受けているため、ややミッド式が混じっている）

【マスター】　ライナ

【設定】

主人公の一人、ライナが用いるデバイス。

性能、開発された経緯、なぜライナが持っていたかなど、あらゆる部分が謎に包まれたデバイス。

人格ＡＩは男性型。冷静で忠実。妙に達観しており、主であるライナを始め、まだ若い登場人物達を諌める役目を担ったりもする。

武器ではなく鎧としてライナに装備され、ライナと共にある神龍達と融合する事で、その真価を発揮する。

発見された時には、魔法の登録は一切されておらず、調整を進める過程でマスターの性質に合わせて、自ら魔法を形成するという従来とは全く異なるシステムを持つ事が明らかになった。

前述の通り、術式は古代ベルカ式。だが、ニールからある程度の調整を受けたため、言語や魔法体系はミッド式にも対応している。

【形態】

ホワイティルフォーム

セットアップ直後の形態にして、基本形態。

全身を簡素な鎧で覆い、ある程度の簡単な魔法の使用だけを行う、戦闘には不向きの形態。

この状態を軸に、神龍との融合を行う。

アルビオンフォーム

白き神龍、アルビオンと融合を果たした姿。

全身を白龍を模した鎧で包んだ、ライナの基本的な戦闘形態。

この時のドラグーンの形状は、鎧と同じ色の白い槍。

汎用性と機動性に優れており、まだ不慣れなライナでもあっさりと

その性能を理解できた。

【名前】　アルビオン

【マスター】　ライナ

【設定】

ライナが幼い頃から彼に仕えている”神龍”の一角で、白き龍。

一人称は”我”で、誰に対しても礼儀正しくを忘れない生真面目な性格。

それ故に自分だけで抱えこむ事も多く、ライナにはそれが悩みらしい。

なぜライナに仕えているかは不明だが、命に代えても彼を守ろうとするアルビオンには、一種の執念に似た物がある。

戦闘時には、彼がライナと融合して戦いに臨む。

ちなみに、名前の由来はあるライトノベルに登場する白い龍から。

【名前】　ヴリトラ

【マスター】　ライナ

【設定】

ライナが幼い頃から彼に仕えている”神龍”の一角で、黒き龍。

一人称は”俺”。性格はアルビオンとは対照的にやや礼儀に欠けており、相手が誰であれ自分の意見を素直に口にする。

そのため、アルビオンとは何かと口論が絶えない。

が、ライナに対する忠誠心は本物で、アルビオン自身もその事を認めており、なんだかんだ言いつつもヴリトラの事を信頼している。

曲がった事、不義や不忠が大嫌いで、人の道を外れる者には容赦しない性格。

彼曰く、「性分」との事。

戦闘時には、本来の巨大な龍の姿へと変身し、自由に飛ぶ事が出来ないライナをその背に乗せて戦場の空を舞う。

名前の由来はアルビオンと同様、某ライトノベルに登場する黒龍の名前から。

デバイス紹介（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回の内容で、ご指摘される点などがあれば、ぜひお願いします。

では、また次回にお会いしましょう。

あ、次回は皆さん大好きなあの娘が出て来ますよ～。

第十話「新たな魔導士」（前書き）

第十話投稿です。

タイトルからわかる通り、今回はあの子が登場します。

駄文ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

では、どうぞ。

第十話「新たな魔導士」

Ｓｉｄｅなのは

あの街中での暴走体との戦いからしばらくして、私は今日、ユーノ君とお兄ちゃん、それにライナ君と一緒にお友達のすずかちゃんのお家に向かっています。
本当は直哉くんが来る予定だったのですが、直哉くんはお友達の蛍君と社君に無理矢理連れていかれたから自分がその代理にされた。と、ライナ君が言っていました。

それをすずかちゃんに伝えたところ、快く承諾してくれたので、今さっき言った人数ですずかちゃんのお家に行く事になりました。

そして今はみんなでバスの中。私はライナ君とお話しています。

「それにしても」

「？」

「直哉の代わりとはいえ、本当に俺が来て大丈夫だったのか？」

「うん。すずかちゃんも大歓迎だって言ってたから、大丈夫だよ」

「そうか・・・・・・それはそれとして」

「？　どうしたの？」

言いながら、ライナ君は後ろの方をちらちらと見ています。

「・・・なのは。お前の兄からの視線をどうにかしてくれ」

「ふぇ？　お兄ちゃん？」

そう言われて後ろを見ると、お兄ちゃんがなんだか難しい顔をしながらこちらを・・・と言うより、ライナ君を見ていました。

む～。直哉くんの時もそうだったけど、お兄ちゃんはちょっと私のお友達に対して厳しすぎる気がするの。

そんな意味をこめながらちょっとだけお兄ちゃんを睨んで、後は顔を背けます。後ろでお兄ちゃんがショックを受けたような気がしましたけど、無視します。

ちょっとは反省してね、お兄ちゃん。

それからしばらくして、私たちはすずかちゃんのお家に着きました。すずかちゃんのお家は豪邸と呼んでもいいくらい大きくて、それを見たライナ君は・・・

「・・・こんな家が・・・あって良いのか・・・？」

とか言って、とっても驚いていました。

そんなライナ君を引っ張って、お屋敷の扉の前でお兄ちゃんが呼び鈴を鳴らします。

それからしばらくして扉が開くと、そこには一人のメイドさんがいました。

「恭也様になのはお嬢様。ようこそいらっしゃいました」

深々と頭を下げて私たちに挨拶してくれたのは、すずかちゃんのお家のメイドさん、ノエルさんでした。

「ああ。招かせてもらったよ」

「こんにちは、ノエルさん」

私とお兄ちゃんがそれぞれ挨拶をします。

「それで、そちらの方が・・・」

「はい。お友達のライナ君です」

横で呆気にとられていたライナ君を隣に寄せます。

「・・・あ。ラ、ライナといいます。今日は、招いていただいて、ありがとうございます」

「ご丁寧にどうも。私は、月村家に仕えています、ノエル・K・エーアリヒカイトと申します」

そう言って、ライナ君にも深々と頭を下げるノエルさん。・・・あ、ライナ君がどうしたらいいかわからなくて慌ててる。珍しいもの見ちゃったの♪

「では、案内させていただきます。どうぞこちらへ」

そう言って歩きだしたノエルさんの後ろを、私とお兄ちゃん、遅れてライナ君がついていきます。

「・・・・・・凄いな」

隣に座るライナ君からそんな言葉が聞こえます。

あれからしばらくして、私とライナ君はすずかちゃんと、先に来ていたアリサちゃんと一緒にお茶会を楽しんでいます。

「相変わらずすずかの家は猫天国ね」

「うん。だって可愛いから♪」

すずかちゃんのお家にはたくさんの猫さんがいます。あ、そういえば、さっきユーノ君が猫さんたちに追いかけられてたっけ。

ちなみに、お兄ちゃんはさっき、ノエルさんに連れられて部屋から出ていきました。きっと忍さんの所だろうな・・・。
出ていく時に、ライナ君の耳元で何か囁いてたけど・・・まぁいいの。

「でも、里親が決まっちゃってる子もいるから、その内お別れしないといけないんだ・・・」

「そっか・・・それにしても・・・」

アリサちゃんがライナ君の方を見ます。するとそこには・・・

「・・・なんで・・・こんなに寄って・・・」

肩や膝の上にたくさんの猫さんを乗せて、なんだかもふもふされているライナ君がいました。

「にゃはは・・・ライナ君って、結構動物に好かれやすいのかな？」

「かもしれん・・・ふぁっ？！　どいつだ、今首を舐めたヤツは！」

猫さんに首を舐められて、ちょっと可愛い悲鳴を上げるライナ君には、肩から頭の上に移動した猫さんもいれば、膝の上でまどろんでいるのや、足に頬擦りしている子もいました。

「ふふっ♪　みんな、ライナ君のこと大好きみたいだね♪」

「ははっ・・・少しだけ喜んでいる自分がいる・・・」

苦笑しながら猫さんたちの頭を撫でたりするライナ君。

でも、途中で暗い顔になって言います。

「・・・直哉は来なくて正解だったかもな」

「「「？」」」

ふぇ？　直哉くんは来なくて正解って・・・。

「どういう意味よ？」

アリサちゃんが、私たちを代表して訊いてくれます。

「ああ。ここだけの話なんだが、ああ見えてあいつは、かなりの動物好きなんだ」

「ふぇ、そうなの？」

「意外ね・・・そういうの、興味無さそうなのに・・・」

「ああ、意外だろう？　だが、動物の方もそうというわけじゃなくてな・・・」

「・・・え、それって・・・」

遠い目になったライナ君に、口元を引きつらせたすずかちゃんが訊きます。

「・・・・・あいつはすさまじく動物が好きなんだが・・・あいつ自身は、なぜかすさまじく動物に嫌われるんだ・・・親の仇といわんばかりに・・・な・・・」

「「「・・・・・・」」」

その言葉に、私たちの空間温度が少し下がった気がしました。

「そのせいで、あいつが心に酷い傷を負う事件が、二年程前にあったんだが・・・・・・くっ」

そこで言葉を止めて、ライナ君は苦しげに目を逸らします。

（（（直哉（くん、君）に一体何が！！？））））

もの凄くその事件の真相が知りたくなりましたが、直哉くんの名誉のためと、ライナ君に話す気が無いようなので、私も、アリサちゃんもすずかちゃんも、この事に触れるのはやめておきました。

「（なのは、ライナ！）」

「「？！」」

それから、更にしばらくお茶会を楽しんでいると、ユーノ君がジュエルシードの反応をキャッチしたようで私たちに教えてくれました。

「（ユーノ、場所は？）」

「（すぐ近く。あの森の中だよ）」

言いながら、ユーノ君が森の方を示します。

「（でも、どうしよう・・・アリサちゃんたちの前で堂々と回収に行くわけにも行かないし・・・）」

「（・・・考えがある）」

「（本当！？）」

「（ああ。ユーノ。お前がまず先に行け。それで、なのは。お前はユーノを探しに行くと言ってユーノと合流、そのままジュエルシードの封印と回収に向かえ。少し時間を空けて俺も行く）」

「「（（わかった（の）！！））」」

話を終えて念話を切る。ユーノ君はすぐに行動に移ってくれた。

「キュー！」

「え、ユーノ君？！」

「ちょ、どうしたのよ急に！」

突然のことに、アリサちゃんとすずかちゃんが驚きます。そんな二人を見ながら、私も言われた通りに動きます。

「何か見つけたのかな・・・・・私、ちょっと追いかけてくる！」

そう言って、私もユーノ君に続いて走り始めます。

「「なのは（ちゃん）！？」」

しばらく走ると、ユーノ君が結界を張って待っててくれました。

「お待たせ、ユーノ君」

「ううん。それじゃあ、行こう。でも、何が来るかわからないから気をつけて」

「わかった！」

そうして、私たちは結界の中に入りました。

≪にゃ～ん≫

「「・・・・・・」」

結界の中に入った私たちが最初に見たのは、とっても大きな・・・・・・とっても大きな（大事なことなので二回言いました）猫さんでした。

「えっと・・・ユーノ君、あれって・・・」

「たぶん・・・子猫の”大きくなりたい”って願いを、ジュエルシードが叶えたんだと思う・・・」

「そう、なんだ・・・」

話しながら、大きな猫さんを見る。猫さんは、首についた鈴を鳴らしながら、辺りを見回していました。

「襲ってくる心配は無さそうだ・・・けど、あのままじゃ危険だから、早く終わらせよう、なのは」

「そうだね。あんなに大きいと、すずかちゃんのお家も大変そうだし・・・」

「うん。じゃあ、なのは・・・・・っ！」

ヒュンッ

「・・・・・・え？」

瞬間、私たちの横を通りすぎた黄色い光の槍が、猫さんに直撃しました。

≪ふにゃあああああああ！！？≫

「ああっ！？」

「そんな・・・魔力反応？！　どこから・・・！」

ユーノ君の言葉にふと後ろを見ると、そこには、黒いマントをはためかせ、手に黒い斧を持っている、金髪の女の子がいました。

「・・・バルディッシュ。フォトンランサー、連撃」

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ．　Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ，ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ　ｆｉｒｅ』

次の瞬間、バルディッシュと呼ばれた斧から次々と雷の槍が撃ち出され、猫さんに向かっていきます。

「・・・レイジングハート、お願い！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ』

私はレイジングハートを装備すると、飛行魔法を発動させて、猫さんの背中まで飛んでいきます。

『Ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

そして、広い範囲に防御魔法を張って、女の子が撃った槍を防ぐ。

「魔導士・・・？」

女の子は訝しげに私を見るけど、その攻撃は続けられている。

≪にゃあああああ！！！≫

「あっ！？」

猫さんは足元を撃たれたようで、そのまま地面に倒れこんでいく。
同時に、その背中に乗っていた私もバランスを崩して、地面に落ちていきます。

『嬢ちゃん！！』

けど、私の身体は地面に叩きつけられる前に、何かに受け止められた。

見ると、私の視界には大きな黒い鱗みたいな物が広がっていました。

「あ・・・ヴリトラさん！？」

それは、この間の戦いで知り合った、いつもライナ君と一緒にいる、龍のヴリトラさんの背中でした。

『遅れて悪かったな。けど・・・大将も来てるぜ！！』

「ドラグーン！！！」

『Ｙｅｓ，ｍｙ ｌｏｒｄ． Ｅｎｅｒｇｙ ｆａｎｇ，ｓｔａｎｄ ｂｙ』

「！？」

いきなり聞こえた声の方に顔を向けると、そこには白い鎧に身を包み、同じく白い槍を女の子に向けて、周りに白色の牙を出現させているライナ君がいました。

Ｓｉｄｅライナ

『主、高町嬢以外の魔力反応を感知しました』

なのはとユーノがジュエルシードの所に行ってから数分後、アリサとすずかの二人に、なのは達を追う、と伝えた俺に、ドラグーンがそう伝えた。

「なのは以外？　直哉か？」

『いえ、どうやら違うようです。感じた事の無い、魔力を感じます』

「そうか・・・なら、俺達もそろそろやるぞ」

『Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ』

「龍魂顕現！　来たれ、神龍！！」

俺がそう叫ぶと、俺の周りに白と黒、２色の魔法陣が展開され、そこからそれぞれアルビオンとヴリトラが現れる。

『お呼びでしょうか、主？』

「ああ、出番だ」

『承知しました』

「ヴリトラ。お前は一足先に行け。戦闘形態になるのは、お前の判断に任せる」

『了解！』

「なのは達を頼むぞ」

俺の言葉を背に、ヴリトラは先行して、結界の場所に向かう。

「さぁ・・・やるぞ、お前ら！」

『承知！！』

『Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ』

「ドラグーン、セットアップ！！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ』

「・・・よし！　アルビオン、融合！！」

『Ｆｕｓｉｏｎ』

俺はドラグーンを装備し、すぐにアルビオンと融合する。こうして戦闘体勢を整えた俺は、ヴリトラの後を追って結界へと入っていった。

結界の中に入ると、そこにはジュエルシードの暴走体と思われる、なぜか傷だらけな巨大な猫、それに向けて雷の槍を連射している謎の少女と、その攻撃から猫を守っているなのはの姿があった。

「あれは・・・」

『魔導士のようですね』

『恐らく、目的は我らと同じくジュエルシードかと』

「ともかく、なのはが警戒しているあたり、敵である事に間違い・・・・・」

≪にゃあああああ!!!≫

「『『!?』』」

突如、猫が叫び声を上げながら倒れていく。どうやら足をやられたらしい。

そして、同時に猫の上に乗っていたなのはも地面に落ちていく。が、それを間一髪ヴリトラが受け止めていた。

「・・・ドラグーン。あそこまで飛べるか?」

『可能ですが、長時間の滞空は不可能です』

「十分だ。頼む」

『Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ．　Ｓｋｙ　ｗａｌｋ』

俺は一時的な飛行魔法を使い、少女と同じ高さまで飛翔する。同時

に、エナジーファングの準備を始める。

「ドラグーン！！！」

『Ｙｅｓ，ｍｙ ｌｏｒｄ． Ｅｎｅｒｇｙ ｆａｎｇ，ｓｔａｎｄ ｂｙ』

「！？」

ドラグーンを構え、少女に向ける。
どうやら気付いたようだが・・・遅い！！！

「行け、ファング！！」

『Ｆｉｒｅ』

ドラグーンの機械音声が響き、六本のファングが少女に向かって飛んでいく。

「新手か・・・くっ・・・！」

が、少女はその身に纏ったバリアジャケットに所々ファングを掠めながらも、その全てを避けきってみせた。

「チッ・・・」

『Ｗａｌｋ　ｏｕｔ』

ファングを避けた少女は、近場の木の枝に着地する。飛行魔法が解除された俺は落下していくが、途中でヴリトラに拾われた。

『無事ですかい？』

「ああ。助かった」

そのまま地面に降りる。

「ライナ君・・・」

「すまない、遅れた」

「ううん、いいんだけど・・・」

言いながら、なのはは木の枝に立つ少女に視線を向ける。

「・・・あいつは？」

「わからない・・・いきなり、あの猫さんを襲ったの・・・」

「・・・そうか」

言って、俺も少女に意識を傾ける。

見たままのイメージは、言うなれば”死神”。
全身を黒いバリアジャケットで覆い、手には同色の斧。金色の長い髪をツインテールに纏め上げている。
そうやってしばらく睨みあっていると、やがて少女が口を開く。
「・・・同系の魔導士。ロストロギアの探索者か」
「・・・・っ」

ユーノが息を呑む。どうやら、やはり目的はジュエルシードのようだ。それに・・・
「ジュエルシードの正体を知っている・・・？」
「・・・？」
この空気の中、なのはだけが内容を把握しきれないでいた。
こいつ、ジュエルシードの事聞いてないのか・・・？
「バルディッシュと同型のインテリジェントデバイス・・・」
「バル、ディッシュ・・・？」
バルディッシュ。それが恐らく、あのデバイスの名前だろう。

「・・・・・・ロストロギア、ジュエルシード」

『Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ，ｓｅｔ　ｕｐ』

言いながら少女がゆっくりと構えると、斧の形が変わり、金色の魔力刃を持った鎌となる。

その鎌を構えた姿が、”死神”というイメージを増長させる。

「・・・申し訳ないけど頂いていきます」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

言うやいなや、少女はなのはとライナに向かって斬りかかる。

「チッ！」

ライナとなのははそれを、それぞれ別の方向に飛ぶことで回避する。

『Ａｒｃ　ｓａｂｅｒ』

少女が持つ鎌―――バルディッシュの機械音声に続いて、少女がなのはに向けてそれを振るうと、金色の魔力刃がなのはに向かって飛んでいく。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

が、間一髪、レイジングハートがそれを防壁を張る事でなんとかしのぐ。

辺りに煙が立ち込めるが、ライナは少女を視界に捉えていた。

「はぁあああああ！！！」

ライナはヴリトラを駆り、一気に少女に斬りかかる。

「くっ・・・！」

ギィィンッ！！

白色の槍と黒色の鎌がせめぎあう。

「・・・一応・・・目的を訊いても・・・！？」

「・・・答えても・・・多分、意味は無い・・・」

言うと、少女はライナの槍を弾き、そのまま距離を取る。

「まだまだ・・・っ？！」

それを追おうとしたライナの身体を、金色の輪が縛る。

「くっ・・・バインド・・・！？」

「さすがに、二人を同時に相手にするのは無理があるから・・・・・・言っておきますが、簡単には外せません」

そう言って、少女はなのはへと目を向ける。

『Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ，ｓｔａｎｄ　ｂｙ』

なのははレイジングハートを構え、その砲口を少女に向けていた。

「・・・バルディッシュ」

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ．　Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ，ｇｅｔ　ｓｅｔ』

それに対し、少女は雷の槍を展開、なのはに向ける。

≪にゃああ・・・≫

「えっ・・・」

突如響いた暴走体の猫の弱々しい鳴き声に、なのはの意識が向けられる。

「・・・ごめんね」

『Ｆｉｒｅ』

その隙を見逃さず、少女は雷の槍を一斉に発射する。

「あっ！？」

「なのはぁ！！！」

『クソがッ！！！』

「！？　ヴリトラ！！」

なのはに迫る槍を防ぐように、ヴリトラがその前に立つ。

が、そんな行動も虚しく、雷の槍はなのはとヴリトラを飲み込み、爆発した。

「なのは・・・ヴリトラ・・・！　クソ、クソ、クソッ！！」

自分にかけられた拘束を解こうと、ライナは必死でもがく。

「外れろ！　さっさと壊れろ！！　今すぐに！！！」

が、そんな抵抗も意味を為さず、その間に少女はジュエルシードを封印、回収を果たしていた。

「・・・訊いてもいいですか？」

ライナを一瞥しつつ、少女が問いかける。

「！？」

「あなたは・・・あなた達は、何のためにジュエルシードを？」

「・・・貴様に何か関係があるのか？」

互いに相容れないと言わんばかりに、二人は睨みあう。やがて、ライナが口を開く。

「・・・哀しい。そして、空しい眼だな」

「・・・？」

「お前の眼には、お前の意志が感じられない。少なくとも、俺の家族や、そこのなのはの様な確固たる”意志”がな」

「・・・・・・」

「・・・ジュエルシードを集める理由は訊かない、だがこれだけは訊く。・・・お前は一体、何のために戦っている？」

「・・・・・・それこそ」

「・・・・・・・」

「あなたには、関係ありません」

少女は敵意を孕んだ眼で・・・哀しみを滲ませた眼で、ライナを睨む。

「・・・だろうな」

「・・・・」

「・・・・・・ライナだ」

「？」

「敵の名前くらいは知っておいて損は無いだろう。俺の名はライナ。お前は？」

「・・・フェイト。フェイト・テスタロッサ」

静かな、淡々とした口調で少女・・・フェイト・テスタロッサは名乗る。

自分の目の前で、臆する事無く、瞳に強い光を宿す少年に。

「フェイト・テスタロッサ、か・・・覚えておく」

「・・・それでは」

そう言い残し、フェイトは飛び去っていった。

Ｓｉｄｅなのは

「う・・・ん・・・・」

あれ・・・私・・・・。

「気がついたか？」

「ふぇ・・・？」

目を開けて声の主を探す。すると、すぐ側にライナ君とユーノ君がいました。

「ライナ君・・・ユーノ君・・・私・・・・」

「あの女の子の攻撃を受けたんだよ。ヴリトラが庇ったから、彼に比べれば何てことは無いけど・・・」

そっか・・・ヴリトラさんが助けてくれたんだったっけ・・・。

アルビオンさんも見当たらないけど・・・帰ったのかな？

「・・・・・そうだっ！　ジュエルシード！！」

「残念ながら、あの魔導士が回収していった。・・・すまない。止められなかった」

ライナ君が暗い顔で謝ってきます。

「ううん。私も気絶しちゃってたし・・・」

「僕の力不足もあったんだ・・・」

ユーノ君も落ちこんだ様子で喋りかけてきます。

「負けちゃった、ね」

「ああ・・・今回は、俺達の負けだな・・・」

とっても・・・哀しい眼をしてたな・・・あの女の子・・・。

なんとかお話・・・できないかなぁ・・・？

Ｓｉｄｅライナ

「新しい魔導士・・・ねぇ」

その日の晩。
家に帰った俺は、直哉とニールに今日起こった事を全て話した。
新たな魔導士が現れた事と、そいつに敗北した事など、全てを。

「その子・・・フェイトって言ったっけ？　そいつにも、何かしらの理由があるんだよな？　」

「ああ。だが、意志が欠如していた。まるで・・・人形であるかのように」

「人形・・・」

「・・・ライナ」

話が一段落したところで、ニールが口を開く。

「？　なんだ？」

「その子の姓・・・”テスタロッサ”でいいんだよな？」

「そうだが・・・何かあるのか？」

「いや・・・ちょっと、な・・・」

「「？」」

Ｓｉｄｅフェイト

ジュエルシードの回収を終えた私、フェイト・テスタロッサは、活動の拠点にしているマンションの一室の、自分の部屋で今日の事を振り返っていました。

「・・・ライナ・・・」

浮かんでくるのは、あの白い鎧を着た男の子の事。

バインドをかけられ、身動きが一切とれない状態でも、戦意を全く失わなかった子。

「私の意志・・・」

ライナが言った言葉を反芻する。ライナは、私の眼に意志が無い、

と言っていた。何のために戦うのか、とも。

「意志ぐらい、ある・・・私は、母さんのために、私の意志で・・・」

そう。私は私の意志で、母さんのために戦い、ジュエルシードを集めている。

それを、誰にも否定なんてさせない・・・！

「・・・それにしても」

そこまで考えて、私の思考は別の事に移る。

「・・・・・・綺麗な瞳(め)だったなぁ・・・」

ライナの瞳。

綺麗に澄んだ、深い海の様な蒼い瞳。

気を抜いたら、吸い込まれそうな程に美しい瞳。

でも、その奥には激しい激情と、ほんの僅かな寂しさが見え隠れしていた。

「・・・ライナ・・・か・・・」

呟く。彼の名を。

思う。彼の事を。

そして知りたい。彼自身の事を、もっと。

「・・・って、何考えてるんだろう私／／／／」

自分の考えがおかしな所に行き着きそうになったので、強引に打ち切る。

・・・少しだけ頬が熱かったけど、気にしない。

「ああもう。明日も速いんだし、速く寝ちゃおう」

そう言って、ベッドに潜る。すると、思いの外、早めに睡魔が襲ってきた。

「・・・・・また、逢えるかな・・・？」

無意識の内にそんな事を呟いて、私の意識は闇に落ちた・・・。

第十話「新たな魔導士」（後書き）

j「フラグが建ったよー！！」

フェイト（以下、フ）「ひゃっ！？　ど、どうしたんですか、いきなり？」

j「いや。特に意味とかは無いよ？　ただ無性に叫びたくなっただけ。それはそうと、ようこそ。今回のゲストで、ヒロインの一角のフェイトさん」

フ「は、はぁ・・・よろしくお願いします・・・」

j「じゃあ、挨拶も済んだところで。リアルに時間が無いから、速いとこやっちゃおっか」

フ「は、はい」

ｊ「さて。今回は、みんな大好きな君の登場だったんだけど」

フ「大好きって・・・そんなに言われるような人間ではないですよ、私」

ｊ「まあまあ、そう言わんと。んで？　話変わるけど、あの二人の事はどう感じた？」

フ「そうですね・・・あの白い女の子はともかく、ライナは今後、要注意です。私とあまり変わらない年齢なのに、あの眼は危険に感じました」

ｊ「なるほどね・・・終盤は、ライナについて色々と考えてたみたいだったけど」

フ「え、えぇ、まぁ。なんていうか・・・不思議な人・・・でいいんでしょうか？　あの歳で、あの眼の光。過去に何があったのか、気になりました」

ｊ「なるほどなるほど。つまり、寝ても醒めてもライナの事が頭から離れない、と」

フ「なっ！？　ち、ちが・・・っ！／／／／」

ｊ「照れるな照れるな。それじゃ、今回はこの辺ｄ・・・・・・フェイトさん？　なしてバルディッシュを？」

フ「・・・・・・少し、頭冷やそうか？」

ｊ「ちょっ！？　それ完璧フライング！！　それに君のセリフじゃ・・・！」

フ「フォトンランサー、連撃！！！」

バルディッシュ「Ｙｅｓ，ｓｉｒ」

ｊ「あ、ちょっ、やめ・・・！」

作者消し炭につき強制終了。

ご意見やご感想など、お待ちしています。

第十一話「海鳴温泉にて」（前書き）

第十一話投降です。

今回はちょっとだけ短めです。

ていうか、感想が・・・欲しいです・・・！

まぁ、それはそれとして。

では、駄文ですが、どうぞ。

第十一話「海鳴温泉にて」

Ｓｉｄｅ直哉

ライナとなのはが新しい魔導士・・・フェイト・テスタロッサと遭遇してからしばらく。
なのはに、連休を利用して温泉に行こう、とライナ共々誘われた。
まぁ、断る理由も無いので受けておいた。

ニールさんは、この間フェイト・テスタロッサの事を聞いた後、休暇がそろそろ終わりそうだったのと、雲行きが怪しくなってきたと言い、時空管理局の本局に行っているためしばらく家を空けている。
まぁ僕らから見れば、多分ミッドチルダにいる奥さんや子供たちへの家庭サービスもあるんだとは思うけど。

ちなみに行く面子は、高町家、月村家、アリサと、結構な大所帯だ。
気が向いたので、蛍と社も誘ってみたのだが、二人とも家族で旅行するらしく、断られてしまった。

若干残念に思ったのは内緒だ。

そんなわけで、僕らは今温泉に向かう車の中にいる。後部座席には、いつもの女子三人と僕＋ライナ。大型車のため、みんなして座っていても、結構快適だったりする。

「なんか悪いな、いつもお誘いいただいちゃって」

「ううん。どうせなら皆一緒の方が楽しいし」

「何だかんだ言っても、どうせヒマなんでしょ、あんた達？」

「だから、気にしないで」

僕の言葉に、なのは、アリサ、すずかが続く。ちなみにライナは窓際で爆睡中。

座る位置を説明すると、僕の両隣になのはとライナ、向かいにアリサとすずかが座っている感じだ。

「にしても・・・よく眠れるわね、ライナ」

「まぁ、ある種の才能なのかもな。こいつ、基本こういう旅行とかだと、行き帰りの車内とかじゃいっつもこんななんだ」

「にゃはは・・・意外と呑気なのかな？」

「でも、気持ちよさそうに眠ってるね・・・ふわ・・・なんだか私まで眠くなってきちゃった・・・」

「くぁ・・・それも、ライナの凄いとこ」

あ、やば・・・僕まで眠い・・・でも、このまま寝るのもなぁ・・・。

「うぅ・・・」

いつの間にか会話が途切れていたので、眠気を堪えつつ辺りを見回す。

「すぅ・・・・」

「くぅ・・・・」

見ると、すずかとアリサは肩を寄せあって眠っていた。

「・・・恐るべし、ライナ・・・・」

そんな二人を眺めている内に、僕も本格的に眠くなってきたので、少しずつ意識を落としていく。

ぽふっ

「・・・・・・・ぅあ？」

ふと、右肩に柔らかい感触を感じたのでそこを見ると・・・・。

「うにゅぅ・・・」

そこには、なのはが僕の肩に頭を乗せて眠っていた。

「はぁ・・・」

空いていた左手でなのはの頭を軽く撫でながら、起きたらライナを一発しばいておこうと思いつつ、僕は意識を落とした。

「・・・直哉、俺はなぜ殴られた？」

「知るか。僕だってものすご殺気当てられてるんだから、何も訊くな」

あの後、車の中で眠ってしまった僕らを美由紀さんと恭也さんが起こしに来たことで僕達は目が覚めた。

まぁ、なのはが僕の肩を枕にしてたせいで、僕は現在進行形で恭也さんのガチな殺気を食らってるわけなんだけど。

そんなわけで、宣言通りにライナを一発しばいておいて、僕らは目的地の海鳴温泉に到着した。

ちなみに、今は大人達が受付に行っているので、僕ら子供は暇を持て余しているところである。

『・・・・・・何でいんの？』

『こっちのセリフ・・・・・・何でいんの？』

「・・・・・・」

「？　どうした、直哉？」

「いや・・・何だか、すさまじく聞き覚えのある声が・・・」

『・・・ん？　なぁ、あれって直哉じゃね？』
『へ？　・・・あ、ほんとだ。みんなもいるね』

「・・・蛍と社だな」
「やっぱりかチクショウ！」
何やってんのあいつら！？

そんな風に思いつつ、家族旅行に行っているはずの二人・・・蛍と社のもとへ向かう。

「よっ。奇遇だな、社と良い、お前らと良い」

「奇遇だな、じゃねぇよ。家族旅行はどうした？」

「いや、それがさ。本来行くはずだった場所がいきなり休業しやがんの。んで、もしもの時のために予約しといたここに来たってわけ。ちなみに、母さんと俺の二人だけ。姉ちゃんは友達の家にお泊まり」

「俺はじいちゃんやばあちゃんと来たんだ。元々ここに来る予定だったんだけど、直哉達も一緒だとは思わなかったよ」

「なるほど・・・」

ていうか、事前連絡も無しにいきなり休業とかして大丈夫なのか？

潰れるぞ下手すりゃ。

「蛍〜。お待たせ・・・って、あら。直哉君じゃない」

しばらく談笑していると、一人の女性がこちらに歩いてきた。

「どうも。ご無沙汰してます、遊（ゆう）さん」

「どうもです」

「あらあら、社君まで。すごい偶然もあるものね」

そう言って柔らかく笑うこの人は、進藤　遊さん。察する通り、蛍の母親だ。

ちなみにこの人も若く見える、めっちゃ見える。

街を歩いていると、未だにナンパとかされるらしい（蛍は微塵も信じちゃいないが）。

でもって、この人・・・。

「あらそうなの。お友達・・・しかも、高町さんの所の人達と旅行ねぇ・・・（むぎゅう）」

「・・・・・・あの、母さん。世間話は良いけど、俺を抱きしめながらはやめてくれない？」

「やっ」

「いい歳して可愛らしくすんなや！」

「うぅ・・・蛍が素直じゃない・・・昔はどんな時でも私の服にしがみついてた上に、私にだっこされて、満面の笑みで笑ってたのにい・・・」

「やめて！！　それ幼稚園の頃の話だから！！　今はもうそこまで子供じゃないから！！！／／／／／」

「でも、今でも一緒にお風呂入ったり・・・」

「俺が入ってる所に母さんが突入してくるだけだから！！　ていうか、これ以上のカミングアウトはやめてぇぇぇぇ！！！／／／／／」

顔を真っ赤にした蛍がその場に蹲る。

そう。この人、自分の息子がものすごく好きなのだ。それはもう、家族愛を通りこす勢いで。

余談だが、蛍のお姉さんもこんな感じだった。

「うぅ・・・／／／／」

「ああ・・・やっぱり蛍は可愛いわぁ・・・ねぇ、蛍？　やっぱり一緒にお風呂・・・」

「ホントにマジでもう勘弁してください・・・」

涙目になりつつ頭を下げて、本気で懇願する蛍。

「あらそう・・・・・・じゃあ、蛍。お母さん、先に部屋に行ってるからね。知らない人についていったりしちゃダメよ？」

「わかってるよ・・・」

「それじゃあ、みなさん。うちの愛息をお願いします」

「は、はぁ・・・」

何の躊躇いも無く愛息っつったよこの人・・・。

「・・・・・ホントに愛されてるね、蛍」

遊さんを見送った後で社が一言。

「愛されてるのはわかるけど、デカすぎるっての・・・」

呆れるように蛍が呟く。

「・・・まぁ、でも」

「「？」」

「ああいう母さんだから・・・俺も姉ちゃんも、大好きなんだけど・・・」

「「・・・・・・」」

「・・・誰にも言うなよ？／／／／」

少しだけ頬を染めながら言う蛍が、今だけは微笑ましく見えた。

「・・・みんな、そろそろ部屋に行くみたいだぞ？」

と、今まで空気を読んで黙っていたライナがなのは達の方を見ながら言う。

「ん、わかった。・・・僕達は行くよ、また後で」

「うん。またね」

「後でな」

「おう」

二人と別れ、僕とライナはなのは達の後を追った。

部屋に荷物を置いた僕達は、とりあえず温泉に行こうという話になったので、着替えを持ってみんなで温泉に（蛍や社とは部屋を出たあたりで合流した）。

途中、ユーノが女湯に連行されそうになったが・・・。

「なのは。ユーノはこっちで預かるよ」

「ふぇ？　でも・・・」

「（直哉！　良い所に！）」

「（大丈夫だ、任せろ）」

助けを求めてくるユーノに念話で呼びかける。

「良いだろ？　第一、ユーノはオスだ。きっと」

「う～ん・・・でも・・・」

「はいはい。んじゃ、フェレット一匹ごあんな～い」

「あっ！」

渋るなのはの手からユーノを強奪。そのまま早足で男湯へと入る。

「（ありがとう直哉・・・）」

「（気にすんな）」

ユーノを脱衣所の棚に置き、服を脱いでいく。

「（ところでユーノ。ジュエルシードの反応はあるか？）」

「（あ、うん。今は弱いけど、多分、今夜中には発動すると思う）」

「（そっか）」

「（・・・ユーノ）」

ユーノと話しているとライナが会話に入ってきた。

「（？　何、ライナ）」

「（・・・フェイト・テスタロッサは来ると思うか？）」

「（・・・・・・）」

「（・・・きっと来る。ジュエルシードを求めているのなら、必ず）
」
「（・・・そうか）」
それだけ言うと、ライナは浴場へと向かっていった。
「（・・・・・・）」
「・・・僕達も行こうぜ」
「・・・・・・うん」
ユーノを肩に乗せ、僕もライナに続いて浴場に向かった。

「「「「・・・プハァ～」」」」
風呂上がり。ライナ、蛍、社と四人で牛乳飲んでます。
どうでもいいが、僕がコーヒー、ライナが普通、蛍がイチゴで社がフルーツだった。

「お。出てきた」

「あ、ホントだ」

牛乳のビンを捨てたところで、なのは達女性陣が脱衣所から出てきた。

「あ、みんなもう上がってたんだ」

「女子は結構かかるんだな」

「まぁね。身だしなみに気を使うのよ、あたし達は」

そんな風に、他愛ない会話をしながら暇潰し目的でゲームコーナーに向かっていく。

「はぁ～い、そこのお嬢ちゃんと坊や達」

「ふぇ？」
「はい？」
「え？」
「あ？」
「んぁ？」
「へ？」
「・・・」
上からなのは、アリサ、すずか、僕、蛍、社、ライナの順番。
突如かけられた声に振り向くと、そこには浴衣を着たオレンジ色のロングヘアーの女性がいた。
「ふむ・・・」
「あの・・・何か？」
品定めでもする様に僕らを見る女性に、アリサが訊く。
が、そんな事はどこ吹く風と言わんばかりに、女性はなのはとライナに近づく。
「君達かい？　うちの子をアレしてくれたっていうのは」

「ふぇ？」

「・・・・・・」

なのははわけがわからない様子、ライナは思い当たる事があるのか、眉をひそめている。

「ちょっ、なんなんですか急に！」

いきなり二人に絡んだ女性に、アリサが食ってかかる。
が、女性は気にする事なく獰猛な・・・獣の様な笑みを浮かべ、なのはとライナを見ている。

「あ、あの・・・えと・・・」

「・・・・・・」

うろたえているなのはと、考え事でもしているのか、無言のライナ。
そんな時、女性の表情が僅かに驚きに変わった。

「（・・・直哉）」

「（！？　なんだ、急に念話なんて・・・）」

「（この女は普通じゃない。念話が通じる）」

「（マジでか！）」

ライナの言葉で、試しに女性に念話をかけてみる。

「（あ～、テステス。聞こえます？）」

「（？！　だ、誰だい！？）」

「（あ、僕です。黒髪に赤眼の）」

「（あんたもだったのかい！？）」

あんた”も”って事は・・・やっぱ、魔導士絡みか。

「（チッ。今の状況じゃ・・・）・・・いや～、ごめんごめん。人違いだったみたいだよ。知ってる子たちに似てたみたいだから、つい」

念話を切ると、女性はおどけた様子でなのはとライナに謝罪し、その場から立ち去ろうとする。

「（・・・・・今回は挨拶だけだ）」

「！？」

いきなりかかってきた念話に、なのはが息を呑むのがわかった。

「（忠告しとくよ。あんまりアタシ達に関わらない方が良い。でないと・・・・・・）」

そして、女性は鋭い眼で僕らを睨みつつ続ける。

「（・・・ガブッといくよ？）」

第十一話「海鳴温泉にて」（後書き）

蛍はマザコン（笑）。

これだけ言っておきます。

誠に申し訳ありませんが、今回も後書き座談会は休みにしたいと思います。

勝手ではありますが、次回にまとめて行おうと思います。

では、また次回に。

ご指摘される点、ご意見やご感想をお待ちしています。

第十二話「対峙」（前書き）

みなさん、あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いいたします。

そんなわけで、最新話投稿です。

前回から時間が空いてしまいましたが、なんとか更新できました。

それと今更ですが、お気に入り登録の件数が１０件を越えておりました。
このような駄作者の作品を読んでいただき、誠に感謝いたします。

では、新年一発目、駄文&グダグダではありますが、楽しんでいただけたらと思います。

第十二話「対峙」

Ｓｉｄｅ直哉

いきなり絡んできた女性との一悶着の後、僕達は各々の部屋に戻っていた（恭也さんだけはすずかのお姉さんの忍さんに別室に拉致られてったが）。

アリサは納得がいかない風だったが、なのはとすずかが宥めることで、何とか治まった。

そんなわけで、僕とライナは今絶賛会議中である。

「・・・てことは。さっきの人は、フェイト・テスタロッサの関係者で間違い無いんだな、ライナ？」

「ああ。奴は最初、俺となのはだけを見て言っていた。たまたま合っていたとは考えられない。恐らく、フェイト・テスタロッサからある程度の事を聞いていたんだろう」

「なるほどねぇ・・・」

仲間が接触してきたって事は、たぶんフェイト・テスタロッサ本人もここに来てるだろうな。しかも、十中八九・・・

「奴らはジュエルシードの在処を特定してる」

「ああ。その判断で間違い無いだろうな」

となれば、動くのは間違い無く、人目につきにくい夜中だろうな。

「・・・なのはは、話し合いたいみたいだけど？」

「・・・無理だな」

「・・・断言なんだ」

少し前に聞いたなのはの目的を伝えたところ、一蹴された。

「ああいう手合いは、まず間違い無く人の話を聞こうとはしない。自分のやっている事が正しいと信じて疑わない上に、決意だけは一級品だからな」

「・・・・・・」

「その決意の堅さは認めるが・・・俺が気に入らないのは・・・」

「・・・意志が感じられない？」

「・・・」

僕の言葉に、ライナは黙って頷く。

以前にもライナは言っていたが、フェイト・テスタロッサには”自分の意志”が欠如しているらしい。

プログラムされた事だけを忠実に行う、機械や人形の様だ・・・そう、ライナは言っていた。

「じゃあ、僕達の方針は、今まで通りにみんなでジュエルシードを集めるって事でいいのか？」

「ああ。それで構わないだろうが・・・」

「？　まだ何かあるのか？」

「・・・奴は、ジュエルシードを集め終わった後、どうするのか気になってな・・・」

「・・・」

奴、とは、フェイト・テスタロッサの事だろう。

「・・・珍しいな。お前がそこまで他人を気にするなんて」

「ああ・・・自分でも驚いている」

額に手をあて、呆れるように言うライナ。

「・・・なら、こんなのはどうだ？」

「？」

「・・・・・・本気で言ってるのか？」

「ああ」

「・・・・・・はぁ」

僕の言葉に、先程とは違って本気で呆れるライナ。

「・・・お前はそれでいいのか？」

「ああ。僕・・・てか、僕達にも少しはメリットはあるし、ライナもライナで、フェイト・テスタロッサを見極められるだろ？」

「・・・・・・」

「・・・穴はあるかもしれないけど、悪くはないだろ？」

「・・・まぁな」

そう言って、ライナは嘆息して続ける。

「・・・まぁ。なるようになれ、だな」

「よし、決まりだな」

そう言って、布団に潜る僕。

「？　もう寝るのか？」

「ああ。フェイト・テスタロッサが来るのは夜中で間違い無いからな。いざって時に眠くちゃ話にならないだろ？」

「・・・それもそうか」

僕の言葉に頷き、ライナも布団に入る。

「おやすみ、ライナ」

「ああ。おやすみ、直哉」

『起きてくださいマスター』

『主。反応を感知しました』

「んぉ？」

「ぅあ？」

時刻はたぶん、深夜。

ジュエルシードの発動を感知したイヴィとドラグーンに起こされ、僕とライナはゆっくりと旅館から出る。

「イヴィ。場所はわかるか？」

『ここからしばらく先の位置です。急ぎましょう、マスター！』

「あ、ああ。・・・イヴィ、元気がいいな。何か良い事でもあったのか？」

『久しぶりに出番ですので！！』

「出番？」

『・・・いえ、やはり何でもありません。速く向かいましょう、マスター』

「うん・・・」

・・・何か変な電波でも受信したのか？

「・・・ドラグーン、魔力反応は感知できるか？」

『少々お待ちを・・・・・・ありました。後方から来ます』

「後ろ？」

「（直哉くん！　ライナ君も！）」

「（なのは？）」

ドラグーンの言葉に後ろを振り向くと、ユーノを肩に乗せたなのはがこちらに走ってきていた。

念話を忘れない辺り、意外と冷静なのか？

「来たか」

「うん」

「みんな。きっと、あの子も来てると思う。数はこっちが上だけど、気をつけて」

「わかってる。行くぞ！」

そうして、僕達はジュエルシードのある場所へと向かった。

「いた、あそこ！」

しばらく行くと、池の側にフェイト・テスタロッサが、その近くにさっき会った女性がいた。

「は～い、おチビちゃん達。また会ったね」

「おぉう。ビンゴだな、ライナ。グルだぜ、あの二人」

「ああ、みたいだな」

言いつつ、ライナは眼の前のフェイト・テスタロッサを見る。

「ライナ・・・」

「それを・・・ジュエルシードをどうするつもりだ！　それは危険な物なんだ！！」

フェイト・テスタロッサと女性に、ユーノが食ってかかる。

「さてね。答える理由が見当たらないよ」
肩をすくめて、おどける様に女性は言う。
直後、その目付きが鋭いものに変わる。
「・・・それと、忠告はしただろう？　アタシ達に関わると・・・・
ガブッといくってね」

瞬間、女性がオレンジの毛並みをした・・・

「・・・・・・犬？」
『狼だよ！　こんな犬がいると思ってんのかい！？』
「いや、いないとは思うけど・・・」
やべぇ・・・ツッコミの才能あるわ、この人（？）。
『あの人・・・やっぱりあの子の使い魔だ・・・』

「「使い魔？」」

ユーノの言葉に、僕となのはの声が重なる。

『そうさ。アタシはこの子の魔力で造られた、魔法生命体。主から魔力を与えてもらって生きる代わりに、その命と全てをかけて主を守るんだ』

なるほどねぇ・・・。

「・・・アルビオンとヴリトラみたいなもんか？」

「・・・言ったらあいつら怒るぞ」

え？　違うの？

「・・・直哉くん、ライナ君。あの子は私に任せて」

「え？」

そんな雰囲気の中、なのはが一歩前に出て言った。

「・・・大丈夫か？」

「うん・・・前から決めてたの。絶対にお話しなきゃって・・・戦

うことになっても」
「・・・・・・」
神妙な面持ちのライナ。
「・・・ライナ？」
「・・・いいだろう。任せるぞ、なのは」
『ライナ！？』
「・・・だとさ」
『直哉まで！！』
ユーノが僕達に食ってかかるが、目線でそれを黙らせる。
「本人がやるって言ってんだ。だったらそれを尊重してやれ」
『だけど・・・』
「・・・大丈夫だよ、ユーノ君」
『なのは・・・』
「・・・行こう、レイジングハート」
『ＯＫ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ』

そうして、セットアップを済ませたなのははフェイト・テスタロッサの所へと向かった。

Ｓｉｄｅライナ

『さてと。じゃあ、そろそろこっちも始めようかい、ボウヤ達？』

なのはがいなくなったのを見計らい、狼となった女がこちらに一歩近寄る。

「・・・ユーノ」

『うん、わかってる』

直哉が送る視線に、ユーノが頷く。

「ライナ。僕はユーノの方に行くから、なのはを頼むよ」

「・・・・・・ああ、わかった」

「上手くやれよ？　・・・例の件」

「ああ」

『さっきから何をゴチャゴチャと！』

そこに、狼が爪を立てて突っ込んできた。

「やれ、ユーノ！！」

『わかった！　転送！！』

『ッ！？　しまった！』

「んじゃ、ライナ！　また後で！！」

ユーノが発動した転送魔法に狼が巻き込まれ、直哉がそこに飛び込む。次の瞬間には、その場には俺以外には誰もいなかった。

「やれやれ・・・」

『苦労しておりますか、主？』

俺の嘆息に、ドラグーンが心配するように訊いてくる。

「いや、大した事じゃない。それよりも、だ」

ドラグーンに苦笑しながら伝え、俺は魔法陣を展開する。

「龍魂顕現・・・来たれ、黒き神龍」

俺の言葉に魔法陣が反応、隣に漆黒の魔法陣が現れ、そこからヴリトラが現れた。

『よっ、と・・・今回は俺だけですかい、大将？』

「ああ。今回は戦闘が目的じゃないからな。・・・ヴリトラ、フェイト・テスタロッサの”匂い”を覚えておいてくれるか？」

『は？　・・・まぁ、いいっスけど・・・』

「なら、頼む」

さて。直哉の策が上手くいくかどうかはわからないが、やれるだけの事はやっておこう。

Ｓｉｄｅなのは

レイジングハートを装備した私は、あの女の子の所まで行きました。

「・・・・・・」

女の子はこの前と同じ、とても哀しい眼で私を見ています。

「・・・私がジュエルシードを集める理由は、ユーノ君の探し物だから・・・そのお手伝いをしたかったから・・・それに、私の大切な人達を傷つけないため・・・魔法と関係無い人達を巻き込まないために・・・」

「・・・・・・」

「教えて・・・あなたはどうしてジュエルシードを集めるの？」

「・・・話しても、意味なんて無い」

「ッ！　そんな事を言う理由も、話してくれなきゃわからないよ！」

そう言って身を乗り出した私の後ろで、何が光った。見ると、そこにはヴリトラさんを呼びだしたライナ君しかいませんでした。

「転送魔法・・・なるほど、優秀な使い魔だ」

女の子が言った事で、私はそれを誰がやったかを理解しました。

「・・・ユーノ君は使い魔じゃないよ。私の大事なお友達！」

「・・・さっきも言ったけれど、私達の目的を話しても意味は無い。君も私も、ジュエルシードを集めている。違う目的で」

「そんなのって・・・」

「私達は敵同士。協力したりは出来ない・・・だから、話しても、何も変わらない」

そう言って、女の子は私にその杖を向ける。

「・・・話しても、何も変わらない？　だからって、話さなくても良いわけじゃない！！」

「・・・賭けて。お互いのジュエルシードを一個ずつ」

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』

『Ｐｌａｓｍａ　Ｓｍａｓｈｅｒ』

女の子の言葉に、私はレイジングハートを構えて砲撃の準備。同時に女の子も砲撃を構えていました。

「ディバィィィン・・・バスター！！！」

「プラズマ・・・スマッシャー！！！」

私の桃色の砲撃と、女の子の金色の砲撃がぶつかりあって、拮抗する。

「レイジングハート、お願い！！」

『ＯＫ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ』

私が願うと、レイジングハートが出力を上げ、砲撃の威力が増す。

「・・・・・・ッ！」

私の砲撃は、そのまま女の子を飲み込んだ。

「・・・・・・」

辺りに砲撃の影響で発生した煙が立ち込める。

「あの子は・・・？」

『Ｍａｓｔｅｒ！！』

「えっ！？」

レイジングハートの言葉に振り向くと、そこには鎌を私に降り下ろす女の子の姿があった。

Ｓｉｄｅ直哉

あの狼と一緒にユーノの転送魔法を受けた僕は、ユーノと共にその狼と戦っていた。

「流石は犬・・・自然の中じゃ元気一杯か・・・」

『だから、狼だって何度言えばわかるんだい！？』

何か言ってるけど無視。

「ブレイクシューター！　シュート！！」

『Ｂｒｅａｋ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

狼に向かって六発の魔力弾を放つ。

『残念。そいつはもう、見慣れたよ！』

が、狼はそれをあっさりと避ける。
「くそっ！　犬畜生の分際で！！」
『畜生！？　犬はまだしも畜生！？』
僕の言葉に狼がショックを受けたように叫ぶ。
『隙あり！！』
『っ！？』
そこを、ユーノがバインドで拘束する。
「ナイス、ユーノ！」
『Ｓｌａｓｈ　ｆｏｒｍ』
バインドをかけられた狼に、スラッシュフォームにしたイヴィを向ける。
『くっ・・・！』
「勝負あったな」
『教えてもらうよ。あなた達がなぜジュエルシードを集めるのか』
『・・・・・・』

僕達の言葉に、狼は俯く。

『・・・クスッ』

「『？』」

が、次の瞬間にはなぜか笑っていた。

『残念だったねぇ・・・アンタ達のお友達、負けたみたいだよ』

「『！？』」

Ｓｉｄｅライナ

砲撃勝負の直後、フェイト・テスタロッサは鎌の刃をなのはの首元に添えて動きを止めている。

それは同時に、勝負の決着を意味してもいた。

『Ｐｕｔ　ｏｕｔ』

そして、レイジングハートがジュエルシードを一つ吐き出した。

「!?　レイジングハート、何を・・・!」

「・・・きっと、主人思いの良い子なんだ」

吐き出されたジュエルシードを手に、フェイト・テスタロッサはなのはから離れる。

「『なのは!!』」

そこに、バインドで拘束された狼を引き摺った直哉とユーノがやって来た。

『さ、流石アタシのご主人様・・・』

「アルフ!?」

引き摺られてズタボロの狼・・・アルフを見て、叫び声を上げるフェイト・テスタロッサ。

「ん?　ああ、悪い。運ぶのが面倒だったから引き摺ってきちまった。すぐに返すよ」

そう言って、直哉はアルフにかけられたバインドを壊す。

『あ痛たた・・・』

「大丈夫？」

『ああ、なんて事無いよ』

「・・・あの」

そんな二人に、なのはがおずおずと語りかける。

「・・・名前を教えて？　私・・・」

「・・・フェイト。フェイト・テスタロッサ」

なのはの言葉に、フェイト・テスタロッサは以前俺にした時と同じように淡々とした口調で名乗る。

「わ、私は・・・あっ」

なのはが名乗るのを待たず、二人はその場から去っていった。

「・・・・・・ヴリトラ？」

『問題ねぇぜ、大将。バッチリ”匂い”は覚えました』

「そうか。なら、しばらくした後で追ってくれ。気取られないようにな」

『了解！』

Ｓｉｄｅなのは

『なのは・・・』

「大丈夫か？　怪我とかは・・・」

項垂れる私に、ユーノ君と直哉くんが言います。

「ごめんね、二人共・・・また、負けちゃった・・・」

『・・・・・・』

「・・・ま。あんまり気にするなよ。全部が終わったわけじゃない。もっと練習積んで、次に見返してやればいい。だろ？」

落ち込む私に、直哉くんは笑顔で私の頭を撫でながら言ってくれました。

「・・・・・・うん」

そう言って、私は直哉くんにすり寄ってしばらく頭を撫でてもらいました。

Ｓｉｄｅフェイト

「アルフ、大丈夫？」

「なぁ～に、大した事無いよ。擦り傷程度だし、すぐに治る。だから心配しなくて良いよ」

「そっか・・・」

ジュエルシードを回収した後、私とアルフは活動拠点のマンションに戻っていた。

「にしても泥だらけだねぇ。お風呂入ってきたらどうだい？　結局温泉にも入らなかったんだし」

「・・・そうだね。そうするよ」

チャプ・・・

「ふぅ・・・・」

シャワーで汗や泥を洗い流して、お風呂に浸かる。

「・・・何もしてこなかった・・・・」

そう。ライナは今回、数で勝っていたにも関わらず、私とあの子の戦いを見ているだけだった。

「・・・何か考えてるのかな？　それとも・・・・」

頭にいくつも考えが浮かぶけど、強引にそれを打ち消す。

「・・・・のぼせちゃう」

そう言い、私は立ち上がり、浴室から出て着替えを始める。

『おぅおぅ。なのはの嬢ちゃんと同い年にしちゃあ、随分と発育が良いな』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

突如として脱衣所に響く謎の声。

『おう。こっちだこっち』

私を呼ぶ声の主は、洗濯機の上で丸くなっている謎の生き物。

「・・・・・・・・・・・・」

『あれ、フリーズってる』

そう言うと、その生き物は小さな羽をパタパタとはばたかせて私の目の前まで来る。その姿を見て、私はそれがドラゴンの一種であると認識した。

『俺の名前はヴリトラ。よろしく頼むぜ、フェイトの嬢ちゃん』

私の事を知る謎の生き物改め、ヴリトラは軽快な口調で言ってくる。

「・・・・・・き」

『？　き？』

「キャアアア

『いや、俺は別に何も・・・！』

「アアアア、アルフ！　早く捕まえてぇ！！」

「り、了解！！」

『ちょっと待て狼もどき！　まずは話を聞いギャーーーーーーーーッ！！』

第十二話「対峙」（後書き）

ｊ「後書き座談会、復活！！」

イーヴィルハート（以下、イ）「テンション高いですね。まぁ、久しぶりですので無理も無いかとは思いますが」

ｊ「いらっしゃい、イーヴィルハートさん。今回のゲスト、よろしく」

イ「はい。微力ながら努めさせていただきます」

ｊ「じゃ、前回並びに今回の振り返り。前回は温泉に到着と蛍と社の家族構成と、蛍のある一面が明らかになりました」

イ「そう言えば、あの女湯に連行されるシーン。ユーノさんは本来ならあのまま女湯に入っていたんですよね？」

ｊ「そだよ。動物の姿である事を逆手に取ってそんな真似したから、以降何年にも渡って淫獣とか呼ばれるハメになったんだよね」

イ「ですが、あの時はマスターに助けられてましたね」

j「ああいう結末もあっていいかなって思って」

イ「なるほど。それでは、今回についてですが」

j「うん」

イ「・・・・・・もっと私に出番を」

j「・・・・・・今回は、なのはとフェイトの二度目の交戦でしたね。でもって、直哉とライナがフェイトの所にヴリトラを送りこむという暴挙に」

イ「（流された・・・）暴挙・・・ですか。まぁ、かなり危険を伴う事は確かですが」

j「まぁ、詳しい事は次回だね」

j「というわけで、第十二話、いかがだったでしょうか？　次回は、ちょっとしたオリ話を入れたいと思います」

イ「ご意見やご感想、ご指摘される点などがあれば、ぜひお願いいたします」

j「それと、前書きでも書きましたが、お気に入り登録件数が１０件を越えていました！　この事を励みに、これからも頑張っていきたいと思います」

j、イ「ではまた、次回にお会いしましょう」

第十三話「少年の意志、少女の思い」（前書き）

第十三話投稿です。

一昨日上げたばかりですが、最新話投稿です。

ていうか、前回の話を上げた後、評価がめっちゃ上がってました。
評価してくださった方々、どうもありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

今回は少し短いです。

では、駄文ですが、楽しんでいただけたらと思います。

第十三話「少年の意志、少女の思い」

Ｓｉｄｅフェイト

『・・・まぁ、そんな訳でありまして・・・』

お風呂場での騒動の後、アルフに拘束されたドラゴン・・・もとい、神龍と名乗る黒い生物、ヴリトラから、なぜ、どうやってこの家に来たのかを聞きだした。

「ライナが、私を・・・？」

『ああ。珍しい事に、会って間も無いあんたを大将は結構気にかけてるみたいだ。理由は知らんが』

「そう、なんだ・・・／／／／」

ライナが私を気にかけていた。

・・・何で嬉しく思うんだろう？

「・・・で？　アタシやフェイトが何をしてるのかを見て、アンタの主に報告するってことかい？」

『そうなるな』

「・・・・・・」

アルフが訝しげにヴリトラを睨む。でも、アルフの反応は当然だと

思う。
そんな事をしたら、私達の行動は筒抜け。これは明確な敵対行動だというのだから。

『ああ、安心していいぞ。大将が気にしてるのは、あくまであんたらの結末だからな。俺が報告なりなんなりしようが、大将が邪魔する事は無いと思う』

「信じられるわけないだろう、そんなこと！！」

バンッ！！

机を思いきり叩いて立ち上がりながらアルフが言う。

「アルフ・・・」

『・・・信じる信じないはあんたらの自由だよ。けど、これだけは言っとく。大将は滅多な事じゃ人を騙したり嘘ついたりはしねぇ。ましてや、その行く末を案じてる相手なら尚更だ』

「「・・・・・・」」

『大将は優しいからな』

そう言うと、ヴリトラは羽と尻尾をたたんで、その場に丸くなる。
しばらくして、静かな寝息が聞こえてきた。

「・・・敵が目の前にいるっていうのに、呑気なもんだよ」

「・・・・・・」

「どうするんだい、フェイト？」

「え・・・？」

「今ならこいつを閉め出すなんて簡単だ。アタシはフェイトの判断に従うだけだから、フェイトのしたいようにするよ」

「・・・・・・」

不安な要素が無いわけじゃない。でも、さっきのヴリトラは、嘘を言っているようには見えなかった。

「・・・しばらく様子を見よう。それで、私達の邪魔になるようなら・・・」

「・・・わかったよ、フェイト」

「ありがとう、アルフ・・・さ。もう寝よう。次も頑張らないと」

そう言って、私達はそれぞれ自分の寝床へと向かう。

疑ってはいるけれど、ヴリトラやライナが私達の邪魔にならないなら、別に構わない。

そう思いながら、私は眠りについた。

Ｓｉｄｅ直哉

「・・・と、いう感じらしい」

「へぇ。じゃあ、ヴリトラも上手いことやってるんだな」

連休もあと少しで終わりとなった頃、フェイトの所に送ったヴリトラからの報告を受けたライナと、昼食の席でそんな話をしていた。

「だが、やはり疑いは消えないらしい。無理も無い事だがな」

「だろうね。いきなり敵対関係にある奴が乗り込んできたんだ。疑うなって方が無理な話だ」

そう言って、僕は茶碗に残ったご飯を掻き込む。

「ごちそうさま、っと」

食器類を台所で水に浸し、リビングのソファにかけてあったシャツを羽織る。

「？　出かけるのか？」

「ああ。なのはが、買い物ついでに相談したい事があるっていうからさ。ちょっと行ってくるよ」

「わかった。あまり遅くなるなよ？」

「ん。んじゃ、行ってきまーす」

そう言い、家から出て歩きだす。天気は快晴で、陽気が心地良く感じる。

「時間まではまだあるから・・・ゆっくり行こうか、イヴィ」

『はい、マスター』

イヴィとそんな軽い会話をして、僕はゆっくりと歩きながら待ち合わせの場所へと向かった。

「・・・・・・遅い」

待ち合わせの場所には、約束した時間の5分前には着いた。

なのははまだいなかったため、とりあえず待つ事にしたのだがそれから更に待つ事２０分。

「・・・一向に現れる気配も無いってどうよ」

『マスター、女性は色々と準備に時間がかかるものです』

「いや、それを差し引いてもこの遅れようは無いだろ」

もう２５分も待っている。

ていうか、あっちから誘っておいてこれは無いんじゃないか？

「・・・まぁ、帰るのもなんだからもう少し待つけど」

『その辺りは、いかにもマスターですね』

「うるさい」

茶化すように言うイヴィから顔を背けるように上を向く。

天気は実に快晴で、道行く人達も心なしか明るく見える。

そんな中で、ふと一組の家族連れが目に入った。

４、５才程の男の子を中心に、その両脇に両親が並び、３人共仲良さげに手を繋いで笑顔で歩いていた。

「・・・・・・」

『・・・・・・マスター』

「・・・やっぱ、羨ましいとか寂しいとか思っちまうな。ああいうの見ると」

『・・・確か、マスターがあの子くらいの歳の頃でしたね。リーシャと一哉(かずや)・・・マスターの父上が亡くなられたのは・・・』

「・・・うん」

目を閉じ、あの日の事を思い出す。

血の海に横たわる二人と、それを見て泣き喚く自分。

そして、そんな僕を見下していた一人の男の姿を・・・

『マスター!!』

「っ!?」

『・・・血が』

「え・・・?」

イヴィの言葉で、僕はようやく血が滲むほどに唇を噛みしめていた

事に気がついた。

「・・・ごめん、イヴィ」

『いえ・・・』

「・・・・・・見つけ出す」

『・・・・・・』

「見つけ出して・・・報いを受けさせてやる・・・必ず・・・！」

『・・・まずは血を拭って、目立たないようにしてください。せっかくのデート前に、それでは台無しですよ？』

「うん・・・って、はい？」

『？　デートでは？　異性と二人だけで買い物するというのは。少なくとも、リーシャと一哉はよくしていましたよ？』

「いや、あの二人と僕らを一緒にされても・・・てか、何も二人だけとは限らないだろ」

『そうでしょうか・・・？』

「直哉くーーーーーん！！！」

「・・・まぁ、それについては後だ。まずはあのアホの子にＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩしないと」

『・・・あまり手荒な事はしないように』

そんなイヴィの言葉を流し、僕はこちらに向かって走って来るなのはの所へと歩いていった。

「うぅ・・・まだ痛い・・・」

「だから、悪かったって言ってるだろ？　さすがにやりすぎたとは思ってるから」

あの後、なのはに強めのアイアンクローと共に説教をし、今は二人で商店街を歩いている。
本当はアリサとすずかも来るはずだったらしいのだが、なんでも二人して家の用事が入ってしまったらしく、二人で行く事になったのだ。

・・・二人だとわかった瞬間、イヴィが「どや？」と言わんばかりに茶化してきたがスルーしておいた。

「で？　買い物って言ってたけど、何を買いに行くんだ？」

「うん。お店で使うための道具とか、あと、新しいお洋服とかも。お母さんからも許可はもらってるし」

「そっか」

「ちょっと遠くに行く事になるけど、いいかな？」

「ああ。別に良いよ」

「ありがとうっ。それじゃあ、行こっ！」

そう言って、僕の手を引いて歩きだすなのは。

・・・お礼と一緒に見た笑顔にときめいたのは僕だけの秘密だ。

「・・・よし、と。このくらいかな？」

「終わったか？」

「うん！　それじゃ、次はお洋服なのっ」

「おう」

ここは海鳴市から少し離れた町の大型デパート。
翠屋で使うという道具を買い終え、僕達は上階にある服屋に向かっている。

「おお、なかなか大きい店だな」

「お洋服がいっぱい・・・」

そこには、子供の物から大人の物、メンズやレディースなど、デパートの一角とは思えないほど大きな店だった。

「参ったな・・・狭けりゃ別行動でも取ったんだけど・・・こうなったら一緒に回った方がいいか？」

「ふぇ、なんで？」

「いや、だって迷うだろ？　・・・お前が」

「にゃっ！？　ひどいよ直哉くん！」

「ははっ。じゃあ、行こうぜ」

「む～！！」

頬をこれでもかという程に膨らませるなのはの手を引き、店内に足を踏み入れる。

・・・途中、周りの人達から「あらあらまぁまぁ」みたいな温かい視線を受けた。なぜに？

「う～ん・・・やっぱ、僕だけじゃなくてライナにも何か買っていってやらないとなぁ・・・」

「お土産？」

「ああ。ライナ、服とかにあんまり頓着無くてさ。基本、僕が選んで買ったりしてるんだ」

「へぇ～」

「あいつもたまには服とかに気ぃ使えって話だけどな」

そうして、自分の分を探しつつ、ライナに似合いそうな服を探していく。

どういうわけか、ライナには白系統の服が圧倒的に似合うので、その色を中心に探していく。ちなみにライナ曰く、僕は黒系の服が似合うらしい。どうでもいいけど。

「ねぇねぇ直哉くん」

「ん？」

「こっちとこれじゃ、どっちが良いかなぁ？」

そう言ってなのはが見せてきたのは、淡いピンクのシャツに黒のミニスカートと、薄い水色のワンピースだった。

「・・・なんで僕？」

「だって、ライナ君に色々選んであげてるって言ってたから、直哉くんのセンスを頼ってみようかなって」

「ふむ・・・」

悩んではみたものの、ぶっちゃけ僕の中で既に答えは出ていた。

「・・・そっちのシャツとスカート」

「そう？　じゃあ、こっちにするね」

そう言い、なのははワンピースを戻し、シャツとスカートをカゴに入れる。

「直哉くんの方は？」

「ん？　ああ、僕も終わってる」

「じゃあ、買っちゃおっか」

「ああ」

「今日はありがとう」

「ん？　いや、いいよ。僕も楽しかったし」

買った服の会計を済ませ、デパートを出た僕達は近場の喫茶店で休憩を取っていた。

「・・・じゃ、そろそろ本題に入ろうか」

「ふぇ？」

「相談、したい事あるんだろ？」

「あ・・・」

「・・・フェイトの事か？」

「・・・うん」

頷いた後、はぁ、とため息をつくなのは。

「・・・わかりあえないのかな、私達？」

「そうだな・・・むこうもそうだけど、お前も譲るつもりは無いんだろ？」

「うん・・・でも、それでも、何かできるはずなのに・・・」

「・・・・・・」

「・・・話しても、何も変わらないなんて言ってたけど・・・でも、話さないと何も伝わらないのに・・・」

悲壮な顔つきでなのはが告げる。

「・・・向きあってみたらどうだ？」

「え・・・？」

「真剣に。真摯に。正面から、まっすぐに。下手な事考えず、自分の素直な気持ちをぶつけてみればいいんじゃないか？」

「直哉くん・・・」

「な？」

身を乗り出してなのはの頭を撫でながら微笑みかける。

「はぅ・・・／／／／」

なぜか顔を真っ赤にして俯かれた。

「・・・ねぇ、直哉くん」

「ん？」

「お願いがあるんだけど・・・いいかな？」

「ものにもよるけど・・・何？」

「えっとね・・・その・・・」

「？」

「私と・・・戦ってくれないかな？」

「・・・

第十三話「少年の意志、少女の思い」（後書き）

j「後書き座談会～」

ヴリトラ（以下、ヴ）「ちーす。今回は俺やで～」

j「言語は統一してね。んじゃ、早速始めるよー」

j「今回は直哉となのはのデート回でした」

ヴ「その前に、直哉の心境が明かされたな」

j「うん。直哉の本分は両親を殺した相手を憎むことだからね。普段はああだけど、心の奥底の憎悪は果てしないよ」

ヴ「なるほどねぇ・・・てか話は変わるけど、着々と直哉がなのはの嬢ちゃんとの距離を縮めてる気がするんだけど」

j「本人は無意識です。キャラ紹介にも書いたけど、直哉は親しい人にはとことん優しいから」

ヴ「そうか・・・てか、最後のあれ・・・」

j「うん。まぁ、次回を楽しみに、って感じ」

j「そんなわけで、第十三話、いかがでしたか？」

ヴ「指摘する点、意見や感想なんかがあれば、ぜひ頼む」

j「次回は今回の直後のオリ話になります。その後、原作に戻そうと思います」

j、ヴ「では、また次回にお会いしましょう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4707y/

魔法少女リリカルなのは 〜憎悪の戦士と神龍の騎士〜

2012年1月4日09時48分発行